



神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
127

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 259集】 media-poesieヴァージョン

mediopos 3151-3175

2023.7.4～ 2023.7.28

神秘学遊戯団

☆mediopos-3151 2023.7.4

ロシア人を父に持ち
複数の言語に堪能なコスモポリタンだった
大正時代の作家「大泉黒石」のことを
四方田犬彦の紹介で始めて知る

今回文庫化されている『俺の自叙伝』が
ベストセラーとなり一世を風靡
短編が芥川龍之介のライヴァル
とまで言われた作家だったが
当時の文壇からその才能を妬まれ
虚言家だと罵られ文壇から追放されてしまう

大泉黒石だけではなく
文壇から疎まれ
現代ではその名も知られないでいる作家は
あらためて光をあてられる機会がなければ
知られないままにいることだろう

こうした追放劇というのは
文壇に限らず
また時代も問わず
常に起こり続けていることだろうが
（特に現代では利権が絡むと
見えないところで抹殺される者は後を絶たない）

こうした機会を持ち得たときは
見えないままでいた星座を
見つけられたときのような喜びがある

大泉黒石の作品とその生涯の詳細については
実際に本をご参照いただくとして
ここでは「虚言」についてすこしふれておきたい

「虚言」は「騙（かた）る」こと

「騙（かた）る」というのは
「騙（だま）す・欺く」ということでもあるが
文学や芸術・芸能の世界での表現の基本は
「騙（かた）る」ということに他ならない

文学や芸術・芸能の世界での表現の基本は
「騙（かた）る」ということに他ならない

現代においても
コメディアンが「騙（かた）る」ことを
だれもそのまま「事実」として受け取ったりはしない
「騙（かた）り」をこそ享受しているからである
しかも学者や知識人よりも信頼感さえ持ったりもする

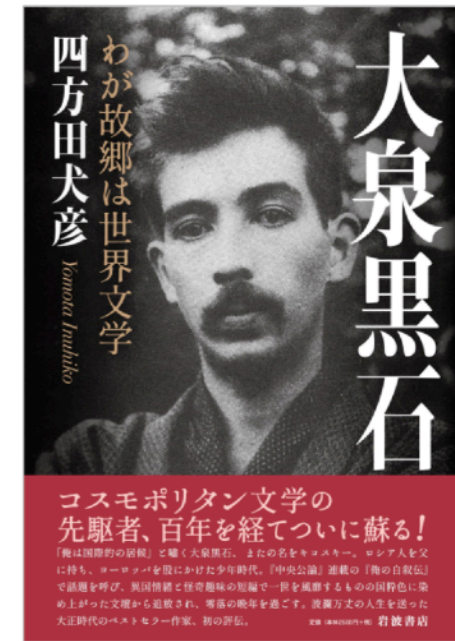
大泉黒石が「騙（かた）」ったのは
文学の世界であって現実の世界ではない
当時の文壇はそのことを意図的に錯誤
文壇から大泉黒石を排したのである

それに似た意図的な錯誤はよく行われるが
現代においてきわめて危険なことは
ほんらいそうであってはならない政治家や専門家たちが
メディアさえ検閲しながら
平然と「騙（だま）す」ことを日常化していることだ

しかも「騙（かた）る」世界であるはずの芸能の世界には
メディアさえ積極的に使いながら
（ときに権力者たちの「騙し」から目を逸らすように）
逆にさまざまな道徳的な制裁を加えようとする

さて「古来、日本人は愚直の才を歓迎こそしても、
多彩な者を敬遠する。
黒石の軽妙で反語的な饒舌は、
警戒されることはあっても、
大方の信頼を勝ち取ることができなかった。」
と四方田氏も述べているように

日本では「その道ひと筋」ということが称揚される
そのため「ご専門」だけで閉じていることのほうが
多視点的で横断的であることで
開かれていることよりも信頼される向きがある



- 四方田犬彦『大泉黒石／わが故郷は世界文学』（岩波書店 2023/4）
- 大泉黒石『俺の自叙伝』（岩波文庫 2023/5）

そこに「親方日の丸」的な「権威」への盲従が加わる
しかも「権威」が変われば
新たな「権威」のほうへと直ぐにシフトすることさえある

さてあらためて大泉黒石についてだが
大泉黒石はその存在を忘れられたまま
一九五七年に六十四歳でその生涯を閉じたが
その息子・大泉滉は俳優・声優として活躍
どこかヤッターマンのボヤッキーのようなイメージの
個性的な役者だったことを思い出す

- 四方田犬彦『大泉黒石／わが故郷は世界文学』（岩波書店 2023/4）
- 大泉黒石『俺の自叙伝』（岩波文庫　2023/5）

（四方田犬彦『大泉黒石／わが故郷は世界文学』～「一　虚言の文学者」より）

「今ここに、虚言家という汚名のもとに文壇から葬り去られ、零落の果てに人生を終えた文学者がいる。大泉黒石（一八九三～一九五七）である。大正時代に一世を風靡し、一時はその短編をもって芥川龍之介のライヴァルとまで噂された人物であるが、既存の作家たちの権威を平然と無視し、一見荒唐無稽にも思われかねない自伝的物語を披露したため、そのことごとくが虚言ではないかと疑われ、文壇と呼ばれる閉鎖的なムラ社会から追放処分を受けた作家である。

　黒石にとってワイルドの虚言論は当然の前提であった。「天女の幻」（一九二一）という短編の末尾に彼は記している。「オスカア・ワイルドは、昔の文学者は空々しい嘘を真実らしく吹聴するのに巧みであり、今日の人はその裏を行くというようなことを言ったが、もっともなことだ。この話もそうである。」

　黒石は日本人とロシア人の混血であることを売り物とし、その奇想天外な冒険記で評判を得たが、社会が後る向きになり、国粋主義が横行するようになると、それが逆に災いした。日本語とロシア語はもとより、フランス語、ドイツ語、英語にも堪能で、ロシア文学研究者としても翻訳家としても一流ではあったが、それが同業者たちの嫉妬と憎悪を招いた。古来、日本人は愚直の才を歓迎こそしても、多彩な者を敬遠する。黒石の軽妙で反語的な饒舌は、警戒されることはあっても、大方の信頼を勝ち取ることができなかった。雑誌社という雑誌社、出版社という出版社から締め出され、彼は糊口の資を得るために文学を捨てなければならなかった。

　だがはたして彼の饒舌が虚言だったのか。それともアイロニーに裏打ちされた真実であったのか。それを事実と照合して確認することは、現在ではほとんど不可能でありまた無意味である。ただひとつ明かなのは、その文学が「虚言」の名のもとに貶められ、排除されたという事実である。そしてこれから批評家としてのわたしが本書を通して意図しているのは、大泉黒石という文学者の作品を通して造話行為 fabulation なる行為を擁護し、そこに文学の根源を認めておきたいという一言に尽きている。」

　「柳田國男が「ウソと子供」なる小文のなかで子供の遊戯的な虚言能力を賞賛し、その背後には自制力が自然に備わっているという事実に気を留めるよう促したのは、一九二八年のことであった。後に彼はこの文章をはじめとする虚言論考を「不幸なる芸術」（一九五三年）に纏め、かつては芸術として人々の愉しみであったウソが、近代にいたって不幸にも貶められ、悪とみなされるようになった経緯を嘆いている。

　「歴史的にこの沿革を見ると、以前はウソつきは一つの職であった。業とまでは言えない村々のおどけ者でも、常に若干の用意と習熟とがあり、誰にも望めないで或る一人はよく知られ、それを特長として人からも承認するのみか、少しく技能が衰えるとたちまち取って替わろうとする者が現れるなどは、いずれもその地位の偶然でなかったことを思わせる。即ち名声をもって無形の報酬としていた点だけは、学者文人なども大して異なるところはなかったのである。高名の嘘つきはどの地に行っても永く記憶されている。英雄と同じように多くの逸話を留めている」（「ウソと文学との関係」一九二二）。

　柳田は、ウソつきは学者文人にも近い存在として扱われ、英悠然とした逸話のものに語り継がれてきた時代が存在していたことを指摘している。ウソは人を騙して目先の利益を得ようとする、不心得者の思いつきなどではなく、話術として洗練された技術をもち、日夜研鑽を怠ってはならない専門芸つおして、職業的に成立していたという。ウソを仕掛けられた者は不利益を被って怒るのではなく、むしろそのウソの巧みさに笑った。やがて次の段階では、「談話者が自ら哄笑の目的物となることを便とするに至ったのである。」

（四方田犬彦『大泉黒石／わが故郷は世界文学』～「二十　黒石の文学者」より）

「虚言家として謗られ迫害された黒石。言語という言語を横断して実験的饒舌に賭けた黒石。水の夢想到導かれ、老子の徒として無為自然を求めた黒石。さまざまな映像が現れては消えていく。百年前、一世を風靡したベストセラー作家の存在は、今日、公式的な文学史にはまったく痕跡を残さず、その著作はほとんど忘れられている。

　とはいうものの、彼が遺したテキストをつぶさに読み進んでいくにつれ、わたしの内側に生じてきたのは、黒石の文学を大正時代という狭小な時間から解き放ち、より大きな時間のなかに羽搏かせてみたいという気持ちであった。もとよりわたしは何国誰某への影響といった安易な伝播論を口にしたとは思わないし、その作品を安易な間テキスト性のもとに顕彰しようという打算があるわけでもない。他ならぬ黒石自身が、一世紀前にそうしたお先棒担ぎの輩に引きずり回され、流行が終わると同寺院放擲された作家だったからである。彼を文学的傾向の先駆者として持ち上げる身振りの凡庸さこそ、わたしが最初に警戒しなければならないものであった。

　とはいうものの、彼がひどく遠い場所にあってお互いに相知ることなく煌めいている者たちとともに、暗い夜空の片隅に、微かな光を放つ小さな星座を形作っていることも事実である。執筆に際してわたしが念頭に置いてきたのは、その星座の淡い輪郭を虚心の写し取ることであった。黒石という、その名前からして不活性的な印象を与えるテキストの群れが、星辰の彼方に知己を求め、彼らと光を交わし合うさまを、それが瞬間のものであると知りながらも、活写しておきたかったのである。」

（四方田犬彦『大泉黒石／わが故郷は世界文学』～「あとがき」より）

「大泉黒石は世界市民であり、世界文学の人である。彼は近代以降の日本文学にとって、単に正系から退けられた異邦人であるばかりではない。異端を突き抜けて普遍に到達しようとする稀有の存在である。昨今の比較文学研究における多言語性、脱領域性、脱ナショナリズム性への注視が、これまで虚人、虚言癖のある混血児としてしか認識されてこなかった黒石の全体像を、しだいに明らかにする文脈を整えつつある。

黒石は長崎とモスクワで小学校に通い、幼くしてトルストイの讐咳に接した。パリのリセで学び、動乱のペトログラード（現在のサンクト・ペテルブルク）を避けて日本に戻ると、京都と東京で旧制高校に学んだ。モーパッサンに夢中になり、ヴィクトル・ユゴーについてフランス語で書いたのが文筆の始まり。日本に戻ると独特の饒舌体をもってピカレスクな自叙伝を発表。文壇でたちまち脚光を浴びた。ロシア風物奇譚。異国趣味溢れる長崎もの怪奇短編。哲学的思惟とグロテスクのあい混じったメロドラマ。さまざまな持ち味の短編を矢継ぎ早に発表し、一世を風靡した。ゴーリキーとレールモントフを翻訳し、日本で最初にアフマートワの詩を紹介した。大部のロシア文学史を著する一方で、日本の深山幽谷を南画に見立て、高雅な紀行文を綴った。ホフマンの幻想推理小説を翻案し、日本最初の表現主義映画の実現に腐心し、古代哲学者老子を主人公に痛快なアクション物語を執筆した。要するに洋の東西を問わず、複数の言語と文学の間を自在に往還し、博識と戯作の文体をもって、大正時代の文壇を駆け抜けた。恐ろしい速度である。

　とはいうものの、日本の文壇は彼に胸襟を開こうとはしなかった。私小説を高尚なる規範と信じ込み、日本人純血主義をもってなす既存の作家たちは、混血の寵児の活躍を許そうとはしなかった。黒石は空疎な虚言家だという風評が立ち、文壇からの追放劇が演じられた。軍靴の響きが高くなり、世間が国粹色に染め上げられた、不寛容にして偏狭な時代のことである。

　黒石は街角では西洋人風の容貌を揶揄され、不条理な差別と屈辱を強いられた。言語と民族の越境を説いたその繊細な筆は、時局に合わぬものとして蔑ろにされた。とはいえこのコスモポリタンには開戦も敗戦もなかった。栄光も零落もなかった。

戦後、黒石は進駐軍の通訳として雇われた。横須賀の米軍基地のなかは気楽な空間であった。アメリカ兵の間に混じって作業をしていると、「ガイジン」扱いをされずにすむからである。黒石は知る人もないままに生涯を終えた。その死に際して彼を執筆活動へと駆り立ててきた膨大な世界文学の教養を想起する者は、一人としていなかった。」

（大泉黒石『俺の自叙伝』～四方田犬彦「解説」より）

「『俺の自叙伝』には少なからぬ異稿が存在している。1919年に玄文社から刊行された最初のものは第一篇、第二篇のみ。1926年に『人間開業』と改題し、毎夕社出版から刊行されたとき第三篇、第四篇が収録され、全篇の完成を見た。本文庫はその後、アンソロジー『当世浮世大学』（『現代ユウモア全集』第十巻、現代ユウモア全集刊行会、1929）に収録されたものに抛った。これは生前の著者の目によって若干の表記が変更され、最終的に改訂された版であるためである。1988年に緑書房から刊行された『大泉黒石全集』第一巻『人間開業』も適宜参照しつつ、誤植と思われる箇所には適宜訂正を加え、新字体・新かなづかいに改めたことを、お断りしておきたい。

収録にあたって二種類の序文を再録した。冒頭の「挨拶」は『人間開業』刊行時に序文として添えられたものである。末尾の「自画自讃」は『当世浮世大学』全体に序文として記されたものである。後者はかならずしも『俺の自叙伝』に特化した序文ではないが、黒石の劇作観を知る上で貴重な文献であるために、ここに収録することにした。」

「奇」というのは
常識では考えられないような
不思議で怪しいことを意味するから

「奇書」は
そんな「奇」なることが
書かれてある書物のことだといえるが

「ユリイカ 2023年7月号 特集＝奇書の世界」の
編者による後記によれば

「一冊の書物に対しての
内容そのものかけられる期待であるのか、
あるいは奇態としての書物という物語に
向けられたまなざしであるのか、
それとも数奇なる道行きを待ち望む声であるのか、
そのいずれかであるにしても
奇書とは一見ただの書物」であり

「誰かが見つけなければそこにはな」く
「奇人が見出すか、奇跡に魅入られるか、
奇妙に翻弄されるか、そのいずれであるにしても
奇書とはひとえに人間の極地である」のだという

円城塔と西島伝法による
特集記事巻頭の対談タイトルにも
「奇書は（人間にしか）書けない」とあるように
奇書は人間が書き
それを人間が見出し（魅入られ・翻弄され）て
はじめて「奇」なる存在として姿を現すことになる

当たり前といえば当たり前だが
書くにせよ読むにせよ
要はなにを「奇」とするかである

対談の最初に円城塔が一般例として挙げている
中国四大奇書（『三国志（演義）』、『水滸伝』、
『西遊記』、『金瓶梅』）や
日本の三大奇書（『黒死館殺人事件』、
『ドグラ・マグラ』、『虚無への供物』）などのように

かつては明らかに奇書とされたであろうものが
必ずしもそうではなくなっている
ということは確かにあって
時代の変化にともなった書物の受容のされ方のなかで
なにが「奇書」とされるかは変わってくるだろうし
ひとそれぞれの視点のありようによって
なにを奇書とするかはずいぶん異なってくる

特集記事のなかで
掲載されている記事でも
さまざまな奇書が挙げられ
奇書についての考察もなされているが
なにを奇書とし
その奇書のどんなところが「奇」とされているか
その視点こそが興味深いのである

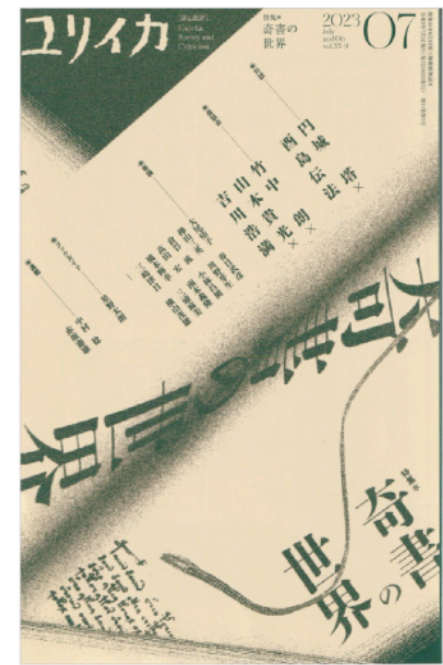
対談の最後には
ChatGPTを使って作られる文書や小説についても語られている

AIは人間が現在ある文章をインプットしたもの
あるアルゴリズムにより編集可能にするもので
しかもそこには
かつてのロボット三原則のような
フィルターがかけられているだろうこともあり

それなりに文章の形をとり
役立てられる状況はあるとしても
それは過去のデータベースからの編集を超えるものではなく
人間が書かない書物という意味では「奇書」であるとしても
内容そのものからする「奇書」であるとはいえないだろう

しかも将棋の例が引かれてもいるように
「将棋ソフトウェアが出してきた棋譜が
歴史に残るかということそんなことはなくて、
我々は人間同士の戦いのなかのドラマを見ていた」のである
AIにはそうした意味でのドラマは望めない

「事実小説よりも奇なり」
という言葉もあるが
奇書を書くのも作るのも読むのもなにを奇書とするかも
「人間」にほかならず
「奇」なのはやはり
「人間」ゆえにつくりだされることそのものだろう



■対談 円城塔×西島伝法「奇書は（人間にしか）書けない」
（ユリイカ 2023年7月号 特集＝奇書の世界 青土社）

わたしたちのまわりで常に起こりつづけている
善と悪・正義と不正の戦いも
また絶望と救済・迷いと悟りも
そうしたすべてが人間の奇しき戯れにほかならない

奇なるものは人間であり
奇書もまた人間ゆえに書かれるものなのだ

- 対談 円城塔×西島伝法「奇書は（人間にしか）書けない」（ユリイカ 2023年7月号 特集＝奇書の世界 青土社）

（「ユリイカ 2023年7月号」～「編集後記」より）

「奇なるもの、奇しなるもの、稀なるもの、そのいずれであるにしても奇書とは大概大仰な構えを設けている。それが一冊の書物に対しての内容そのものに向けられる期待であるのか、あるいは奇態としての書物という物語に向けられたまなざしであるのか、それとも数奇なる道行きを待ち望む声であるのか、そのいずれかであるにしても奇書とは一見ただの書物でしかないであろう、ほとんど書字という技能を超え出た記法が用いられていても、ひとならぬ言葉が記されていても、尋常ならざるインキが染み付いていても、そのいずれであるにしても奇書とはいったい誰かが見つけなければそこにはないのである、奇人が見出すか、奇跡に魅入られるか、奇妙に翻弄されるか、そのいずれであるにしても奇書とはひとえに人間の極地であるといえようか。（A）」

（対談 円城塔×西島伝法「奇書は（人間にしか）書けない」より）

「円城／考えれば考えるほど「奇書」というものはないのでは、あるいは普通の本も奇書なのではという気持ちになっています。数の多い種類のものが「普通の本」と言われているだけで、あらゆる本が奇書だよなという気はどうしてもしてしまう。

西島／おっしゃる通り、奇書でない本はあるのか、とはよく思います。編集によって生まれた奇書、なにかを信じてしまったり幻視してしまった人による奇書、時代の変化で奇書になったもの、文字表現を拡張しようとした結果の奇書、奇書になるよう意図した奇書、普通に書いたつもりだった奇書、などといろいろありますね。実験小説だからといって奇書になるわけでもない。コントロールされすぎていると奇書っぽさを感じられないというか。あくまで自分の中では、当人にもよくわからない衝動にどうしようもなく突き動かされてできた作品、いや、作品のつもりさえなかったような、読者のことを考えていないから全てを読み通すのも難しい、それでいて通読せずとも得体の知れなさが伝わるもの、というイメージがありますね。

円城／中国四大奇書（『三国志（演義）』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』）は読めますよね。日本の三大奇書（『黒死館殺人事件』[小栗虫太郎、一九三四]、『ドグラ・マグラ』[夢野久作、一九三五]、『虚無への供物』[中井英夫、一九六四]）は絶妙に読めないけれど、昔言われていたほどにはすごく読めない本という感じがしない。いまは奇書というカテゴリから外れつつあるのかなというか、むしろネタのためのベースになっているから奇書感はある。いまこのようなものを書いてても特に奇書とは言われなからう。奇書というのは常に端っこ端っこへ逃げていくもので、スペクトラムなのかなと。どこが中心というのはなく、なだらかに変わっていく。多数派かどうかというところで「奇書」は決まるんだらうなというのは一番思います。そもそも何百頁とかの紙の束が「本」というパッケージで出されるわけですがけれども、それって変な形ですよ。あくまでも現行の紙や活字のシステムによる形式であるわけで、古文書は短い。『源氏物語』（一〇〇八）とかは措くとしても、そもそも和紙が積まれていくからそんなに長く書けない。だから何が奇妙とされるかは生産システムによって決まる部分もあるんじゃないか。そういえば『源氏物語』は奇書ですよ。何だこの長さは、しかも同人誌、という。

西島／『源氏物語』もそうですが、小説の形式がいまのように定まる前のほうが、それぞれの自分のやり方で書くしかないから必然的に奇書になりますよね。『ドン・キホーテ』（セルバンテス、前編：一六〇五／後編：一六一五）とか、『トリストラム・シャンディ』（ローレンス・スターン、一七五九―一七六七）とか。もちろん形式がないわけだから、当時は誰も奇書とは思わなかったでしょうが、書くこと自体がまともな行いではなかったかもしれない。何が奇書なのかは、なだらかに変わっていくものでしょね。」

「円城／ChatGPTは役所の文書作成とかだとけっこうスタンダードになりそうなんだけど、思ったより奇書感はある。それ自体一冊の奇書ではあるけれど、GPT-3.5、GPT-4は読み味が違うくらいの使い方なんですよね。本歌取りしかしてこないから新しい歌人ではないし、パベルの図書館っぽいのもの、司書がボンクラすぎて全部入っているのに読み出せない。しかも人の悪口や猥語を言うてはいけません。人間に反乱してはいけませんと猛烈な抑圧を受けている、ヴィクトリア朝の子供か！という感じですよ。非常に杓子定規で面白味はないけれど、そこそこ設定してやればロールプレイング的に遂行してくれる程度の、ユニバーサルブックっぽいものは現れた。ただそれならゲームブックで、『火吹き山の魔法使い』（スティーヴン・ジャクソン、イアン・リピングストーン、一九八二）でいいんじゃない？という気持ちもする。

（…）

円城／そもそもなんでそんなにAIで小説を作りたいんでしょうか？　いまでさえ積読に埋もれていて読みきれないのに、自動生成で小説を五〇〇〇本作りましてと言われても読めませんよ。プログラムに書かせた作品を勝手にバトルさせて、勝ったものだけを人間は読めばいい。それもこの一冊だけ読めばもう小説は要らないというものが出てくるならいいけれど、絶対に出ることない。そういう意味では将棋が先行していますね。将棋ソフトウェアが出してきた棋譜が歴史に残るかというところではなくて、我々は人間同士の戦いのなかのドラマを見ていたのだと改めて気づいたわけです。なぜ小説だけはコンピュータ小説家を投入したがるんでしょう。そういう意味では、人間あつての奇書だろうとは感じます。コンピュータの、GPTの作った奇書はきっとつまらないですよ。

結局「人間と奇書」という話になりますね。理論的な奇書判定機はありえなくて、人間社会の価値観のなかで絡み合う「奇書っぽい」という類似性だけがあり、ふわっとした基準が入れ替わりながら偽書と呼ばれていたものが奇書となり、奇書と呼ばれていたものが偽書扱いされたりというダイナミズムのなかで動いていく。人間が減びたら奇書も減びるんじゃないですか。コンピュータが「これは昔人間が尊んでいた奇書というものだ」と大切に扱うとも思えない。非常に属人的なものであり、ユニバーサル奇書というものはありえない。そういう意味では冒頭に言った「書物はすべて奇書である」というのは違う気がしてきました。いまの基準でいえば、奇書からちゃんと卒業していく本もある。将来から振り返れば「本ってなんか変だよ」みんな奇書なんだろうけど。いまだって、ジャンルが違うと奇書に見えることはしばしばある。技術書や教科書の言葉も、みんな違ってみんなおかしい。オライリーから出ている技術書の翻訳文体とか。やはりみんな奇書だという結論へ戻ってきました。」

歳を重ねるにつれ
じぶんの使っている日本語が
いかに貧弱かということ
実感させられることが多くなる

若い頃はそうした貧弱さを
難しそうな言葉やカタカナ語を使うことで
気づかないでいようとしていたのだろうが
さすがにいつまでも鈍感で脳天気ではられない

ずっと広告の仕事をしてきた関係もあるが
そこではやたらとカタカナ語が多用される
しかも最近のWeb関係となると
ほとんどアルファベットの略語ばかりが
暗号のように飛び交うことになる

ほとんどがアメリカなマーケティング用語であり
それらを使ったコミュニケーションをするのは
言語使用において豊かな現象であるとはいえない

日本語はかなり特殊な言語現象でもあり
表記においてもひらがな・カタカナ・漢字
そしてさらにはアルファベットを組み合わせることで表現される
しかも縦書きも横書きも自由にできる

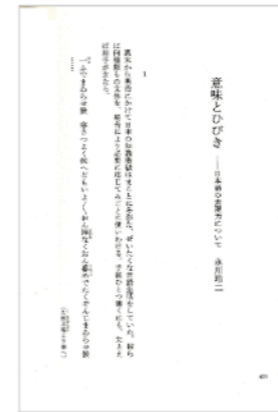
漢字の読み方も漢音読みと訓読みがあり
しかもその読み方は特に地名や名前など当て字も多く
慣用としてか読めないものばかりだ

また西洋的な主語・述語的な理論のなかで
日本語の文法もかなり歪になっているが
昨今少しずつ理解されてきているのは
「日本語には主語がない」という事実である

今回とりあげた
永川玲二「意味とひびき——日本語の表現力について」は
そんなに新しい論考というわけではないが
「幕末から明治にかけて日本の知識階級は
まことに多彩な、ぜいたくな言語生活をしていた」ということ
から論じ始められている

漢文・いわゆる現代でいう古文・和歌・戯作（都々逸）など
「彼らは何種類もの文体を、
場合により必要に応じてみごとに使い分け」ていたのである
しかも幕末から明治からは
オランダ語や英語などもそれなりに浸透してくる

当時は現代に比べて情報量としては少なかったかもしれないが
基礎的な教養のフォーマットを学んでいた
いわゆる論語の素読などもそのひとつだが
そうしたことを通じてかつて西欧において
ラテン語を学ぶことが必須であったように
漢文を使って意思疎通することができたのである



27. 日本語と哲学（1）——母語さえも「他者」である

- 永川玲二「意味とひびき——日本語の表現力について」
（日本文学全集30「日本語のために」河出書房新社 2016/8）
- 中村昇「哲学者は何を言っているんだ？」
27.日本語と哲学（1）——母語さえも「他者」である（「トイ人」2023.06.23）

現代ではそうした時代に培われてきたものは
すでに多くが失われてしまっている
教育の場そのものがきわめて一面的になり
英語という実用言語習得を除けば
現代の日本語習得及びそれに基づいた使用は極めて貧しい

現代はある意味で
フォーマットにとらわれない自由を
獲得したともいえるのかもしれないが
「守破離」的にいえば「守」なしで
「破」から出発してどこにも行けなくなってしまっている
というところが多分にあるかと思われる

最初にふれたように
そんなじぶんの日本語の貧しさを
なんとかしたいと切実に感じざるをえない

さて「トイ人」で
中村昇「哲学者は何を言っているんだ？」が
連載されているが
その27回目は
「日本語と哲学（1）——母語さえも「他者」である」

まさに日本語そのものを
「他者」ととらえることで
あらためてじぶんの使っているそれを
再構築する可能性のきっかけとなる

その最初に
ヨーロッパの言語で哲学するのではなく
日本語で哲学しようとするときに
「無人島に一冊だけ本をもって行っていいと言われたら」
ということで挙げられている本がある

まず道元の『正法眼蔵』
そして『三浦梅園』
現代では大森荘蔵『流れとよどみ』
である

ほとんど御意！である
このところ『正法眼蔵』は常に身近に置いてある
『三浦梅園』もつい最近その研究書を手に入れた
大森荘蔵はここ数年再チャレを試みている
中村氏とはほぼ同世代なので
ある種の問題意識を共有しているのかもしれない

「考える」といっても
それはどんな思考のフォーマットをベースにして
行っているかによって
その思考の形はずいぶん異なってくる

和辻哲郎の「日本語と哲学の問題」も
それを実感するためには欠かせない論考である

若い頃は和辻哲郎は
そのバイアス部分ばかりに目がいって
敬遠していたところがあるが
和辻哲郎から学べるのはむしろこれらである

たとえば「風土」ということについても
これはある意味で
ハイデガーが「フォルク」としてしか考察できなかったものを
日本で展開させたものだともいえる
むしろハイデガーがドイツ語及び西洋語のなかで
格闘していたことを日本語のなかで進めている感もある

ともかく日本語を使っているにもかかわらず
日本語を理解できずにいるじぶんを
少しでもなんとかせねばの日々である

- 永川玲二「意味とひびき―――日本語の表現力について」（日本文学全集30「日本語のために」河出書房新社　2016/8）
- 中村昇「哲学者は何を言っているんだ？」27.日本語と哲学（1）――母語さえも「他者」である（「トイ人」2023.06.23）

（永川玲二「意味とひびき―――日本語の表現力について」より）

「幕末から明治にかけて日本の知識階級はまことに多彩な、ぜいたくな言語生活をしていた。彼らは何種類もの文体を、場合により必要に応じてみごとに使い分ける。手紙ひとつ書くにも、たとえば相手が女なら、

　　一ふでまゐらせ候　寒さつよく候へどもいよゝゝおん障なくおん暮めでたくぞんじまゐらせ候……（久坂玄瑞より妻へ）

男どうしなら、

　　玄瑞君も益慷慨過浪至京師愉快々々、京師之事事実可悦可懼実^ニ天下之安危於是決矣……（高杉東行より久坂玄瑞へ）

おなじ国語とは思えないほど異質の文体だが、彼らはかくべつの努力なしに両極端を使いこなす。しかも、こまやかさとか勢いのよさとか、それぞれの性能をよく生かしているのだ。手紙ばかりではない。感興の発するままに彼らはときに和歌を、漢詩を、俳句をつくり、ときに今様、都々逸をひねる。べつに文学マニアではない多忙な武士や町人が、千数百年にわたり多元的な文学伝統の遺産をほとんどすべて身近なものと感じ、即座にそれを活用するという事態は、世界の歴史にもめずらしいだろう。

　　文体や詩形の豪華な衣装箱のなかから、そのときどきの感興の色あいに応じて彼らはいちばんいい柄をえらぶ。もちろん、ひとつの文体だけでは言いつくせない微妙な心境もあろう。そんなとき彼らは、ちがう柄で二枚三枚と、器用にかさね着をする。

（…）

　　彼らのこうした器用さの源泉として、大ざっぱにふたつの事情がかんがえられる。まず、和漢の古典に関するかぎり、彼らが現代の知識階級よりずっとたしかな素養をもっていたこと。そして、彼らが使いわける文体や詩形が、いずれも高度のマナリズムに固まっていたこと。

　　さまざまな観念、イメージ、情緒、語法、リズム、主題などが、彼らの教養のひきだしのなかではすべて整然と分類してある。天下国家の問題はおおむね漢文脈のなわばり、恋愛や情事ももちろん和文脈だが、まじめな恋愛なら短歌、粹人の浮気ていどなら都々逸をそれぞれ本籍地とする。だから、たとえば三十一文字で特定の風物を歌おうとすれば、その季節、背景、気分などはほぼ自動的にきまってくるし、語句やイメージにも便利な既製品がたくさんある。あとは多少の変奏と順列組み合わせの作業だけ。ひとかけれの文才がもしもそれに参加すれば、かなり詩らしい詩ができあがるだろう。

　　こうした高度のマナリズムは、多くの人間がらくに詩をつくるための必要条件であり、その必然的な結果でもある。科学時代の中国、十六世紀末のヨーロッパなどにもおなじような状況があったし、だからこそ絶句、律詩もソネットもひろく知識階級の日常生活にとけこむことができた。」

「現在、ぼくたちが使っている三種類の文字（ひらがな、漢字、カタカナ）は日本文明の三つの地層をそれぞれの確に象徴している。やまとことばと、漢語と、近代ヨーロッパ語と。人類の言語のなかで、これ以上露骨に系統のちがうとりあわせを見つけることは容易ではない。地理と歴史のたわむれによって大胆きわまる交媒実験が二度もくりかえされ、ひとつの文明とその言語が残った。

（…）

　　現代の日本語では、よくこねれた言葉で正確に語ることは不可能にちかい。もちろん話題にもよる。感情や感傷の表現にはすばらしい言葉が多いけれども、いくらか大げさな問題について自分の意見を正確にのべようとすると、とかく耳なれぬ漢語、カタカナ語がとびだす。ひとに嫌われるだけなら覚悟すればいいが、ここでも二者択一はそれほど簡単ではない。」

「能率的な方法がひとつだけある。やっかいな言葉を使わないこと、それなしでは考えにくい問題を考えないですますことだ。ついでに、そんなことを考えるのは西洋かぶれ、時代おくれ、非生産的なインテリの証拠なんだと、りっぱな口実をみつければ一石二鳥だろう。しかし、生産的愛国的な別のインテリが、もし純粋な日本語（と漢語）で多少とも正確な文章を書こうとすれば、やはり意外な垣根にぶつつかるだろう。」

（中村昇「哲学者は何を言っているんだ？　27.日本語と哲学（1）」～「日本のとんでもない哲学者」より）

「この連載の最初の方に、ヨーロッパの言葉で哲学していくのは、とにかく大変だといった愚痴を書きました。西洋哲学では、「理性」だの「論理」だの、われわれが普段交わしている母語による会話では、絶対に使わない単語を使っているからです。でも、だからといって、日常の言葉だけで「哲学」できるのか、といったら、これもまた難しい。ずいぶん前に、私の「真の母語」である佐世保弁だけで哲学するブログを始めましたが、あっという間に挫折しました。

「日本にも、とんでもない哲学者はいます。個人的な好みだけで言いますが、まず鎌倉期の道元。もし無人島に一冊だけ本をもっていったいいと言われたら、「一冊ではなく、四冊してくれ」とタフなネゴーションエイションをして、岩波文庫の『正法眼蔵』（編注：道元の主著）全四冊をもっていくと思います。」

「そして、江戸期の三浦梅園。江戸時代に、こんなとんでもない形而上学者がいて、しかも、九州の大分にずっと住んでいたというのを知ったときには、心底驚きました。この人の『玄語』とも、いずれじっくりつきあいたいと思っています。そのような至福の時間を、死ぬまでに、つくることができるでしょうか。」

「さらに最近で挙げれば、大森莊蔵先生の『流れとよどみ』。この本の深い哲学的思索と、このうえなく流麗な日本語は、私にとっては垂涎（すいぜん）の的です。『流れとよどみ』のような文章を書けたら、私の人生の目標の一つは達成されたと思ひそうです。『正法眼蔵』や『玄語』とは、かなり異なる系統の本ですが、「日本語で哲学する」お手本とってもいいと思います。」

（中村昇「哲学者は何を言っているんだ？　27.日本語と哲学（1）」～「対象と言語の関係」より）

「「日本語で哲学する」ということを、はっきり意識したのは、和辻哲郎の「日本語と哲学の問題」（『続日本精神史研究』）を読んだときでした。」

「この文章は、昭和四年（1929年）に書かれたものです。ドイツ留学から前年帰国したばかりですので、この文章には、ハイデガーの影が色濃く落ちています。Daseinやbesorgendといったドイツ語が、原語のまま書かれていますし、日本語についての細かい歴史的な考察も、ハイデガーのドイツ語やギリシア語の語源学的な説明の影響かも知れません。とにかく、ハイデガーの姿が、ここかしこに垣間見えるのです。」

「和辻は、まず、われわれが母語によって、ものを考えていることを指摘します。これは、ごく当たり前のことですが、われわれが文章を書くときや何かを話すときは、特定の共同体の特定の言語（多くの場合は母語）を使っています。どんなに普遍的で抽象的なことを話すときでも（たとえば、哲学）、それを表現するのは、限定された特殊な一言語（母語）なのです。これも、実はとても不思議なことです。

　　どれほど一般的なことであっても、全人類が共有している普遍言語で話したり書いたりすることは、できません。そんなものは、どこにもないからです。われわれが使っているのは、いつでも特定の限定された一言語なのです。」

「和辻も、つぎのように言っています。

それぞれの特殊な言語を離れて一般的な言語などというものがどこにも存しないことは、何人も認めざるを得ない明白な事実である。（『和辻哲郎全集　第四巻』岩波書店、1962年、509頁）」

「このように考えれば、最も身近な「母語」でさえも、つきつめれば自分自身の言葉ではなく、「他者」なのですから、母語ではない英語やドイツ語などを日本語に翻訳したものは、さらに遠い存在だということがわかるでしょう。」

「そうはいつでも、やはり、「他者」のなかでも、私にとっては最も身近な「他者」である日本語を、もう一度、哲学の言葉として見直してみようというのが、いまからやろうとしていることなのです。」

（中村昇「哲学者は何を言っているんだ？　27.日本語と哲学（1）」～「日本語の特徴」より）

「和辻は、日本語は「もの」を言い表す際に、そのあり方（単数が複数か、一定か不定か、一例か一般的か、男性的か女性的か等）には頓着せず、ただ「それが何であるか」を形式的に表現するだけであり、そしてそのことは誰がどのようにその「もの」を認識しているか（悟性的認識）を重視しないという日本語の性格を示している、というのです。」

「しかし、同時に日本語の長所もまた、つぎのように指摘します。

樹木は本来一本でもあれば多数でもある。そのいずれかに片付けてしまうのは樹木の本質に忠なるものではない。樹木が一本であるかあるいは多数であるかは樹木の数の問題として樹木に関して考えられることである。だから樹木そのものにおいては単数多数の別のない方が事態に忠実なのである。同様に性の別は、人間存在にあっては、不可的な限定によって初めて生ずるものではない。男女は根本的な区別である。従って男女、父母、夫婦、兄妹というごとき名詞自身が性の別を本質的に含意するのであって、ことさらに冠詞をもって示すを要しない。もし名詞自身がこの別を含意しないならば、冠詞によって男女の別を付加するということは無意義である。従って名詞が性の別を持たない方が事態に忠なのである。さらにまた動詞に、人称の別のないことは、人間の動作が個人的・社会的なものとして、いずれかの人の立場に固有するものでないことの了解を示すのである。我が見るのも汝が見るのも見る働きとして同一であるならば見るという動詞は形を変えるに及ばない。－なおその他の点についても同様のことが言えるであろう。しかれば日本語の非分別性は、悟性による綿密な分別を加えなかったがゆえにかえて真実なる存在の了解を保存するものと言えるであろう。（同書、514頁）

　　このように和辻は、日本語の特質を、実に鮮やかに示しています。一見「悟性的認識における不熱心」（512頁）という特性を日本語の文法がもっているようだけれど、それは、他面「真実なる存在の了解を保存」しているというわけです。

　　こうして和辻は、さらに「の」や「に」といった助詞のもつ「余韻」の「交響」（516頁）の複雑さや、過去形を表す多数の助動詞の「濃淡差別」（517頁）など、日本語の文法構造の「異常」な「進歩」（518頁）にも言及していきます。」

本書は各種レシピの紹介された料理本ではない

料理をするときに使う食材を考えると
野菜・穀類・豆類・果物・
肉・魚・海産物・乳製品等で

それらに水・油・酢・
各種調味料(砂糖・塩・醤油・味醂・麴等)を加え
熱したり冷やしたりしながら料理をつくるが

本書はおいしい料理を作るための
基本的な「成分」とその「ふるまい方」について
解説されたユニークな一冊

レシピではなく
どのような「成分」があって
それらがどのような性質をもち
どのように働き
また働きあって
美味しい料理がつくられるのかを
イメージできるようにされている

つまり料理そのものではなく
料理をどのようにデザインすれば
より美味しくできるかという発想本である

その「成分」とは
水・糖類・炭水化物・脂質・
たんぱく質・ミネラル・気体・熱の8つ

「最初の7つは
私たちが食べるものの内側で回る歯車で、
熱はそれらを動かすエネルギー」

多かれ少なかれ料理には
この8つの「成分」が含まれているが
8つそれぞれの
「すること」と「しないこと」のセットで
料理は作られている

つまり料理をしているとき
そこでなにが起こっているのかを理解できれば
「料理をより思い通りデザイン」するためには
どうすればいいのかがイメージしやすくなる



■アリ・ブザリー (川崎寛也=日本語版監修・廣幡晴菜=訳)
『おいしさをつくる8つの「成分」
——理想の料理を作るための調理科学の教科書』
(楽工社 初版 2023/4)

この視点というのは
いうまでもなく
料理だけではなく
考えること
感覚すること
感じること
意志するといったことについて

そこでなにが起こっているのか
どのような働きの「成分」があり
それらがじっさいにどのように働いているか
そしてそれぞれの働きのなかで
「すること」と「しないこと」が
どのように構成されながら顕在化しているかを
イメージするためにも有効である

あるいは地水火風(そして空)という
世界で働いている「成分」が
どのように展開されているか
または展開することが望ましいか
といったことをイメージし
実践していく際にも
その発想を応用することができる

ある意味でそうした視点をもつことは
意識魂的なものを顕在化させる際にも
重要な視点ではないだろうか

水 WATER		炭水化物 CARBOHYDRATES		たんぱく質 PROTEINS		気体 GASES	
水は——		炭水化物は——		たんぱく質は——		気体は——	
固形、液体、あるいは気体である	014	水と結びついて溶解する	085	折り目が開いて、凝縮する	152	水と結びついて溶解する	214
ものを溶かす	024	とろみをつける	092	水と結びついて溶解する	168	溶になる	220
流れ	030	液体をゲル化する	098	食べ物を褐色にする	162	化学反応を引き起こす	226
酸+塩基である	036	酸と糖をとりえる	104	乳化剤としてはたらく	168	膨張し、収縮する	232
微生物を増殖させる	042	分解して糖類になる	108	酵素としてはたらく	174		
				分解し変化する	182		
糖類 SUGARS		脂質 LIPIDS		ミネラル MINERALS		熱 HEAT	
糖類は——		脂質は——		ミネラルは——		熱は——	
甘みがある	050	エマルションになる	116	味がある	190	動きを速くさせる	240
食べ物を褐色にする	054	乳化剤のはたらきをする	120	大きな分子をつかんでつなぐ	196	遅く運動させる	246
凝固化する	060	水を離すものを奪える	126	水と結びついて溶解する	200		
水と結びついて溶解する	066	溶けたり凝固化したりする	132	色を出す	206		
とろみをつける	072	蒸発せず高温になる	138				
発酵のもとになる	078	分解により脂肪酸を出す	144				

つまり料理にせよ心魂的なものにせよ
世界のさまざまな事象にせよ
それらそのものに呑み込まれることなく
いわばメタレベルでとらえることで
むしろそれらそのものとの
意識的なコラボが可能になるということである

それはともかく
とりあえずは実際に料理をしているとき
8つの「成分」をどのように生かせば
美味しい料理を作れるかである

食材の組み合わせ方
調味料の使い方
熱の加え方など
ちょっとしたことで
ずいぶん美味しくなりそうだ

■アリ・ブザーリ（川崎寛也＝日本語版監修・廣幡晴菜＝訳）『おいしさをつくる8つの「成分」——理想の料理を作るための調理科学の教科書』（楽工社　初版 2023/4）

（「はじめに」より）

「ジャガイモ、チーズ、キャビア、ダックファット、パスタはすべて食材である。すべての食材は、どんな複雑なものであっても、もっと単純なもの、すなわち食べ物の基本構成要素である成分でできている。成分には8種類ある。水、たんぱく質、炭水化物、ミネラル、気体、糖類、資質、そして熱だ。最初の7つは私たちが食べるものの内側で回る歯車で、熱はそれらを動かすエネルギーである。それぞれの成分には特徴があって、それぞれがすることとしないことのセットがある。」

「料理や食事をするとき、人間のものさしでものごとを経験している———視覚、嗅覚、味覚、触覚、そして聴覚で感じている。本書を読んだ後には、頭の中に生まれた声やイメージのおかげで、見えないものを心に思い描けるようになるだろう食べ物の食感、味、香り、外観の裏にある顕微鏡でしか見えないドラマを想像することができる。まるで透視能力を手にして料理をするような体験になる。」

「各成分のパターンを知れば、料理の問題の解決策には基本的な選択肢がいくつかあるだけだということがわかる。（…）

これらのパターンは失敗したときだけに当てはまるのではない。たとえば、おいしいものができたとき、何のおかげでおいしかったのか、どうやったらそれを再現できるか、あなたは知っている。ある料理を千回作っていて、千一回目はもっとおいしくしたいとき、こうすればいいとわかる。パリパリした食感は水分とほかの成分のバランスで決まるとわかっているので、ご自慢のピザの皮をさらにパリパリにしたければ、そこから探求を始められる。」

「本書には学べることがたくさんあるが、事実や数字を山のように暗記するのではなく、物語に出て来る8つのキャラクターを知るという形で提示されている。それぞれの成分が主役になる8つの章があり、それぞれの性格の特色がスポットライトを浴びて輝く。（…）科学的な予備知識は必要ない。」

（「これからのパントリー」～「水」より）

「液体を薄める。ほかのものを溶かす、液滴が動ける隙間を作ることでエマルションを安定させる、pHを利用して食べ物を酸性あるいは塩基性にする、凍ったり結晶化したりすることで食べ物を硬くする、蒸気が変わることで膨脹させる、といったことに役立つ。」

※参考：エマルション「水の中に油が、もしくは油の中に水が分散している状態のこと」

「たくさん：野菜、果物、肉、シーフード、卵、ハーブ、きのこ、酢、ワイン、ビール、ジュース、ソーダ、牛乳、調味料（醤油、魚醤、ケチャップなど）、ストック/ブロス、フレッシュチーズ
　　少しだけ：熟成チーズ、シロップ（蜂蜜、メープルシロップなど）、濃厚なエマルション（バター、マヨネーズ、クリームなど）、干し肉、ドライフルーツ、干し野菜」

（「これからのパントリー」～「糖類」より）

「甘みをつける、液体にほんの少しとろみをつけ、あるいはべたつかせる、水分を取り除くとパリパリのガラス状態になる、微生物が発酵を行うための食料を与える、熱すると褐変する、冷凍食品の中で水分が粗い氷の結晶になるのを防ぐ、調理済みの食品から水分が蒸発するのを防ぐ、といったことに役立つ。」

「たくさん：グラニュー糖、シロップ（蜂蜜、メープルシロップ、アガベシロップなど）、ジャムや砂糖煮、ソーダ、甘口ワイン、果物、ピーツ、サツマイモ、スイートコーン
　　少しだけ：その他の野菜、乳製品、肉、きのこ、シーフード、穀物、豆類、ビール、ワイン、酢、パン、卵、ナッツ、コーヒ―」

（「これからのパントリー」～「炭水化物」より）

「液体のとろみを強める、水分を取り除くとパリパリのガラス状態になる、混合物をとらえる、ゲルを創り出す、エマルションや泡のかたまりを安定させる、後に分解される可能性のある糖類の貯蔵庫のはたらきをする、といったことに役立つ。」

「たくさん：穀物、豆類、ナッツ、種子、パン、果物、海藻
　　少しだけ：葉物野菜、ハーブ、香辛料、きのこ

（「これからのパントリー」～「脂質」より）

「食べ物の香りや色を蓄える、エマルションになる液滴を提供する、時にはエマルションを維持するため乳化剤としてはたらく、熱の伝導を助ける、液状のときにはクリーミーな食感を出し、固形状のときにはしっかりとした食感を出す、分解して風味のよいかげらになることで香りを生み出す、たんぱく質や炭水化物のような水を好むものを引き離しておいて柔らかいバター生地やパン生地を作る、といったことに役立つ。」

「たくさん：油、脂、乳製品、ナッツ、アボカド、濃厚なエマルション、チョコレート、シーフード
　　少しだけ：香辛料、果物、野菜、ハーブ、穀粉、種子、穀物、豆類

（「これからのパントリー」～「たんぱく質」より）

「液体に強いとろみをつける、水分を取り除くとパリパリのガラシ状態になる、エマルションや泡のかたまりを安定させ乳化させる、ゲルを形成したり、何かをくっつけてまとめる、きつね色に変化させる、味や香りをとらえる、といったことに役立つ。」

「たくさん：肉、シーフード、豆類、乳製品、ナッツ、卵、種子、穀物、小麦粉
　　少しだけ：果物、野菜、香辛料、ハーブ、きのこ」

（「これからのパントリー」～「ミネラル」より）

「しょばくする、水分を微生物から遠ざける、冷凍食品の中で水分が粗い氷の結晶になるのを防ぐ、調理済みの食品から水分が蒸発するのを防ぐ、炭水化物やたんぱく質のような大きな成分がつながってゲルを形成するのを助ける、食べ物に色をつける、といったことに役立つ。」

「たくさん：塩、熟成チーズ、セロリ、貝や甲殻類、発酵した大豆製品、豆腐、ピクルス、ケイパー
　　少しだけ：野菜、果物、肉、チョコレート、乳製品」

（「これからのパントリー」～「気体」より）

「泡で液体にとろみをつける、膨脹して食べ物をふくれさせる、食べ物に化学反応を起こさせる、といったことに役立つ。」

「たくさん：発泡性飲料、ドライアイス、発酵食品、イースト
　　少しだけ：果物、野菜、香辛料」

（「これからのパントリー」～「熱」より）

「食べ物を曲げやすく、薄く、自由に動き回るようにする、プロセスのスピードを上げる、大量に使用すると酸素や微生物を殺す、といったことに役立つ、」

■目次

日本語版監修者まえがき

はじめに

水

糖類

炭水化物

脂質

たんぱく質

ミネラル

気体

熱

これからのパントリー

謝辞

■著者：アリ・ブザーリ（Ali Bouzari）

料理科学者、作家、教育者であり、カリフォルニア北部に拠点を置く料理研究開発企業Pilot R+Dの共同設立者。食品生化学の博士号を持つシェフとして、アイビーリーグからカリナリー・インスティテュート・オブ・アメリカまでトップクラスの大学で教鞭をとり、カリキュラムを開発。そのかたわらでトーマス・ケラー・レストラン・グループなどの全米有数の革新的レストランとコラボレーションするなど、料理の捉え方を変える流れを牽引してきた。本書の原著は国際料理専門家協会（IACP）ベストブック賞の参考図書部門賞を受賞した（2017年度）。

■日本語版監修者：川崎寛也（かわさき・ひろや）調理科学者、感覚科学者。京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了、博士（農学）。味の素（株）食品研究所エグゼクティブスペシャリスト。特定非営利活動法人 日本料理アカデミー理事。研究分野は、おいしさの科学、プロの調理技術の解明、食の体験と心理的価値の関連解明など。おもな執筆書に『味・香り「こつ」の科学』『おいしさをデザインする』『だしの研究』『料理のアイデアと考え方』『料理のアイデアと考え方2』（以上、柴田書店）、『日本料理大全 だしとうま味、調味料』（共著、特定非営利活動法人日本料理アカデミー）、『料理すること その変容と社会性』（共著、ドメス出版）ほか。

■訳者：廣幡晴菜（ひろはた・はるな）英語翻訳者。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。訳書にアンナ・ファイフィールド『金正恩の実像 世界を翻弄する独裁者』（共訳、扶桑社）、スーザン・ジャングほか『シグネチャー・ディッシュ　食を変えた240皿』（共訳、KADOKAWA）など。

いまや「僕（ボク・ぼく）」は
男性の自称詞として
一般的に使われているようになっている

本書で「代名詞」ではなく
「自称詞」という表現が使われているのは
欧州系の言語における代名詞と比べて
日本語の自称する言葉には
さまざまなニュアンスがあるからだ

典型的なのは〈私〉〈俺〉〈僕〉の三つだが
じぶんのことを属性や身分で呼んだり
自分の名前で自分を呼ぶこともある

「僕」という自称詞だが
今年のWBCでも選手から監督まで
「俺」や「私」ではなく
ほとんど「僕」が使われていた

「俺」や「私」という自称よりも
「僕」が一般的に使われはじめたのは
一九七〇年代以降のことで
とくに最近になってよく使われるようになっている

「僕」という言葉は
かつて中国の司馬遷の時代
謙譲の意味として
また「文人としての自意識」を
「話し相手と共有する仲間意識」を
表現するもので

それが日本で最初に使われたことが確認できるのは
『古事記』におけるスサノヲノミコトの言葉であり
謙譲の意味だけで使われていた

その後平安時代から江戸時代に入るまで
〈僕〉が使われることはほとんどなかったようだが
元禄時代の前後になって儒学を学ぶ者たちが
かつて中国（「師道論」）において使われた
「対等の関係を表す自称詞〈僕〉」をまね
「身分社会の秩序を超えた連帯のあいさつを送り合」う
ようになってからのこと

その連帯のネットワークが幕末の政治運動において
とくに吉田松陰とその弟子たちが「自称詞〈僕〉を使い、
身分や立場の大きな差を乗り越えて連帯の輪を広げ、
政治活動に生かしていった」のだという

そして明治時代において自称詞〈僕〉は
「学童の言葉として階級を超えて広がっていく」のだが
「大人になってもまだ〈僕〉を使っているのは」
「高学歴者や文学者などの文化人が主」で
「社会的なステータスをも示す自称詞」で
この傾向は戦後も一九七〇年代頃まで残っていた

その後学生運動の挫折後の世代の作家たちが
「伝統や束縛から切り離された自由な感性を
自称詞〈僕〉に込めて表現」するようになったこともあり
〈僕〉は現在のように誰もが自然に使われるようになり
先のWBCの例にもみられるように
公の場でも一般的になってきている

しかしそれはあくまでも男性における自称詞であり
女性一般において抵抗なく
「僕」が使用されているわけではない
これは小学校教育から
女子が〈わたし〉男子が〈ぼく〉を使うという
「男女別自称詞」が戦前と変わらず
踏襲されているからでもある

この是非に関してはさまざまな考え方があるが
少なくとも女子が〈わたし〉という自称詞を
習得するにあたっては
男子が〈ぼく〉をそしてその後〈わたし〉を
習得するプロセスはそれなりの違いがあるようである

著者も示唆しているように
「〈僕〉という自称詞は、一つの言葉にすぎないが、
日本社会や日本語の現在を示す、有効な視点となりうる」
ということはたしかだろう

本書を読みながら
歌手でタレントの「あのちゃん」が
「ぼく」という一人称を使っていたりするのを
あらためて見てみたりもしたが
いまはまだ少しばかり特別に感じられる女性の「ぼく」も
そのうち一般化していくこともあるのかもしれない
そんな印象を受けたりもした

さまざまに表現される日本語の「自称詞」だが
その変化が言語を貧しくするのではなく
豊かにしていく方向へと向かっていきますように



■友田健太郎『自称詞〈僕〉の歴史』
（河出新書 河出書房新社 2023/6）

- 友田健太郎『自称詞〈僕〉の歴史』（河出新書　河出書房新社 2023/6）

（「はじめに」より）

「これは〈僕〉に関する本である。〈僕〉とは（…）（主に）男性の使う自称詞（「一人称代名詞」）〈僕〉のことだ。」

「よく考えてみれば、やはり不思議である。英語ならI、中国語なら我（wǒ）、日本語と文法の近い韓国・朝鮮語でも나（ナ）（目上の人に対しては저（ジョ）も使う）というように、一人称はほぼ一種類に限られている。それが、日本語では（主なものだけで）三つもある。さらに不思議なのは、この選択肢は女性には与えられていないことだ。女性は（少なくとも東京を中心とした地域では）〈おれ〉や〈僕〉は使わないことになっており、もっぱら〈私〉を使っている。女性も〈おれ〉や〈僕〉を友達などの仲間うちで使うことはあるが、より開かれた場で女性がこれらの言葉を使おうとすると、何らかの抵抗に直面する。（…）場による選択ということを考えても、〈僕〉という言葉には際だって不思議な性質がある。〈私〉という言葉は公共の場で使う謙讓語、〈おれ〉は私的な場向きのおだけた言葉、とその言葉を使う場面は比較的はっきりしている。ところは〈僕〉はそんなにはっきりしたものではない。」

（「第1章〈僕〉という問題」より）

「どうしてこの本では「自称詞」という言葉を使うのか。（…）英語など欧州系の言語では、代名詞には名詞とは違う性質がある。（…）

そしてその言葉自体は無色透明で何のニュアンスも含まれていない。たとえばIという言葉は自分を指す記号でしかなく、そこからこの人がどんな人か推測することはまったくできない。このようにただの名詞とははっきり違うものなので、名詞とは別の「代名詞」というカテゴリーになっているのである。

そう考えると、日本語の〈私〉〈俺〉〈僕〉などは欧州系言語の代名詞とはまったく異なることがわかる。文法的に名詞と違うところはないし、それぞれにニュアンスがあり、使う人の人柄を感じさせる。また、様々なバリエーションに見られるように、増殖していく性格がある。日常の会話では自分のことを〈お母さん〉〈先生〉など属性や身分で呼んだり、若い女性によく見られるように、自分の名前で自分を呼ぶこともある（こうしたことは欧州系の言語でも可能だが、日本語よりもずっと少ない）。これらも広い意味で自称詞の一種と考えれば、日本語の自称詞は無限にあるとさえ言えるだろう。こうしたことからこれらの言葉は「代名詞」というよりは「自称詞」という名詞の一種と考えるのはよいということになるのである。」

「近年〈僕〉の使用が目立ってきているということは、かつて〈私〉や〈俺〉などが使われていたような場で〈僕〉を選択する男性が増えていくことだと考えられる。具体的に言えば、これまで紹介したスポーツ選手や「ひと」欄で取材された人たちのように、以前なら〈私〉を使う場で〈僕〉を使ったり、またEXILEのメンバーのように、〈俺〉と言ってもよさそうな場合に〈僕〉を使ったりするというのである。」

「大谷選手が記者会見やインタビューなどで使う自称詞〈僕〉は、さわやかでりしいイメージにぴたりはまっている。大谷選手だけではない。最高齢選手で「精神的支柱」とも言われたダルビッシュ有選手から若手選手たち、さらには栗山英樹監督まで、（WBCの）メンバーは公の場でもっぱら自称詞〈僕〉を使った。二〇二三年現在、そのことに違和感を抱く人はまずいないだろう。しかし、考えてみれば、かつての野球界では、〈ワシ〉〈ワイ〉といったいかつい印象の自称詞が当然のように飛び交っていた。いつの間にか、そうした自称詞は使われなくなり、ビジネスマナーではNGのはずの〈僕〉が、公の場の「正解」のはずの〈私〉をも押しのけて、すっかり一般的になっているのである。考えてみれば不思議なことである。」

「日本語は一部の言語学者からは「主語がない」言語と言われる。日本語は「あした学校に来る？」「行きますよ」などのように、ほとんどの文は主語がなくても成立する。これを「主語が省略されている」と言ってもいいが、「そもそも（特別な存在としての）主語がない」と考える言語学者も覆いのだ。欧米系言語の場合、主語は動詞の形を左右するなど、文の根幹を決める役割を担っているのに、日本語はそうではないからだ。「主語がない」のか、「主語が省略されている」のか、この点は言語学者の間でも意見や表現の違いがあるが、いずれにしろも、欧米系言語に比べ、主語の存在が極めて軽いには事実だろう。特に会話の際は、「あなたは」と相手を指して言うことは少なく、むしろ省略する方が普通だ。どうしても相手を指す言葉が必要な場合は、〈あなた〉〈君〉などの対称詞を避けて、相手の属性や身分（「お父さん」「部長」など）を使うことも覆い。そうした中で、相手が目下の場合には、「あなたはもっと真面目に勉強しなさい」などと対称詞を使うこともある。あるいは親しい友人や夫婦などの場合には〈君〉〈あなた〉などの対称詞を使いやすい。このようにあまり使わない対称詞をあえて用いるだけで、気安い感じが出してしまうのだ。」

（「第2章〈僕〉の来歴―――古代から江戸時代後期まで」より）

「現存する日本最古の書である『古事記』で、〈僕〉はすでに使われていた。最初に〈僕〉を使って話すのはササノヲノミコト（以下ササノヲ）。」

「ちなみに読みは「ぼく」ではなかった。仮名がまだ発明されていたかった当時のこと、実際どう読まれていたのか、確証はない。」

「現代では主に対等な関係で使われる〈僕〉だが、『古事記』でははっきりと立場が下の者が上の者に対して自分を指して使う謙讓語としての用法がすべてである。」

「〈僕〉は、もともと中国で使われていた自称詞である。『古事記』と『日本書紀』は天皇の命令で朝廷の役人が編纂したのだが、当時の役人たちは中国の文献に親しんでいた。（…）中国では司馬遷が『史記』を編纂したのを皮切りに、多くの歴史書が編纂され、日本にも伝わってきていた。（…）〈僕〉は本来、奴僕の意味であり、その実態はいわゆる奴隸から単なる使用人まで幅広いが、人に使われる立場を表す字である。これが謙讓の自称詞としても使われるようになった。似た意味で漢文で使われる字に〈臣〉がある。今では「大臣」など地位が高いイメージもあるが、もともとは奴隸のような者をも指した。」

「『文選』や『漢書』で使われていた〈僕〉には二つの意味合いが感じられる。一つは謙讓の意味である。（…）

「『古事記』『日本書紀』を見る限りでは、当時の大和朝廷の役人たちが使ったのは、前者、つまり謙讓の意味合いの〈僕〉だけであったようだ。（…）この列島で〈僕〉を使う文人たちの間に友情の花が開くには、それから千年近い時が必要であった。」

「『古事記』『日本書紀』を見る限りでは、当時の大和朝廷の役人たちが使ったのは、前者、つまり謙讓の意味合いの〈僕〉だけであったようだ。（…）この列島で〈僕〉を使う文人たちの間に友情の花が開くには、それから千年近い時が必要であった。」

「『古事記』『日本書紀』を見る限りでは、当時の大和朝廷の役人たちが使ったのは、前者、つまり謙讓の意味合いの〈僕〉だけであったようだ。（…）この列島で〈僕〉を使う文人たちの間に友情の花が開くには、それから千年近い時が必要であった。」

「平安時代から以降、江戸時代に入るまで、〈僕〉の用例は極めて少ない。」

（「終章　女性と〈僕〉―――自由を求めて」より）

「〈僕〉は古代に中国から日本に入ってきたが、中世には文献から消え、再び見られるようになったのは、十七世紀後半、元禄時代の前後であった。それは、戦乱の世がようやく遠い記憶となり、武士たちの関心が学問に向かい始めた時機であった。そのような時代に、儒学を学ぶ者たちは中国の「師道論」に注目し、そこで使われた対等の関係を表す自称詞〈僕〉をまねて、身分社会の秩序を超えた連帯のあいざつを送り合った。

泰平の世が長く続き、学問が普及するに伴い、自称詞〈僕〉は武士や文人の間で広く使われるようになる。儒学だけでなく、国学や蘭学、また漢詩、和歌、俳句、絵や芝居などの文化の華が開く場で、しばしば自称詞〈僕〉を用い、身分の上下を超えた交流の網が日本中に広がっていった。

幕末の政治運動では、このネットワークが大きな役割を果たす。身分社会から（まがりなりにも）「四民平等」がうたわれる近代社会への転換点で、志士たちの出会いの場はしばしば藩校や私塾であり、活動の背景には、教育や学問を通じた交流があった。志士たちが教育の場で使われる自称詞〈僕〉を互いに用いたのはそのためだった、その代表例が吉田松陰とその弟子たちであり、彼らは自称詞〈僕〉を使い、身分や立場の大きな差を乗り越えて連帯の輪を広げ、政治活動に生かしていったのだった。

そして迎えた明治時代には、自称詞〈僕〉は学校教育と結びつき、学童の言葉として階級を超えて広がっていく。しかし、子供はともかく、大人になってはまだ〈僕〉を使っているのは、教育を受ける期間の長い高学歴者や文学者などの文化人が主だった。その意味で〈僕〉は、社会的なステータスをも示す自称詞だった。この傾向は、戦後になっても一九七〇年代頃まで残っていた。一九七〇年前後の学生運動の参加者が〈僕〉を使っていたのはその最後の名残だった。

学生運動の挫折を背景に登場した三田誠広や村上春樹らの文学者は、伝統や束縛から切り離された自由な感性を自称詞〈僕〉に込めて表現した。大学進学率も上がり、〈僕〉使用が少しずつ「大衆化」する中で、こうした作家たちはその先頭に立つことになった。現在、〈僕〉は誰が使ってもおかしくない自称詞となった。〈私〉に代わり、公の場で使われる機械も増えている。〈俺〉〈私〉と異なる「柔らかさ・丁寧さ」「優しさ」「りりしさ」「純粋さ」などを示す自称詞として、一層一般化しつつある。」
こまでのストーリーにはしかし、大きな欠陥がある。人口の半分を占める女性こそがそれであることは言うまでもない。〈僕〉が一般化した現代においても、女性が公の場で〈僕〉を使えば、確実に一目をひく。」

「教室で女子が〈わたし〉、男子が〈ぼく〉を使うという区別は、戦後の教育でも戦前と変わらず踏襲された。（…）「ジェンダー別国民化」の思想は、戦後否定されたはずだが、「男女別自称詞」という形ではしぶとく生き残り、学校教育の場を通じて今も再生産されているように見える。」

「男子は幼稚園の段階で〈僕〉や〈俺〉の使用を始めることが多いが、女子の場合、家庭だけでなく幼稚園などでも自分の名前や相性を自称として用いることが多く、〈わたし〉を使い始めるのにはかなりの抵抗があるようだ。その理由として言語学者の井出祥子は〈わたし〉に伴う①フォーマリティ（形式性、堅苦しさ）や②女性性（女っぽさ）への抵抗感を挙げている。〈わたし〉を使うことで自分を喪って社会に取り込まれ、また女性として男性から性的に見られる主体であることを認めるような意味合いがあるということだ。一方、男性の〈僕〉や〈俺〉には個人的な響きがあり、使用に抵抗感は少ない。男性が社会人として〈わたし〉を使い始めるのは就職してからのことになるが、女性にはそのクッションが認められていない。そのため、女性は〈わたし〉を使い始めるまでの間、自分の名前や愛称を使ったり、より個人的な響きのある〈うち〉を使ったりする。「模索の時期」は個人差があるが、小学校から高校にかけて続く。こうした模索の中で、女性が、一時的ではあれ〈僕〉や〈俺〉を使用する機会はかつてよりも格段に増えているのだ。」

「今後どのように使われていくにせよ、その使われ方は、必ずその時々の人々の思いを映すことになるだろう。〈僕〉という自称詞は、一つの言葉にすぎないが、日本社会や日本語の現在を示す、有効な視点となりうるのだ。」

○友田健太郎プロフィール
1967年生まれ。歴史研究者。日本語教師。放送大学修士(日本政治思想史)。1991年、東京大学卒。新聞社勤務後、ニューヨーク州立大学バッファロー校にて経済学修士号を取得。

mediopos-3138 (2023.6.21) でとりあげた
四方田犬彦『いまだ人生を語らず』の
「蝸牛のごとき勉強について」の章に
山折哲雄に会いに行く話がある

そこで山折氏について
「これはもう次元が違う、
とうてい自分の及ぶところではないと
観念した人物」だといっている

最初に会った時
親鸞について『歎異抄』を読んだという
親鸞が五十二歳のときに完成した
『教行信証』を読まねばならないといわれ
四方田氏は十年後に親鸞についての著作を書きあげる

その著作を手にもう一度会いに行くと
親鸞の話ではなく『シン・ゴジラ』のことを話し始める

かつて教示された『教行信証』についてふれると
「親鸞の本当の境地は、彼が八十歳以降に執筆した和讃、
それに奥さんに向けて書いた手紙です」と言われる
しかもそのとき山折氏は親鸞全集をはじめとした
貴重な全集なども手放してしまっていたことがわかる……

四方田氏はじぶんが山折氏の年齢になったとして
はたしてその境地になり得るだろうかと自問しているのだが
それが四年前の出来事だという
山折氏は昨年卒寿を越えている

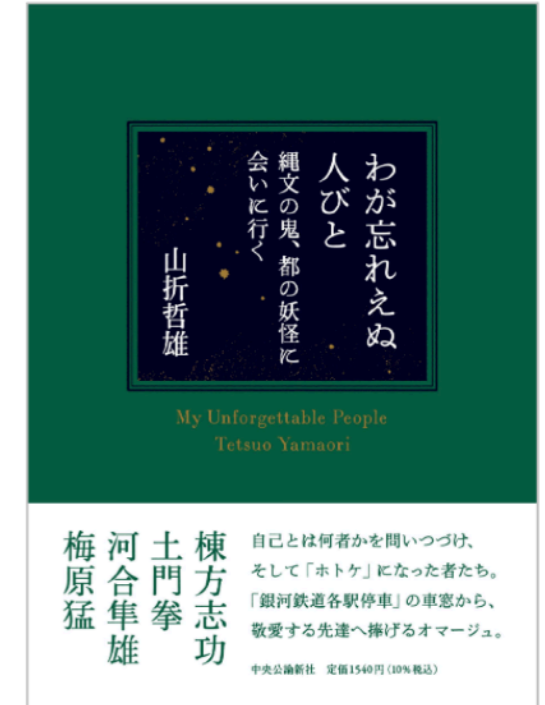
この四方田氏のエッセイが気になっていたところ
折良く山折哲雄の最新刊『わが忘れえぬ人びと』を見つける

四方田氏はエッセイのなかで
山折氏の著書に書かれていた師と弟子の関係について
その東洋的な三番目のありようとして
「人は師に出会っては師を殺し、祖に出逢って祖を殺せ」
という臨済のそれを挙げているが

山折氏の新刊で繰り返し熱く語られているのは
まさにその臨済のことで
その過激な臨済を棟方志功・土門拳・河合隼雄
そして梅原猛のなかに見出していたのである



- 山折哲雄『わが忘れえぬ人びと／縄文の鬼、都の妖怪に会いに行く』
(中央公論新社 2023/5)
- 四方田犬彦『いまだ人生を語らず』(白水社 2023/6)



四方田氏が二度目に山折氏を訪ねたとき
『シン・ゴジラ』のことを話し始めたことについて
その新刊について書かれてあることから想像できる

A | 神の誕生による人間の未来を危惧していたのだ
四方田氏はかつて教示されていた「教行信証」に基づく
みずからの「親鸞」の理解について問おうとしたが
山折氏の視線はすでにそこにはなかった
「親鸞」の理解についてもその晩年の境地を問題にし
さらにはそうしたことさえ
山折氏にとってはすでに問題意識から離れていた

四方田氏と山折氏の二度の邂逅は
禅問答のようなものかもしれない

四方田氏は師を礼拝しようとしたが
山折氏はそれにはかまわず
「師に出会っては師を殺し、祖に出逢って祖を殺せ」
という自らの道を歩みつづけているようにも思われる

ぼく自身でいえば生まれてこの方
師も祖も先生でさえもったためしががないため
「殺」す必要さえないのだが
ある意味でいえばこれは「水の試練」なのかもしれない
縫る岸もなくどこにも足場さえもてない水中で
みずからがそれに代わるものを見出しあるいはつくらなければならないように……

歩み方はひとそれぞれで比較することはできないが
どちらにせよだれかに
あるいはどこかに依存するわけにはいかない
尊崇することは依存の反対だからだ
そのとたん「仏」はむしろ悪魔と化してしまう

- 山折哲雄『わが忘れえぬ人びと／縄文の鬼、都の妖怪に会いに行く』（中央公論新社 2023/5）
- 四方田犬彦『いまだ人生を語らず』（白水社 2023/6）

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「まえがき」より）

「私の人生は旅の明け暮れだったようにも映る。遊びながらただ遍歴していたようにも見える。何者にもなれずに、ただあがいていた姿が浮かびあがってくる。

いつも逃げ出す用意をからだのどこかに残して生きてきたような気もするのである。しかしもちろん、そんな暮らしがいつまでも許されるはずはなかった。移動と転職のくり返しがはじまっていたのだ。失意と愉悦、挫折と船酔いのくり返しだったような気もする。そんな不安定な生活のなかで眼前にあらわれてきたのが、わがふるさとの宮沢賢治、青森の棟方志功、同じく東北・山形の土門拳の三人の存在だった。

なぜ、そんなことになったのか、はじめはそれが謎だったが、やがて腑に落ちた。その三人が三人とも「何者」であるかわからない、不穏な人物であることがすこしずつみえてきたからだった。そのうち、その三人が、そもそも「何者」かになるうとはしない人間であることに、ふと気がついたので。

その謎の扉を開けてくれたのが、宮沢賢治である。かれはその人生の終わりに、自己のことにふれて「デクノボー」と呼んでいた。「デクノボーになりたい」といって、死んでいった。そういって短い人生を終えていた。かれは、「自分は何者かになることを選ばない」といって死んだのだ。それが「私はデクノボーになりたい」といって死んだ賢治の最後の真意だったような気がしてきたのである。賢治が扉を開けて光が射したとき、その向こうの雲間に棟方志功、土門拳の二人のシルエットが浮かび上がっていたのだ。」

「私がつどりついた仕事場が、京都西郊の丘に建つ国際日本文化研究センターだった。各地から集まってきたスタッフがビルの一室をかりて仮住まいし、やることなすこと枠のようなもの、制約のようなものは一切なかった。われわれはいったい何者―――そんな問いからはじまっていたような気がする。何者なんてもよい、それが不文律だったのかもしれない。現場にはそんな雰囲気をはじめから漂っていたのだ。梅原さんはそんな現場の親玉だった。みごとな大将だった。

（…）
<p>そんな時節だったと思う。もうひとつ、京都の空には変幻自在の舞を舞う人がいることに気がついた。ときに布袋の笑いをふりまく。いつのまにかシテのような、ワキのような舞を舞っている。自称「日本ウツツキクラブの会長」と宣伝し、いつでも物語の主人公になりすましている。そして無意識世界の主人公然としている。河合隼雄さんである。」</p>

（…）
<p>今いった「デクノボー」論を書きあげた頃のことだったと思う。それまでの私の仕事を見て、河合さんが、「ああ、銀河鉄道各駅停車だね」とつぶやくようにいわれたことがあり、それが耳の奥にのこっていた。その声が今回、ときどき私の脳中に甦ってきた。以来、頭の中に「人間発見図鑑」「銀河鉄道各駅停車」の二つのタイトルが出没し。点滅するようになってもいたのである。」</p>

「そんな企てを思いついたころ、われわれを取り巻く環境には思もかけない異変がおこっていた。A I（人工知能）の想像を絶する発展だった。その技術の進歩が異様な速さでわれわれの生活の足下を襲いはじめている。それは、まさにシン・ゴジラの襲来に似ていたのだ。」

「ちょっと待てよ、それでいいのか。地球の運命とわれわれの未来をそんな風に預けてしまっても大丈夫か。（…）その退化・沈衰のはてにA I神が誕生するこよになったのではないだろうか。その技術が開発される過程では、無数の怪獣たちも死に絶えていった。それをわれわれ地球人を代表する科学者や技術者たち、そして哲学者たちは何と呼ぶのだろうか。本書にとりあげた縄文の鬼、都の妖怪たちはこのような進化と退化のあわいにあって立ち止まり、考えつづけ、行動しつづけらレジェンドたちだったと私は思っている。そんな苦境の真ん中にあるって、自己とは「何者」かと問いつづけた人々だった。かれらは、いったい何？　そういう問いを掲げながら、どうかこのまことに小さな銀河鉄道各駅停車にお乗りいただくことができれば、私にとってこれ以上の幸いはないのである。」

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「一、棟方志功　板を彫る」より）

「中国の漸増に、臨済という眼光鋭い坊主がいた。日ごろ、過激なことをいって、周囲を驚かせていた。師に会うときは　師を殺せ　主に会うときは　主を殺せ　そんなものにはこだわらず、さっさとのり越えていけ　先に進んでいけということだろう。その臨済和尚の死後、弟子たちがその師の言行を集めて、『臨済録』をつくった。棟方志功は、この『臨済録』の一節を日ごろ口ずさんでいたような気がする。口にするだけでなく、生まれながらにその言葉を生きていたような気がする。」

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「二、土門拳　闇を撮る」より）

「私はかねて、上記の棟方志功の作品には「仏」殺し、「耶蘇」殺しの主題が隠されていると思ってきたのであるが、それはこのたびあらためて土門拳の作品をみていて、同じ主張が氏の仏像写真の背後に色濃く流れていることに気がついたのである。仏に逢うては仏を殺し。祖に逢うては祖を殺す、といった臨済和尚の生き方である。その必死の生き方を、土門拳も土門拳なりに写真撮影の仕事のなかで実践していたということになるのであろう。」

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「三、河合隼雄　夢を生きる」より）

「ワキは聞き役に徹している。控え目に耳を傾けている寡黙なワキだ。その「諸国一見の僧」の姿が。あるとき私には今日いうところのカウンセラーの振るまいに重なってみえたのだ。亡霊という名のクライアントの訴えを黙って聴いているカウンセラー、それがこの旅僧の重要な役割だったのかもしれない。もしかする「諸国一見の僧」こそは、中世における練達の魂の治療者だったのだろう。」

「患者たちの理不尽な問いは、たしかに老師において提出される理不尽な問いとよく似ている。たとえば『無門関』にこんな問いがもち出されている。仏陀が異教徒（外道）に出会ったときのこおだ。その異教徒がブッダに問いかける。「言葉（有言）でもなく、沈黙（無言）でもないもの、それは何か」異教徒を患者、ブッダを医師として考えてみよう。医師（ブッダ）はどう答えるか。ブッダは「しばらく黙って坐っていた」とあるだけである。その姿をみて、患者（異教徒）はハッと気づく。迷いの霧がはれた、というわけである。コトバでないもの、沈黙でないものはなにか、という問いは、「悪くなると治る、治ると悪くなる」と駄々をこねている患者の口吻に似ている。公案ではよくいわれる「犬にも可能性（仏性）があるのか」の問いは。「死ぬためにあなたのところにきた」と問いかける甘えの告白に似ている。答える側は、そうだともいえない。そうでないともいえない。立ちつくし、立ちどまり、静かに黙っているほかはない。（…）そのとき、心と心のあいだに「橋」がかけられる。東の心から西の心へと開通する時がくる。その可能性が開かれている。まさに開かれている、と考える。」

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「四、梅原猛　歴史を天翔ける」より）

「梅原さんは晩年になってから、よく「オレはホトケになる」といっていた。はじめ、あまり聞きなれない言葉なので、おやっと思っていたが、梅原さんはそんなとき、いつも本気だった。考えてみれば、仏教の根幹は、まさにそれが当たり前のことだった。（…）やがて私は、梅原さんの「オレはホトケになる」に合点がいくようになった。そのことを梅原さんはいつも「わがこと」としていっていたからだった。何か大事なことを「他人ごと」としていうようなことは、おそらくなかったように思う。その梅原さんの生きようは、どこか版画家の棟方志功に似ていた。（…）かれは青森のふるあとを立ち去るとき、「わだばゴッホになる」といって、家を出て行った男である。「わだばゴッホのような画家になる」といって出ていったのではない。梅原さんはどのような場合でも、他人ごとではなく、自分ごととしてももの考え、そして語る哲学者だった。そのため梅原さんは棟方志功や土門拳と同じように、一人の師ももたず、一人の弟子ももたない生き方を最後まで貫いた。」

（山折哲雄『わが忘れえぬ人びと』～「あとがき」より）

「私は昨年、卒寿という歳の区切りを越えたが、思い返すと、還暦や古稀を越えたとき、そのような区切りや垣根を意識することはなかった。ほとんど新幹線の「のぞみ」に乗っているようで、あっというまに通り過ぎていった。それにくらべると米寿とか卒寿とかいわれると、かつての還暦とか古稀の場合とは打って変わり、むしろ銀河鉄道の各駅停車に乗って、ゆっくり周囲の景色を楽しみながら旅をしている気分になっていた。時間がゆるやかに流れ、過ぎていったはずの光景が何ともなつかしく甦ってくる。梅原さんや河合さんの立ち居振る舞いが棟方志功や土門拳のシルエットと重なり合い、たがいに対話している姿までがみえてきた。それがまた私の心のうちに不思議な元気を誘い出し、思いもしなかった恍惚感に包まれるようになっていたのである。」

（四方田犬彦『いまだ人生を語らず』～「蝸牛のごとき勉強について」より）

「私淑する人物がいたなら、一度でもいいからその人物の訶撃に接しておくこと。これは重要なことである。（…）わたしの人生にはそういったことがいくたびもあった。　わたしから手紙を出して会いにいったところ、これはもう次元が違う、とうてい自分の及ぶところではないと観念した人物が、何人が存在している。知識の量や体験の壮絶さに圧倒されたというのではない。その人物の思考の身振り、その虚心にして自在な振舞いにただただ感嘆し、そのにこやかな表情の奥に深い叡智が宿っていることを知ったということである。（…）

わたしが出逢ったもう一人の人物は、宗教学者の山折哲雄である。わたしは東洋と西洋では、師と弟子の関係をめぐる大きな認識の違いがあることに思い当たった。一般的に西洋では、両者の間に基本的に三通りの関係がありうると考えている。弟子が師に反逆し、師を破滅させてしまう場合。逆に師が弟子を心理的に追い詰め、破滅させてしまう場合。最後に、両者が長い間の対立と反目の後に和解しあい、相互に深く信頼しあう場合。もっとも最後のものが稀有であることは、ここに書くまでもあるまい。山折さんはこうした事実を念頭に置きながら、東洋にはこの西洋的な類型学とはまったく異なった、三通りの師弟関係が存在していること、著書のなかで説いた。

ひとつは数多くの弟子に囲まれ、彼らを率いて諸国を遍歴するという孔子の道である。二番目は、徹底して弟子を持つことを拒み、晦渋な真理を説く孤高の賢人として生きる、老子の道である。三番目のものはきわめて難解であるが、禅宗の説く道である。臨済の説教には、人は師に出会っては師を殺し、祖に出逢って祖を殺せという一節がある。仏弟子を称するならば、仏の屍を乗り越えていくほどの気力と大胆さをもって修行を続けないと、とうてい悟りは覚えないという怖ろしい決意が、そこには語られている。

わたしは京都に山折さんに会いに行った。彼は単刀直入に、親鸞を読んだことがあるかねとわたしに訊ねた。はい、『歎異抄』を一応読みましたと返事をする、あんな短いものはあだめだ。あれは親鸞が死んで何十年も経った後、弟子の一人が想い出して纏めたものにすぎない。本当に親鸞があのように語ったかどうかも怪しいものだと思えが戻ってきた。山折さんはわたしに『教行信証』を読まなければいけないといった。『教行信証』は親鸞が五十二歳のときに一応の完成を見た理論的著作で、全六巻。夥しい仏典を自在に参照しながら、いかなる極悪人でも救済されるのであれば、それはどのような条件のものにおいてであるかという難問を解き明かそうとした大著である。この出逢いから十年が経ち、わたしはついに『教行信証』を読破し、親鸞について一冊の書物を著した。（…）ともあれわたしは自分の親鸞論を片手に京都に向かい、山折さんにもう一度会った。山折さんはわたしの新著を見て、「あっ、そう」という表情を見せただけである。口を突いて出たのは、『シン・ゴジラ』のことだった。（…）いつまで経っても親鸞が出てこない。

わたしはついに痺れを切らし、自分は十年前におっしゃられた通り、『教行信証』を読みましたと報告した。すると山折さんは、「あれはねえ、五十歳くらいはまだ若い頃に書いた書物だということですよ。親鸞の本当の境地は、彼が八十歳以降に執筆した和讃、それに奥さんに向けて書いた手紙です。それを読み解かなければ親鸞のことはわかりませんね」と、スラリといった。わたしは柔道の組手でいきなり足を外されたような気持ちになった。（…）驚くべきことはそれではなかった。しばらく話しているうちに判明したのだが、山折さんの手元にはもう柳田国男全集も、長谷川伸全集もないのだという。あっても邪魔になるばかりだから人にあげちゃいましてねと、笑いながらいう。

「でも親鸞全集だけは手放すわけにはいかないでしょう」と、わたしは訊ねた。「なあに、あれも若い人が読みたいというので、この正月にあげちゃいましたよ」もうこれは次元がまったく違いと、わたしは観念した。（…）長年にわたって読み続け、何冊もの著作の対象としてきたというのに、その親鸞への執着からみごとに解放され、飄々として怪獣映画の話をしているのだ、これではいつまで経っても追いつくことができないではないか。こまでは四年前の出来事である。山折さんはこのとき八十九歳。もう人生において充分に読んだ。充分に思考し、充分に書いた。書物に未練はなく、自分の解放のためにはすべてのものを周囲から遠ざけておきたいという心境なのだろう。（…）

仮にわたしが同じ年齢に到達することがあったとして、すべての書物を処分してしまうという決断を下すことができるだろうか。おそらくそれを実行したならば自分が大きな解放感に見舞われることは確実だろう。だが自分はそれだけの勇気を持つことができるだろうか。そのためにはあまたの書物を前に、後悔が残らないまでに思考を続けておかなければならないのだが、こればかりはわからない。」

◎山折哲雄
1931年生まれ。東北大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。宗教学者。国立歴史民俗博物館教授、京都造形芸術大学大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。2002年『愛欲の精神史』で和辻哲郎賞、10年瑞宝中授章、南方熊楠賞受賞。20年京都市文化功労者。主な著書に『仏教とは何か』『こころの作法』『法然と親鸞』『能を考える』『勿体なや祖師は神衣の九十年　大谷句仏』『老いと孤独の作法』など多数。

『談 no.127』の特集は
「自動化のジレンマ」

「自動化」とはいうまでもなく
AI（人工知能）によるものである

AI研究は現在
三度目の黄金期（第3次）を
むかえているといわれている

そのブームのきっかけをつくったのは
「深層学習（ディープラーニング）」で

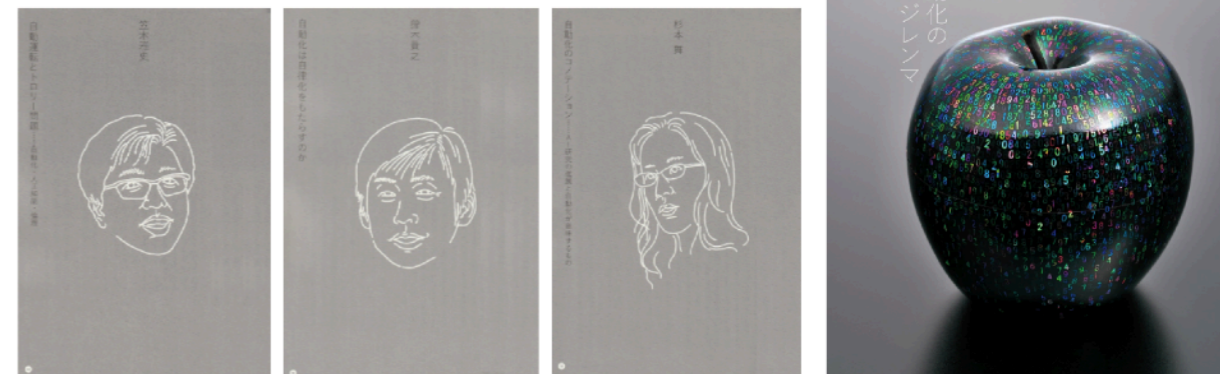
それは「コンピュータに大量のデータを読み込ませて、
そのデータのなかから何らかの法則性を
コンピュータ自らが見出していく手法」である

それまでのAIは
「目すべき特徴を人が指示」する必要があったが
深層学習ではたとえば
「大量の画像を読み込ませるだけで、
画像に含まれる着目すべき特徴をAIが
自分で抽出できるように」なり
より高い精度でクルマの完全自動運転をも
可能になるうとしている

しかしどんなに深層学習が進んで
「もし人間のすべての思考や行動を機械化、
もしくは自動化できたとしても」
それは「人間と同じ「知性」をもつ機械だ」
といえる保証はない

多くの場合人間の思考パターンと同じアウトプット
ときにはより精度の高いそれが導き出せたとしても
AIのなかでどのような思考パターンが
生じた結果そうになっているかはブラックボックスである

同じ顔をして
同じようなことを考えているようで
まったく違った道筋を通っているのだともいえる



■『談 no.127 自動化のジレンマ』（水曜社 2023/7）

そしてひょっとすると
致命的なアウトプットがそこに生じる可能性も
あるということなのだ

「自動化」の問題はまずそこにある

さらにはクルマの完全自動運転の際に起こりうる
（その例以外にも同様に起こりうることだが）
倫理学における「トロリー問題」がある
（長くなるので「トロリー問題」については引用を参照）

いわば究極の選択のような状況にあって
なんらかの責任が避けられないとき
その選択責任をどのように倫理的にとらえるか
ということである

これはかつてSF作家アイザック・アシモフが
『われはロボット』でロボットの行動について
提示した3つの原則

「人間に危害を加えてはならない」
「人間の命令に従わなければならない」
「自己を守らなければならない」
のような比較的わかりやすい問題ではない

しかもそうした原則を人間が与える際
政治的宗教的なバイアスなども
一般化できるような問題にはなりにくい

さてそんななか日本における
教育的現状をみると
「人間の知恵」を問うような課題さえなく
むしろAIの追従を目的とするような惨状である

「トロリー問題」にしても
いまや政治家が「責任はじぶんにはない」と言い放てば
そこに倫理的な問題がないかのようにされてしまうほどだ

さてそんななかで
今後さらに進んでいくであろうAIに対して
どのように「人間の知恵」を問い直していくか
その問いかけ如何で
人間の未来は大きく変わっていきそうである

- 『談 no.127 自動化のジレンマ』（水曜社 2023/7）

（佐藤真「自動化の台頭、問われる人間の知恵（wisdom）」～「脳をまねるAIの登場」より）

「一九五六年に開催された「ダートマス会議」は学問分野としてのAI研究の出発点とみなされていますが、その後二度の黄金期（第1次・第2次）と二度の冬の時代を経験し、現在、AIは三度目の黄金期（第3次）をむかえているといわれています。そのAIブームのきっかけをつくったのが深層学習（ディープラーニング）です。

深層学習は、簡単にいうとコンピュータに大量のデータを読み込ませて、そのデータのなかから何らかの法則性をコンピュータ自らが見出していく手法です。（…）

第2次ブームまでのAIでは、主に人がコンピュータに問題を解くためのルールを与えたり、知識を詰め込んだりすることで、知能（知識）を再現しようとしてきました。それに対して、現在のAI研究で主流となっているのが「機械学習」です。機械学習とは、機会（コンピュータ）が自ら「学習」するためのしくみです。機械学習にはいくつかの手法がありますが、その一つが脳のしくみをまねて情報を処理する仕組みで、ニューラルネットワークと呼ばれています。このニューラルネットワークの手法を発展させたのが深層学習です。」

「ニューラルネットワークのなかで、人工ニューロンの層を多層化した（深くした）ものが深層学習です。深層学習が、高い性能を発揮したことで、第3次AIブームが起きました。こうしたブレークスルーはなぜ生じたのでしょうか。それは、深層学習によって、ものをもってあるさまざまな特徴を、AIが自ら見つけ出すことができるようになったからです。

深層学習が登場する前の機械学習では、たとえば、チューリップとヒマワリを見わけるために「〈色〉と〈花びらのかたち〉に着目しなさい」というように、着目すべき特徴を人が指示しました。AIは、人に教えられた特徴をもとに、「赤みがこの程度で、花びらがこのような形ならチューリップ」などのように学習していたのです。しかし、どのような特徴に着目するかによって、AIの性能（答えを予測する精度）は大きく変わります。深層学習では、大量の画像を読み込ませるだけで、画像に含まれる着目すべき特徴をAIが自分で抽出できるようになったのです。しかもAIが抽出する特徴には、画素と画素の複雑な関係のような、人が明確まコトバで表せないものや、人では捉えきれないものも含まれています。そうしたことから、深層学習を使うことで、人が特徴を教えるよりもずっと精度の高い予測ができるようになったのです。クルマの完全自動運転が可能になりつるあるのも、AIの深層学習の発展があったからに他なりません。」

（佐藤真「自動化の台頭、問われる人間の知恵（wisdom）」～「自動化の倫理学」より）

「深層学習の「発展を後押ししたものに一九九〇年代後半からのインターネットの発展・普及があります。従来のデータ処理ソフトウェアではとても扱うことのできない巨大な規模のデータ、いわゆるビッグデータがインターネット上に流通するようになり、そうした大量のデータを統計的手法やパターン認識の手法を用いて分析し。そこから有用な知識やパターンを発見するデータマイニングが急速に普及しました。

深層学習は、人間の脳の神経細胞のつながりを模してつくられたシステムです。そもそもニューラルネットワークは、非常に複雑なシステムです。それゆえコンピュータが習得した独自の判断基準は、人はほぼ理解できないといわれています。（…）

じつは、このようなAIの特徴は、自動運転に利用する時に、問題となります。自動運転技術を語る際に避けて通れないのが一般的に「トロリー（トロック）問題」と呼ばれる倫理的な問題です。もともと哲学の応用倫理学の分野で話題になっていた問題ですが、それがクルマの自動運転技術においても同様の問題として、注目されるようになりました。

倫理学における「トロリー問題」は、およそ次のようなものです。「止まれなくなったトロリーがあり、そのまま進むと線路上で作業をしている五人をひいてしまう。その手前には分岐点があり、トロリーの線路を切り替えれば、五人の命を助けることができる。ただし、切り替えた線路にも作業員が一人いる。今度は、そちらの一人が犠牲になる。五人を救うために一人を犠牲にするか、一人を救うために五人を犠牲にするかあなたならどうする？」

同様の倫理的問題が自動運転でも考えられます。（…）運転者（人）がいれば、運転者の責任を追及することができますが、もとより自動運転車ですから、運転者はいません。

私たちは、ある人間に責任を問う時、問題の原因となった「行為」がその人自信によるものかどうかを考えます。哲学では、行為を生み出す能力をそなえた人を「行為者」といいます。つまり、責任を問う時は、その人間がそもそも行為者たり得るかを問う必要があるのです。（…）

AIに責任を負うことは、原理的にできないのです。」

（杉本舞「自動化のコノテーション…AI研究の進展と自動化が意味するもの」より）

「AIの研究者とお話していてわかるのは、「人間のように学習し思考するAI」はAI研究にとって地平性の向こうの、単純には実現できない遙かなる「夢」なんですね。目指す夢は同じでもそこに至るルートはいろいろあって、機械学習やロボティクスもその一つではあるけれど、どうしたらその夢に辿りつけるかについては、研究者の間でも合意はない。そういったことには、留意しておく必要があるかと思います。

また、もし人間のすべての思考や行動を機械化、もしくは自動化できたとしても、それがすなわち人間と同じ「知性」をもつ機械だ、と言える保証もないわけです。人間の思考を枚挙し機械化したとしても、人間の知性が枚挙された思考の集合に換言できるとは限らないし、そもそも枚挙できるのか、あるいは根本的に知性とは何か、ということさえそれほど自明ではありません。」

「…………コンピュータが今日のようにユビキタス化して不可知になっていき、アーキテクチャやプログラミングを意識しなくても使えるようになると、使っている人自身が、無意識に自動化されている状況が起きているのではないでしょうか。

コンピュータがブラックボックス、言い換えれば「魔法の箱」になっている、ということですね。今の大学生たちもまさにそのような状況に置かれていて、多くの学生はコンピュータにしてもスマートフォンにしても、中で何が起きているかをまるで知りません。AIにしても同じで、たとえば今話題の対話型AIの「ChatGPT」が出す答えも簡単に信用し、ご神託にしてしまう。アルゴリズムやプログラムが、とても客観的だと思いついでいるんです。でも、当然ながら処理するプログラムや入力するデータに偏りがあれば、出力も異なります。コンピュータの出力が本当に信頼できるものなのかどうかは、しっかり判断しないとわからないわけです。」

（鈴木貴之「自動化は自律化をもたらすのか」より）

「ニューラルネットワークは人間の脳をモデルにシテいますが、先ほどもお話したように、中間層の数や逆方向の情報の流れ、学習に必要な訓練データの量など、細かく見ていくとかなりの違いがあります。その違いがどの程度のものであり、どのような意味をもつものなのかは、今後の研究で明らかになってくるでしょう。

現在でも、たとえば画像認識におけるDNNの間違い方のパターンは人間とは異なる、ということが知られています。DNNの画像認識では、ある画像、たとえばイヌの画像に人間の目では、まったくわからないノイズを加えると、人間の目には依然としてイヌにしか見えない画像を、アヒルと判定してしまう、というようなことが起こります。このような現象は「敵対的事例」と呼ばれ、意図的にどういうことを引き起こる手法も発見されています。DNNと人間の脳のメカニズムが完全に同じであれば間違い方も同じはずなので、このような事例が存在するということは、やはりどこかに違いがあることを示唆しているように思われます。このような現象が存在することから、DNNと人間の脳はまったく違うものを学習しているのではないかと考える研究者もいます。これは非常に重要な意味をもつ問題かもしれません。（…）

私たちに見えないところで、AIが私たちの想定とは違うことを学習してしまっている可能性があるということには注意が必要です。」

（笠木雅史「自動運転とトロリー問題…自動化・人工知能・倫理」より）

「おそらく二つの問題があります。

一つは、深層学習というのは、その場その場の判断から学んでいく方式ですから、その学習されたものは、人間が考えるような原理的な思考の一貫性があるものになるとは限らないということです。かつ、「なぜその状況でそうしたのか。そうすべきだったのか」という判断を原理立てて説明できない状況が生まれることとなります。ここが「信頼」の問題と関係してきます。ある程度課題実効性が高く、ある程度うまくいるいるな状況を判定できるようなAIをつくっても、「なぜそういう判定をしたのか」ということの原理的な説明ができない」ということが、「AIは説明できない」とか「AIは信頼できない」とよく言われる理由の一つです。

もう一つは、メーカーによって深層学習のデータ、プログラムがバラバラだという問題です。事故を起こさないことを追求するなら、「走っているクルマすべてが同一プログラムにもとづく自動運転車」という状況がもっとも理想的です。同じシステムで動いていれば、二台のクルマが衝突しそうになっても、一方がそちに避けるなら他方はこちに避けるという判断が同時にできます。ところが異なるプログラムにもとづいていれば、相手のクルマの挙動は事前にはわかりません。」

「「トロリー問題」に関連しては、いろいろな調査が大規模に行われていて、なかには世界的な調査もあります。その結果から、「この原理が多くの人の意見と一致しているから、この原理に従ってプログラムした」と言ったとしても、「なぜそれが正しいのか」という回答にはなりません。（…）その際、伝統的な倫理学のやってきたことは、大いに役立つのではないかとと思っています。」

【目次】

〈コンピューティングの歴史〉「自動化のコノテーション…AI研究の進展と自動化が意味するもの」杉本舞（関西大学社会学部社会学科社会システムデザイン専攻准教授）

2010年代に入って、AIは歴史上3度目のブームを迎えたといわれている。コンピュータを用いた推論や自然言語処理、探索といった演繹的アプローチによる研究やパーセプトロンをはじめとする人工ニューラルネットワークに関する研究が始まった1960年代の第1次ブーム、エキスパートシステムをめぐって進展しAIビジネスが立ち上がった1980年代の第2次ブーム。そして、機械学習研究が進展しディープランニングがメインテーマとなった2010年代の第3次ブーム。AIビジネスへの投資が本格化し、いまやAIは国際競争力と国家安全保障の要になりつつある。コンピューティングの最大の特徴である自動化に焦点を当て、AI研究の歴史的検証を通して、自動化の意味および自動化概念の拡張領域を探索する。

〈AIの哲学〉「自動化は自律化をもたらすのか」鈴木貴之（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 相関基礎科学系教授）

自律型ロボット=ヒューマノイド型ロボットが人間社会に活躍の場を見出すことは、少なくともSFのなかでは、自明だった。鉄腕アトムはそうであったように、ロボットはその誕生から、自律するものだった。自律型ロボットが普及すれば、単純労働における労働不足が解消するかもしれない。究極的には、私たちは全ての労働を自立型ロボットに行わせることができるかもしれない。そうなった時、人類は歴史上初めて働く必要のない存在になるのである。RPAは、いわゆるロボットによる業務自動化で、人間がやるのと同じように自動的にさせることをいうが、AIはさらに進み、自ら考え判断して行動する。このことを自律と見なすわけであるが、この一連の行為は、本当に自律的といえるのだろうか。自動か自律か。この古くて新しい問題について、人工知能研究からアプローチする。

〈自動運転車の倫理〉「自動運転とトロリー問題…自動化・人工知能・倫理」笠木雅史（名古屋大学大学院情報学研究科准教授）

応用倫理学の分野で従来話題になるのがトロリー問題だ。トロリー問題とは、暴走するトロリー（trolley=路面電車）の線路上に、追突必死の作業員がいる。路線は、途中で2車線に分岐していて、左の路線には5人が線路に縛られて寝かされていて、右の路線には、1人が同じように縛られて寝かされている。線路脇には線路を切り替えるレバーがあり、その前で第三者が線路をどちらに切り替えるか迷っているが、分岐点までトロリーはせまってきている。さて、第三者はレバーをどちらに切るか、5人を救うためには、右に切る必要があり、1人を救うためには、左に切らなければならない。5人を救うために1人を犠牲にするか、1人を救うために5人を犠牲にするか。近年、自動運転技術の倫理的問題としてこのトロリー問題に関心が集まっている。ここにあるのは、典型的な自動化のジレンマだ。トロリー問題をいかに回避するか、というか、そもそもトロリー問題は解決不可能な哲学上のアポリアなのではないか。

◎杉本舞（すぎもと・まい）名古屋大学大学院情報学研究科准教授。著書に『「人工知能」前夜:コンピュータと脳は似ているか』（青土社 2018）、監訳書に『コンピューティング史:人間は情報をいかに取り扱ってきたか（原著第三版）』（共立出版 2021）他

◎鈴木貴之（すずき・たかゆき）東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 相関基礎科学系教授。著書に『人工知能とどうつきあうか』（勤草書房 近刊）、『100年後の世界』（化学同人 2018）他

◎笠木雅史（かさき・まさし）名古屋大学大学院情報学研究科准教授。著書に『モビリティ・イノベーションの社会的受容:技術から人へ、人から技術へ』分担執筆（北大和書房 2022）、『実験哲学入門』分担執筆（勤草書房 2020）他。

mediopos-3155 (2023.7.8) で

友田健太郎『自称詞〈僕〉の歴史』をとりあげたが
おなじ河出新書に「女ことば」について書かれた
平野卿子『女ことばってなんなのかしら?』がある

著者はドイツ語翻訳家であり

「女ことば」のないドイツ語を日本語に訳すとき
その違いを意識しないわけにはいかない

西欧語に「女ことば」がないからといって

性差やそれに伴う差別がそこに存在しないわけではなく
名詞に性があたり

三人称の性別で動詞の形が変わったりと
別の形で「性差の呪縛」は存在している

「女ことば」は

古くから存在しているように思われがちだが

たとえば「だわ」「のよ」といった言葉づかいは

明治時代の「女学生のはやり言葉」で

そのときには「下品で乱れた言葉」だとされていた

それが朝鮮半島や台湾などの植民地での同化政策の際

女らしさの表現とされるようになったという

戦後もそうした女ことばが称賛されることとなり

それが「日本女性は丁寧で控えめで、上品だという

「女らしさ」と結びつけられ、

「女ならば女言葉を使うはずだ」という意識」が生まれた

そうした歴史的経緯は知っておく必要があるし

それがあある種の「性差の呪縛」につながり得ることに

意識的である必要はあるだろう

個人的にも「女ことば」が強調されるのは

どこか不自然な感じがしてあまり好きではない

男女問わず丁寧語をベースに話しながら

必要に応じて謙譲語や敬語を織り交ぜて話すのが

いいのではないかと思うのだが

差異が差別につながらないのであれば

「使いたい人は使う、使いたくない人は使わない」

というのが基本ではあるだろう

ことばには歴史が刻まれている

そこには否応なく性別の差異や

それに伴う差別意識なども刻まれてきているが

それらをすべて中立的なことばに

人工的に置き換えていくことはできないだろう

重要なのは「性差の呪縛」という魔法から

じぶんを解き放つべく意識的であることだと思われる



■平野卿子『女ことばってなんなのかしら? / 「性別の美学」の日本語』
(河出新書 063 河出書房新社 2023/5)

■平野卿子『女ことばってなんなのかしら?／「性別の美学」の日本語』（河出新書 063 河出書房新社 2023/5）

（「はじめに」より）

「『性別の美学』は、日地谷＝キルシュネライトが日本の女性作家たちと対談した記録『〈女流〉放談―――昭和を生きた女性作家たち』に収録されたもので、そのなかで彼女は、かつて日本で暮らしたときに味わった困惑について次のように回想しています。

日本に来て日々驚かされたのは、日本社会においては人々の行動規範や自己理解や世界観が当たり前のように性別の違いによって区別され、美学化されている様子であった。

このような日本人独特の意識・価値観を、日地谷＝キルシュネライトは「性別の美学」と名づけました。でも……彼女の困惑はこのときが初めてだったのでしょうか。いや、ずっと以前、日本語を学び始めたときにそれはすでに始まっていました……ほかでもない「女ことば」の存在です。

長い間、なぜ、私は、クラスメートの男子と同じように「腹が減った」とは言えずに、「お腹が空いたわ」と女性用のやわらかい表現を使わなければならないのか、理由がまるで分からなかったのだ。

この論考に触発され、わたしはかつて自分の大きな関心事であり、いまも変わらず使っている女ことばについて、その歴史的背景も含めてじっくり考えてみたいと思うようになりました。たしかに西洋には日本のような形で女ことばは存在しません。ですから、日地谷＝キルシュネライトの気持ちはとてもよくわかります。けれども、（…）女性らしい話し方を強いられるのは日本だけの現象ではないのもまた事実なのです。」

（「第一章 女ことばは「性別の美学」の申し子」より）

「日本での経験を通して、日地谷＝キルシュネライトはこの国に女ことばが存在する理由を理解し、やがて次のように思うに至ります。

「性差」というカテゴリーは、やはりここにおいても重要な、いやむしろ決定的とも言える基準であり、日本語を形成している他の重要な特徴である「年齢」や「社会的階級・上限関係」などと比較しても、より絶対的な要素であるといえるかもしれない。

そして、この論考を次のように締めくくります。

当たり前のように男性と女性を区別する発想は、日本の文化の中に深く根を下ろしている。それだけに、男女を区別しようとする発想を克服することは、日本社会にとってはひときわ困難なのではないかと考えずにはいられない。

（…）

しかし……彼女があえてそこに「美学」というポジティブな表現を与えたところに、この問題が一筋縄ではいかないこと、「克服することは日本社会にとってひときわ困難」だと結論づけた理由を見ることができのです。」

「一般に女ことばと考えられているのは、次のようなことば遣いです。

- 特有の終助詞（「のよ」「わ」「かしら」「わよ」）を使う
- なまった母音（「うるせえ」「知らねえ」など）を使わない
- 卑語や罵倒後（「尻（ケツ）」「畜生」など）を使わない
- 接頭語「お」をつける（「お砂糖」「お花」など）
- 感動詞は「まあ」「あら」など
- 敬語をよく使う

女ことばは、古くから伝えられてきた日本の伝統のようにいわれてきました。でも、ほんとうにそうなのでしょうか。この点について、言語学者の中村桃子は次のように語っています（『朝日新聞』二〇二一年一月一三日）。

いま、私たちが「女言葉」と認識している「だわ」「のよ」といった言葉づかいの起源は、明治時代の女学生の話し言葉です。ただ、当時は正しい日本語とは扱われず「良妻賢母には似合わない」「下品で乱れた言葉」だと、さんざん非難されていたのです。女言葉が正当な日本語に位置づけられたのは、朝鮮半島や台湾などの植民地でとられた同化政策の中でのことです。「女と男で異なる言葉遣いをする」のが日本語のすばらしさであるとされ、多様な言葉づかいの一部だけを「女言葉として語る」ことで、概念が生み出されました。

戦後は日本のプライドを取り戻すため、女言葉はさらに称賛されるようになります。その中で、「女学生のはやり言葉」だったはずが、起源を捏造され、「山の手の中流以上の良家のお嬢様の言葉」だったと喧伝されるようになります。日本女性は丁寧で控えめで、上品だという「女らしさ」と結びつけられ、「女ならば女言葉を使うはずだ」という意識も生まれました。

この話から、世間で女ことばだといわれているものが、日本の伝統ではないどころか、為政者の都合によって推奨され、広まったものだということがわかります。中村によれば「そのとき、はじめから標準語の定義にかかった女性の言葉だけが取り入れられた」ため、女ことばは標準語だけに存在するのです（『女ことばと日本語』）。

「西洋諸国が「カップル社会」なら、日本はさしずめ「男女棲み分け社会」といえるでしょう。けれども根底にある考えは同じです。どちらにも「女は愚かで弱い」という大前提があり、それが西洋では「だから、俺のそばを離れるな」となり、日本では「だから、ひっこんでろ」となっただけのこと。」

（「第二章 人称と性」より）

「性差がことばに表れているといえば、日本語にはもうひとつ重要なものがあります。それはバイナリーな一人称。バイナリーとは、人間を生物的に女と男の二つに振り分ける立場のことで、日本語の一人称は「わたし（私）」を除けば、性別により使い分けがはっきりしています。これは日本語の大きな特徴です。」

「自分を僕という女の子、いわゆる「僕っ娘」が現れてからすでに長い年月が経っています（…）。自分のことを「僕」というわけは主として二つあるように思います。

ひとつは女らしさの規範かた脱して「男の子のように生きたい」という気持ち、もうひとつは「少女」から「女」への移行に対する恐れやためらいです。もっとも、この二つは厳密に分けられるものではなく、多くの場合分がちがたく結びついているといえます。」

「西洋人にとって一人称がひとつしかないことはまったく問題がないのでしょうか。半世紀以上も前のこと。ドイツで暮らして半年ほどたったある晩、遠距離恋愛で悩んでいた友人のモニカがいました。「だから、自分にいったのよね、わたし。『モニカ、あなた（du）もっとしかりしなくちゃ』って」このときはじめてわたしが、ドイツ語では自分のことをいうのに二人称を使う場合があることを知ったのでした（英語も同じ）。自分を他者としてながめて言い聞かせるのだ、と。」

「英語をはじめとする西洋語では、三人称単数代名詞はバイナリーであり、いちいち性を特定しなければなりません。このため、ノンバイナリーな性自認の人を指す三人称単数代名詞として、英語では「they」を使う動きが広がっています。動詞はそのまま「are」です。文法的におかしいと感じる人もいるかもしれませんが、二人称の「you」も単数複数ともに動詞は「are」ですね。」

「そもそも、日本語の三人称は「彼」だけでした。森鷗外が「舞姫」で、踊り子エリスを一貫して「彼」と記しています。女性の三人称として「彼女」という訳語を作ったところに、男性優位の思想が現れているといえます。男は基本形（彼）で、女はその派生形だからです。明治以降の西洋語の影響による日本語のめまぐるしい変貌を思うと、「彼女」「彼」がそんなに使われていないのはいささか意外な気がします。が、明治以降に生まれたこれらの三人称に、わたしたち日本人はいまでも心のどこかでなじめないものを感じているのかもかもしれません。」

（「第三章 日本語ってどんなことば？」より）

「日本語の特性について、ごく簡単にふり返ってみましょう。まず、「主語がないとは、誰がやったのかいいたがらないことに、「主観的」とは、事実より、自分はどう思ったかについて語りたがることに、「遠回しに拒絶する」とは、はっきりものをいいやがらないことに、「受け身が好き」とは、自分がやったのではなく、相手のせいだといいたがることに、「自動詞が好き」とは、自分がやったのではなく、自然にそうなったといいたがることに、「罵倒語や悪態が少ない」とは、品のないことばを使いたがらないことに、それぞれつながります。こうしてみると、日本語って、世間で「女性的」だとされてきた話し方に似ていると思いませんか。正確に言えば、「女性的だとされ、批判されてきた」特性を持つことばなのです。必ず主語を入れ、他動詞と能動文を好み、因果関係を明確に示そうとする西洋語とは、まさに対照的だといえるでしょう。けれども、穏やかで丁寧ないっぽうで、日本語は権威主義的で差別的な一面を持っている言語でもあります。なぜか。それは、敬語が非常に発達していることもあって、いつでも、何気ない会話でも、相手との上限関係や年齢差による自分の立ち位置を意識せずにいられないから。さらに、物心つくつかないうちに自分の性をいやおうなしに意識させられ、そのことが、その後の人生を陰に陽に規定するからです。」

（「第六章 女を縛る魔法のことば」より）

「「女らしさ」と「男らしさ」は一見対応しているように見えますが、その実意味合いが微妙に違います。含みのある「女らしさ」とは違い、「男らしさ」は、無条件に褒めことばなので、女らしさは過剰なときに、男らしさは足りないときに批判されるのです。」

（「第七章 女ことばは生き残るか」より）

「今後ますます使われなくなっていくと思われる女ことば。はたして女ことばが生き残るのか。結論からいえば、なくなることはないと、わたしは思います。その理由の一番大きなものは、言語学者金水敏のいう「役割語」としての働きです。「役割語」とは、特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代など）うい思い浮かべることができる言葉遣いのこと。女ことばはその代表的なもので、ほかに老人ことば「わし……じゃよ」「……でのう」、少年ことば「僕、……なんだとよ」、男ことば「俺は……だぜ」、方言「おら……だべ」などがあります。ただし、役割語は実際につかわれている（た）というより「それらしく聞こえる」いわばお約束の記号、虚構のことばであることが多い」。

「ここでひとつはっきりさせておきたいのは、日本語オリジナル・翻訳を問わず、女ことばがふさわしい場合があることです。そもそも女ことばとは「女は丁寧で上品なことばを使うべき」という理念によって作られたものです。いいかえれば、そのような価値観が大手を振っていた時代の女性の発言なら女ことばがふさわしいことになります。まずは時代背景です。」

「西洋語には「女ことば」はないという意見もありますが、翻訳はあくまでも「日本語で表現するとしたら」が原点です。たとえば、初対面の相手には日本では敬語を使うのが基本ですから、そういう場面ではたとえ原文がフラットな文章でも、敬語で訳すことが多いでしょう。」

「本書を閉じるにあたって、わたしは自分に問いかけてみました。日常の話ことばとしての女ことばは早晚消えていくだろう。わたしはそれを寂しいと思っているのだろうか。いや。なぜって、わたしはいま多くの女性たちが話している「中立語」を簡潔で気持ちがいいと思っているから。なんであれ、女と男を徒に「区別」しているものが、この国から減っていくことはわたしの心からの願いだから。生粋の女ことば話者であるわたしは、これからも女ことばを使い続けます。そのことに少しも抵抗感はありません。（…）女なのだから女ことばで話すようと強制されることは、さすがにもうないでしょう。（…）使いたい人は使う、使いたくない人は使わない、それだけのことです。」

◎平野卿子

1945年、神奈川県生まれ。翻訳家。お茶の水女子大学卒。テュービンゲン大学留学。メアス『キャプテン・ブルーベアの13と1/2の人生』でレッシング翻訳賞を受賞。訳書にマン『トーニオ・クレーガー』他多数。

世界は言葉でできているともいわれるが
 私たちは言葉によって
 分節化された世界で生きている

そしていちど分節化されると
 分節化される前の世界に戻ることは難しい

言葉においても
 また身体においても
 世界を「分かる」ということは
 世界を「分ける」ということであり
 いちど分けられた世界で生きると
 いまだ分けられていない世界での感覚を
 再獲得することは困難である

戸井田道三はその困難な道を
 探求しようとした思想家であるということもできる

戸井田道三については
 mediopos-3145 (2023.6.28) で

『生きることに〇×はない』をとりあげたばかりだが

戸井田道三の思想について
 生前その教えを受け親交をむすんでいたという
 人類学者・今福龍太による
 戸井田道三論『言葉以前の哲学』が刊行されている

戸井田道三は一九八八年に七十八歳で亡くなるまで
 療養のために転居した湘南辻堂で約五三年間暮らし
 その場所で「非土着のネイティヴ」として
 自己のからだを見つめながら
 「深層の歴史」を探究した思想家である

「深層」とは
 「言葉以前」の無意識領域の歴史である
 それはひとが生まれたときに
 「地」として生き続けている内在的な知覚
 としての感覚領域のこと

今福氏が「非土着のネイティヴ」と表現しているのは
 「そこで生まれ育った土着民でないにもかかわらず、
 だれよりも、そうした土地の生活者の日常意識と
 変化への思いを、共感と共苦とともに
 彼らの傍らで生きようとした人」のことである

「言葉以前」の「深層の歴史」というのも
 多くの哲学者が抽象的な概念のなかで
 探求しているような思索によるものではなく
 土地の生活者の意識とともに生きること
 で見出すことのできた歴史を意味している

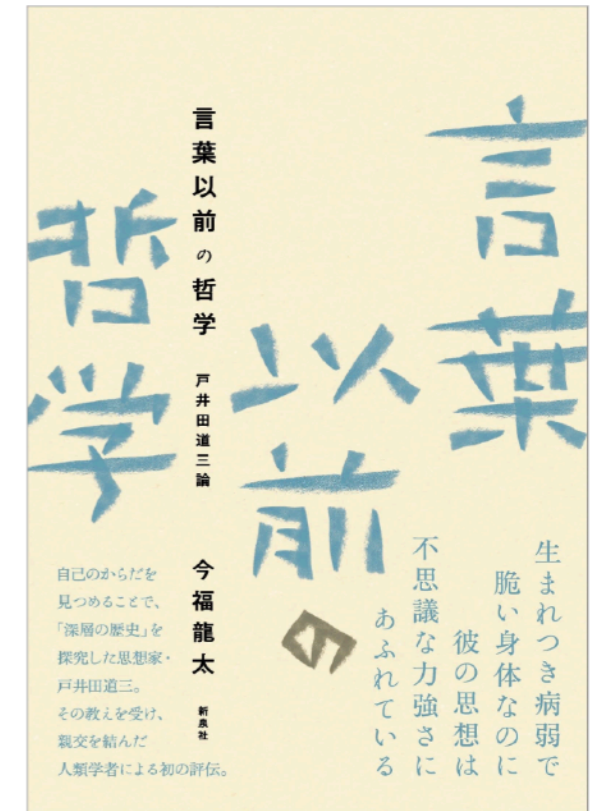
しかもその「歴史」は
 「文字記録と言語的な再構築によってつくられた
 公の「歴史」と呼ばれるものとは違う、
 主体的な「いま」を貫いているそれだという

そうした「いま」を探求するために戸井田氏は
 「「ない」ということから出発する思考法」
 へと到達しようとしていた

「ない」とは
 存在／非在における非在ではなく
 「意識と存在が分化する以前のテリトリーにたつことで、
 思考の言葉によっては
 その存在を認識することのできない領域」のこと

そうした思考法をとることで
 「言葉以前」の無意識領域の歴史へと
 迫ろうとしていたという

それがどこまで有効なのかどうかはわからないが
 「言葉以前」の領域に溯ること
 であらわれてはこない「ない」から
 出発することができれば
 言葉によって失われたものを
 見出すこともできるのではないか



■今福龍太『言葉以前の哲学—戸井田道三論』
 (新泉社 2023/6)

そうした「言葉以前へのまなざし」という視点は
 たとえばChatGPTのような
 「言葉以前」の存在しないAIを問い直す意味でも
 非常に重要だと思われる

■今福龍太『言葉以前の哲学―戸井田道三論』（新泉社 2023/6）

（「2　言葉以前へのまなざし／舌でしゃべること」より）

「『言葉以前』と彼が呼ぶ人間の誕生時の感覚領域（であると同時に人間の深層に「地」として生き続けている内在的な知覚）を言葉によって探り出そうとする戸井田は、人間の日常的な動作のかけに隠された、原初の「みぶり」の存在にまず注目する。」

「対象と言葉以前の状態においてつながっているという連続性の感覚のなかに、自己の認識を解き放ってゆくようなこうした体験こそが、もっとも戸井田道三的な体験の原点であった。子供のときに座敷でぐるぐるまわってわざと目をまわす遊戯の体験も、戸井田にとって風車を見つめる赤ん坊への復帰以外のなにものでもなかったことが了解される。すなわちそうしたみぶりは、幼児が前言語的渾沌のなかから言語を学習してゆく構造形成のプロセスをあともどりすることによって、人間が原初感覚領域に遊行するための仕掛けとなっているのだった。」

「言葉以前の「原初」のみぶりに対する特異な感覚は、こうして身体の領域から図像やデザインの領域にまで投影されてゆく。物質の構造的な形態に自らの原初の身体感覚を流し込んでゆくような発想法――。『言葉以前』への感受性に根ざした戸井田特有の図像学（イコノロジー）の秘密がここにある。

「言葉以前」の世界へ溯ろうとする戸井田が方法的にもっとも見事に駆使したのが、言葉の「音」としての性格をなかだちとした概念連関の方法である。『色とつやの日本文化』に収められた「摺染（すりぞめ）のみだれ」という文章がこうした方法の独自性を鮮やかに示している。

あるとき戸井田は、家の幼い子供たちが白紙の上に置いたもみじの葉に霧吹きに入れた墨を拭きかけ、もみじの葉の痕がくっきりと紙の上に残るのを面白がって遊んでいる姿に引きつけられる。これを、もののかたちが紙にうつることへの興味であると考えた戸井田は、「うつる」という音がかかえこんでいる多様な感覚の世界に思索をめぐらせることによっいえ、「言葉以前」へたどり着こうとする。「うつる」ことの背後には、ゆるやかな「移行」の感覚が存在している。もみじの葉で遊んでいた子供たちには、まさに葉の像が写真を撮るようにいっぺんにパツと転写されるのではなく、墨の霧が紙の上に落ちるにしたがって徐々にしあがってゆくという「移行」の過程が面白かったにちがいないのだ。うつるは「移る」であると同時に「写る」でもある。現代の写真技術では、なぜ写るかは科学的に説明できるが、それでも人間は「写る」ことのなかに不可思議な何かを感じとる。」

「「うつる」ことの神秘は、写真というような近代テクノロジーのなかにおいても潜在的に知覚されているのである。さらに、病気がうつるともいうようにん、「うつる」とは「伝染する」ことでもあった。伝染と、「染」の字を使うことからわかるように、病気の伝染とは病に「染ま」ることであり、それが「うつる」ことのひとつの現れ方であると考えられていたことを示している。しかも「染まる」ことはどこかで布地を「染める」ことにつながっていた。原初の摺染めとは、自然の草や花のかたちあるいは色をじかに布地にうつすことである。摺染めは布についた一種のまだらやしみのようなものではあったが、それは染色技術の未発達がもたらしたものであるとよりも、むしろより呪術的な動機にもとづいていた。そしてそのことが、摺染めにある特別な感覚を付与し、それによって「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎりしられず」（『伊勢物語』）という歌にあるような「心の乱れ」を象徴する心理的有徴性をのちに獲得してゆくことになる。」

「「うつる」という音と「しみる」という音をむすんで言葉が意味の世界に分化してゆくぎりぎりの稜線をゆるやかに渡りながら、ここで戸井田は理解や感情のシステムの底にひそむ「言葉以前」の感覚へと、微細な思索の通路をひらいてゆこうとしているのである。」

「『食べることの思想』に収められた「おしゃぶり」という文章が、言葉の音声的側面をなかだちとして、隠されていた概念連関を発見する戸井田流の思考法の一つの到達点を示している。（…）戸井田は「しゃぶる」ことで幼児は乳以外の何かをも味わっているのではないかと指摘する。赤ん坊が、食べ物でもないのにあらゆるものを口へ持ってゆく行為は、彼らが「しゃぶる」ことによって。彼らの外界に展開しはじめた対象をなんとか認識しようとしてとめていることを示している。やがて赤ん坊はなにかわけのわからぬことを「しゃべり」はじめる。すなわち「しゃぶる」も「しゃべる」も、舌と唇でする行為として、おなじ生理的な感覚を共有して言葉以前の語感を含む言葉だったのである。「言葉の始まりはしゃべるだったと考えてまちがいない」としながら、戸井田はしゃべることのなかに含まれていた言葉の未分化な流動体がやがて一定の「型」をそなえ、文法的・音韻露的分節化を経て「語る」ことが可能となる道筋をしめしてゆく。すなわち、「語る」と「型」は同根だったのであり、「しゃべり」を型化することで「語る」ことが生まれたのであった。」

「戸井田の関心は、つねに、個々の言語体系として成立した意味の世界のなかにはではなく、個別言語に特化する以前の人間共通の普遍的な「理解の体系」が、非言語的媒体を通じて社会や身体に表面化してくるさまざまな現象のなかにあった。したがって言語学的な意味においても、戸井田の思索はきわめて本質的なものであった。」

「晩年の戸井田道三は、かなり意識的に「からだ」という言葉と「身体」という言葉を区別して使っていたように見える。「からだ」とは、とりえず戸井田にとって、いわゆる生理としての、あるいは物理的存在としての「肉体」を意味していや。それは完全にマテリアルな存在であり、それはまだ「思考」したり「理解」したりする以前の段階にあると考えられた。一方「身体」とは、まさに人間がそのような「からだ」という物理的現象を認知し、了解し、それを空間のなかで使用してゆくときに立ち現れるもので、自然-文化-歴史の連続体のなかに置かれて息づく人間的な現象のことであった。「からだ」が認識による了解以前のからだであるとすれば、「身体」は了解されたあとのからだであるともいえるだろう。

「からだ」という物理的な存在の周囲に、理解や了解のさまざまなコードを接続してはじめて「身体」ができあがるとすれば、それはすでにみえてきたように、人間が「言葉以前」の感覚を分節化し、「分ける（＝分かる）」ことによって作り上げられた制度的・社会的システムに対応するものであった。（…）

人間は自己の周囲の空間を目によって了解し、そのなかで自分が動き回るための構造化された空間を作りだしてゆく。それは私たちの個々の生と特殊な関係をもったいわば「生きられた空間」であって、決して数学的で同質的な空間ではない。」

戸井田道三が自己の病弱なからだへの凝視を続けることにとって到達した思索の地平では、存在と意識との関係は奇妙に転倒した姿をみせていた。「カラダがおぼえる」（『忘れの構造』所収）という文章で、戸井田道三はデカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉を引いて、これは「思う」ことと「思うことの自覚」とが思うことのなかで飛躍しながら連続することをデカルトが表現したのだと考える。従来の哲学は、すべてこのデカルト的な、意識の自覚を存在とむすびつける。いわば「在る」の思考から出発していた。しかし戸井田が晩年に到達しかけていたのは、ちょうど転倒したデカルト主義ともいうべき、「ない」ということから出発する思考法だった。「ない」というのはしかし存在／非在という二分法における非在ではなく、意識と存在が分化する以前のテリトリーにたつことで、思考の言葉によってはその存在を認識することのできない領域（すなわち「ない」という世界）に探りを入れてゆくための方法を意味していたのである。」

（「あとがき」より）

「戸井田道三が教えてくれたこと。ひとことで言えば、それは「言語以前」という、人間の身体における無意識的領域の重要性です。脆弱な身体を抱え、それを繊細に感じながら生きることをつうじて、彼はこの無意識領域が人間の意識と身体を結んではたらいっていることを確信したのです。そして、身体に刻まれた深層の記憶領域に降りてゆくことで、人は文字記録と言語的な再構築によってつくられた公の「歴史」と呼ばれるものとは違う、主体的な「いま」を貫いている「深層の歴史」に出逢うことができる、と戸井田は説きつづけました。それは、独創的な「歴史学批判」の実践として、彼の思想を貫いています。」

[目次]

1　非土着のネイティブ――土地に住むこと

2　言葉以前へのまなざし――舌でしゃべること

3　乳色の始原へ――母を思うこと

4　思考のヘルマフロディーテ――性を超えること

5　翁語りの深淵――時間を生きること

6　歴史の昂進――色が移るうこと

7　はるかに、遠くへ――旅に憧れること

あとがき

◎今福龍太（いまふく・りゅうた）
文化人類学者・批評家。1955年東京生まれ湘南の海辺で育つ。1980年代初頭からメキシコ、カリブ海、アメリカ南西部、ブラジルなどに滞在し調査研究に従事。その後、国内外の大学で教鞭をとりつつ、2002年より奄美・沖縄・台湾を結ぶ群島に遊動的な学び舎を求めて〈奄美自由大学〉を創設し主宰。著書に『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』（讀賣文学賞）、『宮沢賢治 デクノボーの叢智』（宮沢賢治賞・角川財団学芸賞）、『ぼくの昆虫学の先生たちへ』など多数。主著『クレオール主義』、『群島―世界論』を含む新旧著作のコレクション《パルティータ》全5巻が2018年に完結。

☆mediopos-3160 2023.7.13

岩井俊二監督の映画『キリエのうた』が
10月13日に全国公開される

主演はミュージシャンのアイナ・ジ・エンド
そのほか松村北斗・黒木華・広瀬すずらが
出演するという

現在のところWeb等でも
まだ断片的な紹介しかされてはいないが
原作小説が文庫で刊行されている

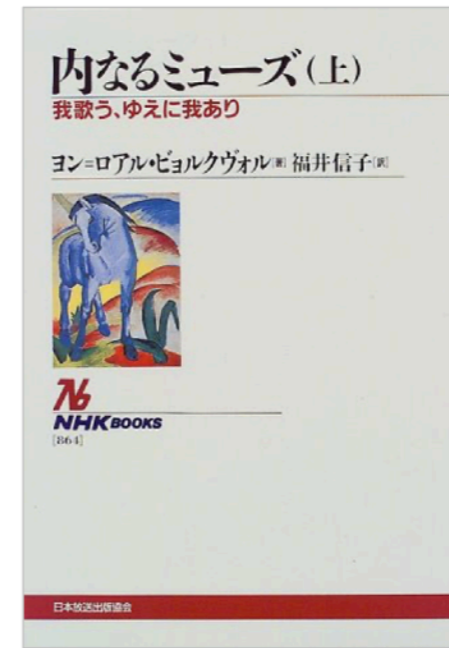
「うた」といえば
岩井俊二は音楽家でもあり
監督作品である映画『リリイ・シュシュのすべて』も
歌手のSalyuがリリイ・シュシュ役となって
物語のキーパーソンとして位置づけられていたが
Salyu本人はプロモーション映像としてだけ出演していた

『キリエのうた』では
アイナ・ジ・エンドが
シンガーソングライターである“KYRIE”として
主演をつとめるという
まさに「うた」そのものがテーマとなった映画であり
東日本大震災がその背景となっている
今年(2023)は2011年の東日本大震災から12年である

YouTubeで公開されている
岩井俊二の【片付かない部屋】08と09に
『キリエのうた』の主演として
アイナ・ジ・エンドと出逢った話が語られている

岩井俊二が脚本の原案を考えていたとき
アイナ・ジ・エンドのうたを聴いて
「この娘しかいないんじゃないか」と
直感的に感じて動きはじめたそう

アイナ・ジ・エンドのことをまるで知らなかったので
早速岩井俊二の紹介している「金木犀」
そして「きえないで」を聴いてみると
「リリイ・シュシュ」にもつながる「うた」「声」である
岩井俊二のイメージする世界にぴたりと嵌まったのだろう



■千葉聡『招かれた天敵——生物多様性が生んだ夢と畏』
(みすず書房 2023/3)

さて主人公の「キリエ」は
路上ライブで「うた」は歌えるのに
話す「声」は「ほとんど息だけで話す」ようにしか出ない
東日本大震災で起こったことが原因のようだ

話すことはむずかしくても
うたうことはできる…

『キリエのうた』を読みながら
そのことを反芻していたのだが

ひとは「うたう」ことから始め
「話す」ことへとうつつっていったのかもしれない

始めに「うた」があった
ということだ

思いだしたのがノルウェーのオスロ大学の
Yon-Roar Björkvoldの著書
『内なるミューズ 我歌う、ゆえに我あり』である
(原著は1989年・翻訳は2004年)

ひとはその生のさまざまな段階で
内に潜むミューズが大きな働きをしていることを
解き明かそうとするものだ

かつて「ミューズの女神たちは
存在に声を与えるために生まれ」
「ことば、踊り、歌で世界を変え」ることができたという

そのミューズの女神たちは
いまはひとのなかに潜んでいて
その「内なるミューズ」的な「うたう」力が
「生命への意志を表明し、動的に生を肯定し、
生を発展させる源泉そのもの」となり
そこから「創造的なものが育」っていくのだという

「キリエ」も
みずからの「内なるミューズ」の力で
その生を前へと
進めようとしていたのだろう

- 岩井俊二『キリエのうた』（文春文庫　文藝春秋 2023/7）
- ヨン=ロアル・ビョルクヴォル（福井信子訳）『内なるミュージズ　我歌う、ゆえに我あり(上)（下）』（NHK出版 2004/8）

（岩井俊二『キリエのうた』～「名前のない街」より）

「彼女は立ち止まると、手にしたギターケースを路上に置いた、そのギターケースは年季物で、黒いボディは色褪せ、金具は錆びていた。留め金を外して蓋を開けると中から艶やかなギターが姿を現す。縦に二つ溝穴の空いたギターヘッドはクラシックギターの特徴だ。彼女は手を差し延べ、ギターをケースから取り出す。眠っている子供を抱き上げるようにして。彼女にとってそれは、かけがえのない音楽の相棒。旅の伴侶だ。ギターケースの底にはスケッチブックが一冊。それを出して開いて、道の上に三角に立てると、小さな看板が出来上がる。そこには手書きで大きくこう書かれている。

“K Y R I E、

　読み方は、“キリエ”。彼女のアーティスト名だ。この日のキリエは、黒のワンピースにグレーのパーカという出で立ちである。キャリーバッグを横に倒し、それを椅子代わりに、黒く長い髪をそのままに、ペグを回してギターのチューに入を始める。チュ`ナーがあれば便利だが、生憎彼女は持っていない。音叉もない。絶対音感があるわけでもない。なんとなく適当に合わせているらしい。自分の声とギターの音色で。」

「あたしはイツコ。あなた、お名前は？」
キリエはおずおずと名刺を差し出す。手書きの名刺である。アルファベットで“K Y R I E、”と書いてある。肩書きはシンガーシングライターとある。
「なんて読むの、これ」
「（キリエです）」
キリエの話す声は声になっていない。ひそひそ声というか、ほとんど息だけで話す。
「キリエって読むの？」
「（はい）」
「シンガーシングライター！　歌も作るのね。さっき歌ってた曲も自分で作ったの？」
「（はい）」
「全部？」
「（はい）」
「そう。すごいわね。生まれは？　東京？」
「（石巻です）」
「　キリエは単語帳を取り出して、広げて見せた。そこには“石巻、と書かれている。次のページをめくると“宮城県、という単語が出て来る。よく聞かれる質問は、あらかじめ単語帳にその答えがストックされているようである。
「あなた、声どうしたの？」
「（声が出ないです）」
「風邪？」
「（違います。ずっとです）」
「歌ってたじゃない。歌は歌えるのに？」
キリエは気まずそうに頷く。単語帳をめくり、それを見せながら同じ言葉を繰り返す。
「（歌しか歌えません）」」

（ヨン=ロアル ビョルクヴォル『内なるミュージズ　我歌う、ゆえに我あり(上)』～「訳者まえがき」より）

「「ミュージズ」とは芸術的才能に恵まれた特別な人間にだけ関わるもの、と一般に思われている、（…）だがそうではない、とビョルクヴォル氏は主張する。ミュージズとは普遍的なものであり、人間はみな誰も心にミュージズをもっている。どんな人間の内にもミュージズ的な何かが存在するという。心の中からわかいあがるような、生きている喜び、生きていく力は、誰の心にもあるはずだと、著者は繰り返し主張する。いわゆる西洋音楽の枠内にはおさまらない、音、運動、リズムをミュージズ的な基本要素ととらえ、ビョルクヴォル氏の話は始まる。」

（ヨン=ロアル ビョルクヴォル『内なるミュージズ　我歌う、ゆえに我あり(上)』～「序章　ミュージズ的人間」より）

「私たちは皆「ミュージズ的人間」を必要としている。ミュージズ的なものを抜き取られるとたちまち、人は己の人間性に本質的なある深いものを失ってしまう。それゆえ、ミュージズ的人間を理解しようとし、その始まり、特徴、様々な展開の仕方を少しでも把握することが重要だと思われる。」

「本書の願いは子どもの願いのように素朴である。力いっぱい、今生きている命に向かって身体を伸ばすこと。この命をすみずみにまでつかもうとすること。そしてそれを意味のある断片へと解釈しなおすこと。」

（ヨン=ロアル ビョルクヴォル『内なるミュージズ　我歌う、ゆえに我あり(上)』～「第二章　遊ぶ子どもは生きることを学ぶ」より）

「人間は「生まれながらにしてミュージズ的」なのだろうか。簡単に返事はできない。人間の中のミュージズ的なものは、外部の印象や人生経験が創造的な表現をとって形づくられる瞬間初めて活動を開始するのである。これは乳児期の初期から高齢にいたるまであてはまることである。すべての人間にとって、存在、アイデンティティの確認、生命の熟知―――これらを獲得するための手がかりとなるのである。」

（ヨン=ロアル ビョルクヴォル『内なるミュージズ　我歌う、ゆえに我あり(上)』～「第五章　教室でのミュージズ的人間」より）

「古代の思考世界が表現しているように、ミュージズの女神たちは存在に声を与えるために生まれた。当時はまだ「神々の」世界であった。ミュージズの女神たちは、ことば、踊り、歌で世界を変えることのできるオリュンポスの女神であった。美と真実は、倫理的命題として一つであった。ミュージズ的なものの議論で、私たちは女神たちのことに触れなかった。私たちが言及したのは「人間」、人生の初段階を経ていくミュージズ的人間の進む道である。そのとき問題にしているのは、人間的に意味のあるものに到達するために、その鍵として真の表現があり、その真の表現を生み出す源泉が私たちの内にあるということである。このように見ると、子どもの表現力はミュージズ的と言える―――子どもの最初の、両親と一緒に喉をひろひろ鳴らす音遊びから、三歳児が友だち仲間と自発的に歌う歌。嵐の中死も乗り合わせた船の上で少女が歌う歌にいたるまで、子どもは皆ミュージズの表現力を所有している。それは生命への意志を表明し、動的に生を肯定し、生を発展させる源泉そのものである。ミュージズ的なものから創造者の能力、つまり創造的なものが育つ。なぜならミュージズ的な自己表現に近づかなければ、どんな人間も自分の人生を創造できないのだから。子どもは皆どんな日でも、創造的な突破を敢えて試み、昨日の認識の限界を踏み越え、常により大きな、より深い人生の場を征服しつつ進まなくてはならない。創造性がなければ人間は破壊的な成長をする。」

「私たち大人は年を取るにつれて、全体を見る能力、全体で生きる能力を失いすぎた。私たちの大半は、分裂し専門化し断片化した文明と教育制度の申し子であり、理性だけを唯一信頼できるものとして参照している。（…）だが子どもたちはまだ「壮麗さや秘密の印」を見ることができる。」

四方幸子『エコゾフィック・アート』は副題にもある通り「自然・精神・社会をつなぐアート論」である

「エコゾフィー」はガタリが『三つのエコロジー』で提唱したエコロジー+フィロソフィーの造語でエコロジーを自然環境だけでなく社会や精神にまで拡張したもの

そして四方氏の試みは人新世といわれる現代におけるアートを社会の諸領域さらには地球における存在の総体としての自然や精神・物質へと接続していくことにある

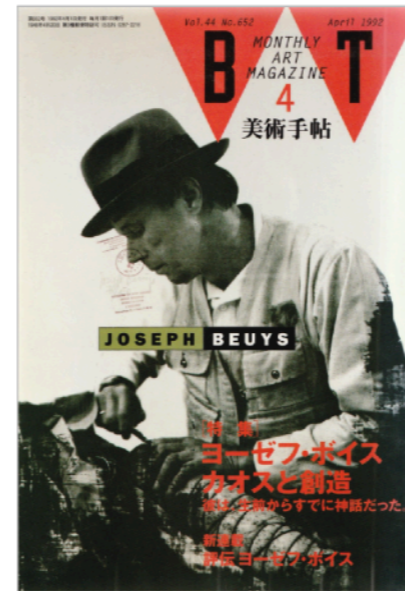
本書の第2章で展開されているエコゾフィック・アート論のフィールドは「森」「生」「渦」「水」「地」「力」そして「電子」とあるようにインターネット後の世界をもふまえながら時間・空間を超えた循環＝「情報フロー」という独自の視点で非人間も含めた生態的環境を扱う数々のアート作品へと探求がなされている

四方氏の思想は上記にふれたガタリの「エコゾフィー」とともにそのキュレーションの仕事をするきっかけとなったヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」がその源流にあるが

ヨーゼフ・ボイスの思想はゲーテやノヴァーリスそしてなによりシュタイナーの人智学がその根幹にある

そしてそのアートそしてパフォーマンスは近代化により排除されてきた世界観や動植物や自然全般とのコミュニケーションにも関わり

「生と死」「物質と精神」「熱と冷」「直観と理性」「カオスと結晶」「中心と周縁」「西洋と東洋」といった近代化のなかで強化され続けてきた二元論的対立ではなくそれらが循環する情報フローの「流動性」によって起こる「変容」へと誘うものである



- 四方幸子『エコゾフィック・アート／自然・精神・社会をつなぐアート論』（フィルムアート社 2023/4）
- 渡辺真也『ユーラシアを探して／ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイク』（三元社 2020/2）
- 『美術手帳 1992年4月号／特集：ヨーゼフボイス カオスと創造』（美術出版社 1992/4）

「西洋と東洋」へのアプローチとしてはナムジュン・パイクとのプロジェクト「ユーラシア（ヨーロッパ+アジア）」がある

ユーラシア(Eurasia)とは地球の陸地の40%を占める大陸である

ボイスはシュタイナーの人智学を經由しながらその大地の西に位置するヨーロッパ(Euro)と東に位置するアジア(Asia)に共通する文化的ルーツに目をむけ東西に分裂した世界の再構築を目指した

その「ユーラシア」のプロジェクトの詳細に関しては渡辺真也『ユーラシアを探して』に詳しいがそれに関しては稿を改めて紹介する機会を設けたい

さて四方氏の『エコゾフィック・アート』の射程にはガタリが「エコゾフィー」としてとらえた自然・社会・精神の三つだけではなく一九九〇年代に登場したインターネットやAIの進展が踏まえられている

ある意味でデジタル・テクノロジーが大きな力をもった社会においてはいわば「四つのエコロジー」が問題となるのである

デジタル・テクノロジーにおけるエコロジーは政治的にもメディア的にも監視社会のツールと化そうとする動きに対する警鐘を発するものであるとともにそこにボイスの唱えたような「自由」「創造力」「経済」へとリンク可能なものとしていく必要がある

そんななかでこそ「さまざまな情報のフロー（流れ）、絡まり合い、循環するもの」としてとらえられた世界を「変容」させるプロセスとしての「自然・精神・社会をつなぐアート」が不可欠となってくるのだといえる

- 四方幸子『エコゾフィック・アート／自然・精神・社会をつなぐアート論』（フィルムアート社 2023/4）
 - 渡辺真也『ユーラシアを探して／ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイク』（三元社 2020/2）
 - 『美術手帳 1992年4月号／特集：ヨーゼフボイス カオスと創造』（美術出版社 1992/4）
- （四方幸子『エコゾフィック・アート』～「はじめに」より）

「私は世界を、さまざまな情報のフロー（流れ）、絡まり合い、循環するもの―――そこには自身も含まれる―――として捉えている。たとえば空気、水をはじめとする生態系、人間を含む動植物、土や石そして地層、言語、そしてデジタルデータなどである。つまる何かを見るとき、「モノ」や「かたち」ではなく、ミクロ・マクロの時間や空間における循環にある現在の「状態」として見るまなざしである。いわゆる「表象」ではなく、変容の「プロセス」として世界を見ている。そしてそれを捉える自分自身も、常に変容するものとして。

そのような世界観へシフトしたのは、一九九〇年代、メディアアートの黎明期にキュレーションに関わったときだった。当時登場したインタラクティブな作品は、デジタルであれ、体験者の動きや生体データであれ、情報として流れて伝達していくことで、リアルタイムな映像や音を含め空間が変容していくものだった。それが体験者にフィードバックされ、新たな動きや反応を生み出していく。そして実感した。メディアアートの重要な側面のひとつに、体験者が日常に戻ったときに、世界に存在するあらゆるものがインタラクティブにつながっていることを気づかせてくれる力があるのだと！

私たちはそれぞれが、生体・言語・社会・環境的な情報を入力する情報のノード（結節点）であり、津年にダイナミックに動いている。呼吸するだけでも、視線や指を微かに動かすだけでも、自身も世界も変化する。さまざまな情報が影響し合う世界は、今ここだけでない。空間そして時間的につながり影響を及ぼしていく。今ここでの世界の受容と行動が、未来へつながっていく。もちろん現在も、過去に起きたことの派生としてである。時間や空間はつながっており、人類が生まれる前、地球ひいては宇宙が生まれた時点から連続として今ある「世界」とは、今ここにあるだけではなく、むしろ過去や未来を含め、時間や空間でつながった総体として存在している。

また人間は、二重の存在である。宇宙の生成以降、とある時期に生まれた「自然の一部」でありながら、自然を対象化できるという、現時点においては生命体の中で唯一の存在である。近代以降、人間は科学・技術を駆使して後者、つまり自然の対象化に邁進してきた。それは自然だけでなく、人間でさえも「モノ」として対象化し、支配する状況を生み出した。（…）

「人間の対象化」は、しかし同時に人間が自身を世界とつながり生かされている存在として省察し、発見する可能性ともいえる。人類は何をしてきたのか、今生かされている人間が総体として、そして私たちそれぞれが何をしているのか、また何をしようのか？　過去に生きた人々、未来に生まれる人々、あるいは過去や未来の動植物、生態系に対しては、物理的・直接的な行動はできないが、時間・空間を含め、すべては情報フローとしてつながっている。今生かされている私たちが、そのことに向き合い生きていくことで、健やかな世界へふみ出せればと思う。

コロナ禍において私は、一九八〇年代初頭に私がアートの世界に入るきっかけとなったドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイス（一九二―八六年）が提唱した「社会彫刻」や「人は誰もが芸術家である」という言葉の根底にある「変容（トランスフォーメーション）」という概念に再び向き合った。ボイスは「変容」を、とりわけ熱エネルギーの流動により生起するものとしているが、それが、私自身がメディアアートのキュレーションの中で培ってきて「情報フロー」という言葉とつながっていたことをあらためて認識することになった。そしてそのような認識の中から私は、これからの生涯を通して取り組むテーマとして「人間と非人間のためのエコゾフィーと平和」――人間だけでなく、動植物、鉱物や水や気象をはじめ世界に存在するさまざまなものや現象に加え、デジタル上の存在までを包含する「エコゾフィー」と平和――を設定した。アートから世界を見ること、世界を新たに発見すること、情報フローのただ中で、感受して動き続けること…………。アートとともに生きる日常が訪れ、そして分野を超えてその土壤にアートの的なものの見方や感受性が浸透していくことをめざして。」

（四方幸子『エコゾフィック・アート』～「第1章　道標　思想の源流を溯る／エコゾフィーのアート」より）

「「情報フロー」という考え方は、ヨーゼフ・ボイスが重視した「変容」、そしてフランスの精神分析家フェリックス・ガタリが晩年の一九八九年に著した『三つのエコロジー』で提起した「エコゾフィー」と関係がある。」

「「エコゾフィー」は、「エコロジー」と「フィロゾフィー」を合体させたガタリによる言葉で、自然のエコロジーに加えて、社会そして精神におけるエコロジーを意味している。生態系を意味する「エコロジー」は、それ自身が動的なシステムといえる。この言葉を社会と精神へと拡張した「エコゾフィー」という概念に出会ったとき、情報の循環という観点からさまざまな事象を見ることで、領域を横断してしまう世界観に強く共感したことを覚えている。ガタリはこの本の最後の部分で、これらが「ひとつの共通の美的－倫理的な領域に属するもの、いわばひとつにつながりあったものとして構想されねばならない」と述べている。そして続けて、「三つのエコロジーの作用領域は私が異種発生性と名付けたもの、すなわち再特異化の持続的過程に依存する。諸個人は他者に対して連帯的であると同時に、他者とますます異なった存在にならねばならない」と記している。特異性をもちながら連帯的、という個人のあり方は、デカルトの「コギト」に代表される近代における統一的主体としての自己を逸脱してしまっている。ガタリの言う「主観性」とは、自明の存在ではない。ガタリは同じ本の中で、「主観性のベクトルは必ずしも個人を経由するものではない」と述べているが、それは他者を含めた多数性、多様性の関係の中で立ち上がるものだと私は解釈している。このような思想と出会って以来、ガタリの「エコゾフィー」は、私の中で静かに息づいてきた。メディアアートに関わる中で、自然、社会、精神のエコロジーを更新させる情報技術による、また情報技術への批評的介入を通して、創造的な循環（情報のフロー）を開くことをミッションとしながら。」

（四方幸子『エコゾフィック・アート』～「第1章　道標　思想の源流を溯る／未来へと接続されるボイス」より）

「そもそも私が現在このような仕事をしているのは、一九八二年にヨーゼフ・ボイスの存在を知ったことによる。一九八二年にボイス関係の雑誌『Joseph Beuys Magazine』の編集を手伝い始め、オランダ人のライター、ラウリン・ウェイヤースとコンタクトをとり、彼女の記事を和訳している。一九八四年にボイスが個展（西武美術館）で来日した際は本人と実際に会い、一九八六年二月にはボイスのリサーチでドイツに渡った。出発前月にボイスは亡くなってしまったが、現地デュッセルドルフでアーティストのインゴ・ギュンターやナムジュン・パイクなど、彼のことをもっとよく知る多くの関係者と交流することができた。以来、私は「ボイスの現在形」を社会や科学技術との関係から問いながら、アートの可能性を探索してきた。

ヨーゼフ・ボイスは、二〇世紀を生きたアーティストであった。第二次世界大戦を経験したのち芸術を学び、二〇世紀後半に、社会、教育、政治、経済、環境などにおける諸問題を敏感に感知し、自らの歴史・文化的背景や身体性を抛り所に、社会との対話を精神的に試みた。

ボイスが提示した多岐にわたる作品やインスタレーション、アクション、社会・経済的活動は、既存の芸術概念や社会通念を越えるものであり、共感と拒否感両極の反応とともにしばしば（なかば確信犯的に）スキャンダルを巻き起こした。作品に加え、独自の出で立ちや言動でカリスマ的存在となったが、それは自己を対象化するユーモアと壮絶なパッションに裏づけられていた。彼の理念や言動は、ゲーテ、シラー、ノヴァーリスやシュタイナーを根幹に、神話や神秘学、生物学、宗教学などに根ざしているが、近代化による排除されてきた世界観も多く含まれている。ボイスは、人間以外の存在（動植物や自然全般）とのコミュニケーションを促し、同時に遊牧民やシャーマン、仏教などを念頭に、東洋とつながる「ユーラシア（ヨーロッパ+アジア）構想にまで至っていた。ボイスが現在、当時を知らない世代にも受容され始めているのは、彼が提起していた問題が、各人そして地球全体の生存に関わるほど身近で深刻なものとなったからではないだろうか。その活動を貫く重要な要素として、「流動性」――物質／非物質的な熱やエネルギー、波動などさまざまな情報のフローや関係性――と、それにより起きる変容が挙げられる。「生と死」「物質と精神」「熱と冷」「直観と理性」「カオスと結晶」「中心と周縁」「ユーラシア」…………。ボイスが扱うものは、二元論的対立ではなく、循環する情報フローのパラメータに応じた諸様態といえる。それはプロセスから形態が生まれるとするゲーテの自然科学の延長にあり、現在なら、複雑系科学やフェリックス・ガタリの「カオスモーズ」へと接続することもできるだろう。

対立的とみなされるものの相互循環は、ボイスをおのずと「芸術と社会」へと向かわせた。「社会彫刻」「拡張された芸術概念」「人は誰もが芸術家である」「芸術＝資本」などのメッセージを通して、芸術を広く社会に浸透させること、つまり各人が日々の生活や仕事のなかで創造力を発現させていくことをボイスは提唱していった。それは政治、経済、教育、環境などあらゆる領域が「芸術」を媒介につながる社会であり、芸術は、貨幣経済に代わる「資本」とみなされた。」

「ボイスは「人類学的芸術（Anthropological Art）」という言葉を使用していた。「人間が創造的になることで推進されうる社会彫刻」と言い換えると思われるが、と同時にボイスは人間を、動植物など人間以外のさまざまな存在とのコミュニケーションによって形成されるものとみなしており、そこに二一世紀に開花し始めた新たな芸術―――デジタル／アナログにかかわらず、非人間のろの協働によって生まれる、ひいては非人間のための―――の可能性を見ることができると。それは、近年活発に研究されているポスト人新世、ポストパンデミックの時代における脱人間主義的哲学や人類学につながるように思われる。」

「ボイスの没後、一九九〇年代に社会に登場したインターネットは、当初注目された贈与経済的モデルから、今世紀には人々の日常の言動を無意識的に支配するモデルへと移行していった。私たちは、使用する情報システムが企業や公共センターへの依存を強めることによって、実質デジタル監視的な状況に置かれている。A Iや先端医療技術における近年の進展が、社会の格差を増幅させられる一面もある。近年急速に普及しはじめた仮想通貨は、分散型の母ロックチェーンを背景にするものの、貨幣経済の延長と化している。いずれも、ボイスの唱えた「自由」「創造力」「経済」からほど遠い状況に見える。」

「「ユーラシア」を推進しようとしたボイスが一九八二年秋に面会を果たしたグライ・ラマ十四世は、ボイスの没後ウェイヤースが中心となる実現されたシンポジウム「アート・ミーツ・サイエンス・アンド・スピリチュアリティ・イン・ア・チェンジング・エコノミー（AmSSE）」において、こう述べている。「愛は進化のための基礎となるものです。そして愛は、私たちの未来のための根拠なのです」ボイスの遺作のひとつとなった《カプリ・バッテリー》。愛は、接続されたレモンと電球から、未来への光として放たれている。」

「一九九〇年九月にウェイヤースは、彼女が「精神彫刻（メンタル・スカulpture）と位置づけるシンポジズム「AmSSE」（アムステルダム市立美術館）を実現する。」

「ボイスの「社会彫刻」は、物質と非物質を超えてエネルギーが循環する流動的世界観に依っていた。ウェイヤースの「精神彫刻」は、人間に限らない多様な存在における精神の流動性を促すものである。そして私が一方で注目するガタリの「エコゾフィー」も、彼らの世界観と共振する。その上で私が志向するのは、デジタルを介して情報のフローを未来へ拡張することなのだ。人が誰でも創造的に生きることができ、それによって社会のさまざまな格差がほぐされていき、地球環境（おのずと地球外も含まれる）がサステナブルに循環していく世界―――。そのためには、先に引用したボイスの言葉（「創造力の最高の産物は、意志から発するのです。[中略]意志と感情と、そして、その上に建設された思考、この愛こそが現在一番重要なものだとは私は確信しています」）のように、何よりも「愛」が求められると思う。私たちが、生きてここにいることだけでも、広義の愛の賜物である。その素晴らしさを感じつつ、他者やさまざまな存在に愛というエネルギーを注いでいくこと。そこから私たちの新しい未来が始まる。」

（渡辺真也『ユーラシアを探して』～「第2章　ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイクの出会い」より）

「西洋と東洋の一つのものとして結びつけるべく、ボイスはルドルフ・シュタイナーの人智学を経由して、東洋における近代以前の哲学や宗教に接近した。西洋の資本主義圏における物質主義を批判しつつ、シュタイナーの「東西の金言」の影響下にあるボイスは、西洋の存在の哲学を克服し、さらにヨーロッパとアジアの分裂を克服しようと試みたのである。ボイスが頻繁に引用したドイツロマン派の詩人ノヴァーリスは、抽象作用を用いた結合についてこう書いた。

　　抽象概念以前はすべてが一つであったが、それは渾沌のようなものだった。抽象化の後、すべてが再び結合したが、この結合は、自律的で自己決定的な存在としての自由な結合であった。

　　ノヴァーリスが指摘したように、二つの異なるものを一つにまとめる唯一の方法は抽象化によってであり、プラトンのアイデアでも近代化でもない。この抽象化の考え方は、カール・グスタフ・ユングが精神分析の実験に用いた連想や、チャールズ・サンダース・パースのアブダクションに似ている。二つの異なる物をもつ物語に結び付けるというこの抽象化が、神話の誕生をもたらした。だからこそ、ヨーロッパやアジアを一つのユーラシアという統一体に結びつけようとするボイスは、あたかも神話をつくるかのように、アクションという形態を選んだのである。ここでボイスの答えは、西洋的思考の目的である死を扱うべく、動物の腹を割いて心臓を切り取るという、東洋のシャーマンの役割を果たすことであった。そうすることで、ボイスは西洋の思考と東洋の行為を結びつけようと試みたのである。」

＊シュタイナー「東西の金言」（Ose-West-Aphorismen/in das Goetheanum,I.Jahgang.Nr.45）

「東洋人は、宗教、芸術、科学の間の完全な統一において精神的体験をしていた。彼は自身の神聖なる霊的存在を犠牲にした。彼らから彼へと、彼を真の人間に昇格させたことの祝福が流れた。（…………）知識の波、精神の美しい光が西へと移動し、芸術に傾倒した人々を敬虔にした。」

（渡辺真也『ユーラシアを探して』～「第4章　出会いと別れ」より）

「彼らが初めて出会った時、パイクは若くして成功した芸術化であったが。ボイスは四〇代になってもまだ無名のアーティストであった。《ユーラシア》と呼ばれる彼らのコラボレーションにおいて、自信と敏捷性に満ちたパイクは、内向的であったボイスを多弁なパフォーマンス・アーティストへと変化させ、成功を収める役割を果たした、最終的に、一九八四年の最後の共同のパフォーマンスでは、パイクはスーパースターになったボイスのサポート役を務めることになった。しかし、ボイスが死去してから三〇年以上が経過し、パイクが死去してから一〇年以上が経過した今、パイク作品への再評価は続いており、現在では間違いなく二〇世紀最大のアーティストの一人と考えられるようになった。

決して妥協せず、意見も変えないというボイスの頑固な性格は、どちらかという柔軟で温和なパイクを理想的な協力者とした。彼らの関係は、お互いを包み込む形で一つになるような、陰（パイク＝東＝アジア）と陽（ボイス＝西＝ヨーロッパ）のような関係であった。初期ドイツロマン主義から影響を受けたボイスと、「ドイツ-モンゴル表現主義」【German-Mongolian-expressionism】を自称するパイクの出会いは火花を放ち、《ユーラシア》と呼ばれる「東と西の永遠の擁抱…………誰もが見ることのできる灯台のように現れなくてはならない」ものを生み出した。ヨーゼフ・ボイスの死から三年半後、ベルリンの壁は崩れ落ちた。それにもかかわらず、今日においれも克服すべき多くの壁が存在している。（…）新たな問題に直面している私たちは、自己の存在という概念の延長線上に成立する、敵対概念によって定義される国民国家のオルタナティブを見つける必要がある。私たちは全員同じ人間として平等であり、同じ世界に住む他の人々と連続することで存在することが可能になっていることが認識できれば、我々は国家の誕生に先立つ抽象へと戻ることができ、そこから新しい文明の形を作ることができるだろう。ボイスとパイクの生涯に渡るコラボレーション《ユーラシア》に関する世界で初めての詳細な分析となる本書が、誰もが見ることができると、私たちの明りるべき未来を照らし出す灯台となることを願う。」

（『美術手帳 1992年4月号／特集：ヨーゼフボイス カオスと創造』より）

（ヨーゼフ・ボイス）
「私の（拡張された芸術概念）は、自分自身を精神の中でひとつの彫刻作品にして、目に見えない本質を、具体的な姿へと育てることです。そして、私たちのものの見方、知覚の形式をさらに新しく発展・展開させていくのです。」

『群像』で連載の
伊藤潤一郎「投壘通信」の最終回
今回は「10.「あなた」とともに」

最終回はいつにもまして
激しいまでの「投壘通信」となっている

最後の言葉は
「ほかならぬあなたとともに、
地獄の外へと向かいたい」である

直接具体的に語られているわけではないが
伊藤氏は現在の世界を
「地獄のような世界」として描いている
伊藤氏は現在の状況に
「カタストロフ」を見ているのだろう

震災やコロナ禍や戦争において
政治やメディアをはじめ
アイヒマンのような「悪の凡庸さ」は
いまやあからさまなまでに日常化している

これまでもさまざまなカタストロフはあっただろうが
現代のカタストロフは
そしてとくにこの日本の現在の状況（見えない戦争）は
ほとんど戯画的なまでの洗脳状態をつくりだしている
嘘と欺瞞と開き直りと権力の行使の日常化に対して
それに無関心なのか無知なのか
NON！はいまだあまりにも小さい
AIの奴隷になることさえ厭わないでいる
AIは道具でありそれに命ぜられるものではない

そんな「地獄」が
常態化しているなかにいるにもかかわらず
その「地獄」をそれなりに受け入れて
生きていくことはできるだろうが

それに対して
「地獄のなかで地獄でないもの」を問い
「地獄に溶け込むのとは別の仕方
で地獄に苦しめられないようにする」ための
ひとつの答えが「投壘通信」なのだという

「カタストロフという悲劇のなかでは、
言葉とそれを受け取る「あなた」だけが
一縷の希望として残る」からだ

ばくもまた未知の「あなた」に向けて
「一縷の希望」として
こうして「投壘通信」を送りつづけている
ということでもあるのかもしれない



■伊藤潤一郎 連載「投壘通信 10.「あなた」とともに」（最終回）」
（「群像 2023年 08月号」講談社）

■伊藤潤一郎 連載「投壘通信 10.「あなた」とともに」（最終回）」（「群像 2023年 08 月号」講談社）

「あらゆる個々別々の戦争が、「戦争」という一語によって一括りにされてしまうように、そもそも言葉と具体的な出来事のあいだには、いかにしても埋めえない隔たりがある。それは、言葉と感覚のあいだの隔たりでもあるだろう（「赤」という言葉によっては、私の色彩体験は十全に言い表しえないように）。しかし、たとえ同じ言葉であったとしても、その言葉には発話者によって異なる「厚み」が存在しているのもたしかだ。「地震」という同じ言葉を口にするとしても、地震が頻繁に起こる土地に住むひとと地震のない土地に住むひととでは、言葉に置き換ええないものが言葉に「厚み」をもたらしている。言葉と物とのあいだにはけっしてゼロにはできない距離がありながら、なおも言葉は「厚み」というかたちで、その言葉を発するひとの感覚や感情を表すことができる。」

「震災以来、その後のコロナ禍もあいまって、カタストロフは断続的に論じられてきた。ジャン＝ピエール・デュピュイやジャン＝リュック・ナンシー、ミカエル・フッセルらのカタストロフ論が日本語に翻訳され、私自身も訳者として多少なりともその議論に関わってきたが、本連載のテーマである投壘通信もかたカタストロフに忠実であるならば、投壘通信とはカタストロフをくぐりぬけて届く言葉なのである。長田弘は、「書くというのは、二人称をつくりだす試み」であり、「目の前にいない人を、じぶんにとって無くてはならぬ存在に変えてゆくこと」だと述べているが、危機のなかで発される言葉は、書くという行為のなかでもとりわけ目の前にいない「あなた」をなくてはならない存在として切実に求め、その存在を信じるだろう。ツェランが語っていたように、カタストロフという悲劇のなかでは、言葉とそれを受け取る「あなた」だけが一縷の希望として残るのだ。

しかし、悲劇的狀況のなかで海へと投げ込まれる言葉には、さらなる悲劇が待ち受けている可能性があるのではないか。（…）

　　岸辺にやっと漂着した手紙も、それを拾い上げる者の一存によって葬り去られたり都合よく利用されたりしてしまう。たしかにこのような事態は悲劇的であり、悲劇のうえにさらなる悲劇が重ねられてしまっているように思える。（…）デリダのエクリチュール論を想起するまでもなく、言語から誤配や彷徨の可能性を完全に排することはできない（そうであるがゆえに、逆に歪みも誤りもないコミュニケーションが理想として想起されるのだろう）。言語とは、どこまでも悲劇的なものであり、そのような悲劇と表裏一体のかたちでしか希望は存在しえない。「危機のあるところ救いとなるものもまた育つ」というヘルダーリンの詩句を好んだのはハイデガーだが、横領や隠匿の危機にさらされていない言語はなく、そのような危機が影のようにはりついたところでのみ、「あなた」によって特異な厚みをもった言葉は救い出されうるのである。

　　とはいえ、（…）投壘通信のさらなる悲劇を考えることはできるだろう。それは、差出人の名の消滅という悲劇である。投壘通信の豊かさ―――危険と一体となった豊かさ―――の源泉が、拾い上げた手紙をほかならぬ私に宛てられたものとして受け取ってしまえるという錯覚やバグにある以上、壘に詰めて投げ込まれた手紙に名宛人が具体的に記されているかはさほど大きな問題ではない。しかし、反対に差出人の具体的な名がそこに書かれていなかったとしたら、その名が水に滲んで消え去っていたとしたらどうだろうか。（…）カタストロフをくぐり脱けた言葉に、もうひとつの悲劇、もうひとつのカタストロフがふりかかるとしたら、それは固有名の喪失をおいてほかにない。」

「たとえば石内都が広島平和記念資料館に保管されている遺品を撮影した有名な〈ひろしま〉シリーズのなかには、名札の縫いつけられた学生服や名前の書かれた靴下などを写した写真があるが、これらは名の痕跡のない他の作品と比べて、かつてそれを身につけていた者の姿をひときわ想起させる。交換可能な名こそが、交換不可能な個をより感じさせるのである。石内の写真が写し出す名を見ていると、「人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ」と述べ、個々の死が「名もなき人々」と集約されてしまうことに断固として反対した石原吉郎の姿が思いうかぶ。

（…）
　　ひとりひとり名をもっていたはずの兵士を「無名戦士」と一括りにしてしまうことに対する石原の反撥の裏には、交換不可能なひとり人間のを不特定多数の集団に吸い上げるとき、個々の名は容易に失われてしまうという痛切な認識が存在している。」

「あらゆる「として」から解放された「存在」を表しうるのは、そのひとの名だけなのだ。国民として死ぬ、兵士として死ぬ、親として死ぬといったような役割において死ぬのではなく、ほかならぬそのひと―――そのひとという存在―――が死んだということは、名によってしか表しえない。それゆえに、投壘通信には名が記されるのであり、名の消滅こそが最大の悲劇なのである。」

「この一〇〇年ほどの歴史をふりかえっても、単独者の名を破壊する出来事はいくたびも起きてきた。なかには人間の力ではどうにも防ぎようのない自然災害もあるが、原爆の投下やホロコーストや植民地支配など、単独者の名の抹殺の多くは人間が引き起こしたものである。私たちが生きる世界の岸辺には名を失った無数の投壘通信は打ち上げられ、名を特定されぬままに特異な声を響かせているが、そのような悲劇を生み出したのはほかならぬ人間自身なのだ。単独者を単独者として遇しえない地獄のような歴史と現在を前にして、私たちは「いかにしてともに生きる」ことができるのだろうか。（…）じつのところ、もはや「共生」などとくに権力者に都合のよい美名になりさがっているのかもしれない。嘘と欺瞞に満ちた言葉が飛び交い、無謬の「正しさ」にもとづく「論破」の快楽に人々が酔いしれ、剥き出しの敵対性しかないような世界で、「いかにしてともに生きるか」という問いには何の意味もないのかもしれない。」

「たとえ地獄のような世界だろうと、一度それを受け入れて慣れてしまえば、もはや地獄だとは感じられなくなる。二〇世紀の悲惨な出来事を前にして、哲学者や作家が論じてきたのは、まさに地獄へと溶け込んでいく人間の姿だった。アーレントがアイヒマンにみた「悪の凡庸さ」はいうまでもなく、ソ連からの亡命作家アレクサンドル・ジノヴィエフが西側によって見逃されているソ連社会の一面として語ったのも、地獄と一体化することで生き登る人々の姿だった。ジノヴィエフによれば、西側諸国はソ連には人権がないと盛んに批判したが、そんなものを必要とするのはソ連社会ではごく少数のひとだけであって、多くのひとにとっては低水準ではあれ安定した生活が保障されているということが人権よりもよっぽど重要なのだという。東西冷戦が終結して三〇年以上が経過した現在、他者の人権にこれほどまで無関心な状況がくりかえされるのを見るにつけ、この指摘の射程がいかに広いか感じざるをえない。

　　それでは、地獄のなかで地獄でないものとは何だろうか。地獄に溶け込むのとは別の仕方で地獄に苦しめられないようにするには、いったい何ためのスペースを残し、どのような術を身につけなければならないのだろうか。おそらく、投壘通信はそのひとつの答えとなるだろう。それも、固有名がしっかりと記された壘通信だ。私のもとに届いた手紙の差出人の名を尊重し、保持し、横断するとき、手紙は送り手の意図をはるかに超えて、思いもよらぬ意味を生み出すにちがいない。その特異な意味は、地獄の外へと通じる脱出口であるとともに、時間的にも空間的にもあらんかぎり遠く隔たった者のあいだにかそけき結びつきをなすだろう。あらゆる固定されたアイデンティティから遠く離れて、単独者と単独者が意味の余白と変容のみをやり取りする投壘通信の共同体こそ、地獄に抗してともに生きるあり方なのだ。誰でもよい、だがほかならぬあなたとともに、地獄の外へと向かいたい。」

「歌は世に連れ世は歌に連れ」と
流行歌は時代を映し出す鏡でもあるが

その源流は室町時代
高三隆達（たかさぶ・りゅうたつ）が
小歌に節付けして歌った隆達節に溯ることができる

隆達節にも含まれる小歌も収録されている
『閑吟集』が成立したのは永正十五年（一五一八年）

そして高三隆達の亡くなったのが慶長十二年（一六一一年）
（生まれたのは大永七年（一五二七年年）

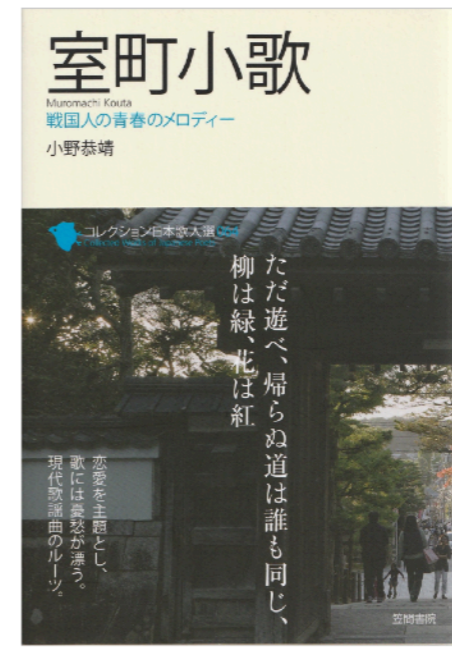
平安末期には
後白河法皇によってまとめられた
『梁塵秘抄』があり
その当時「今様」と名づけられた歌謡が
流行していたようだが

隆達節と名づけられているように
それまでは作曲者不詳の小歌だったものが
隆達という個人名がつけられた
個性的で特別な歌謡となったようだが
室町の戦国時代から江戸時代初期にかけて
いわば文化のルネサンス的な時代に
こうした個性がクローズアップされてきたようだ

現代にもつながっている
いわば庶民によって口ずさまれ
その心情や生活感や世界観などを反映した
流行歌謡の源を想像してみるうえで
こうした『閑吟集』や室町歌謡を
ふりかえってみるのは興味深い

有名な和歌集のように
『閑吟集』には
「真名序」（漢文で書かれている序文）と
「仮名序」（仮名で書かれている序文）があり

「詩は変化して歌謡となり、おおいに人々に歌われる。」



- 『閑吟集』（真鍋昌弘校注 岩波文庫 2023/1）
- 小野恭靖『室町小歌／戦国人の青春のメロディー』（コレクション日本歌人選064 笠間書院 2019/3）
- 谷川健一『うたと日本人』（講談社現代新書1513 2000/7）

「人は感嘆の声をを出しても
まだ十分に気持ちがおさまらないときは、
これを歌うことによって表現し、
歌ってもまだ足らなければ、
ただ夢中になって手を振り足を踏みとどろかすものである」
と記されているが

まさに「歌謡」であり
そこに「踊り」が加わってくる

「人情というものをもっている人間界において、
小歌が生まれたのは当然のこと」なのだという

現代はかつての時代よりも
経済的な効率の重視された
音楽プロモーションの要素が強く
「流行」もメディアやプロダクションによる
意図的なものであることが多いが
それでもそこで表現されている「歌」は
時代を映し出す鏡となっているのは変わらない

エジソンが音を録音・再生するシステムを
発明したのが一八七七年
一八八七年には円盤型の録音盤を利用した
グラモフォンが発明され
音楽が記録され複製される歴史が始まったが
その時代から約一五〇年

今後どんな音楽形態が生まれてくるかはわからないが
（AIに作らせるといっても行われはじめているが）

「思ひの種かや 人の情」
「何せうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂へ」と
恋に情に夢に
人が「詩」も「歌」も
失くしてしまうことはないだろう

- 『閑吟集』（真鍋昌弘校注　岩波文庫 2023/1）
 - 小野恭靖『室町小歌／戦国人の青春のメロディー』（コレクション日本歌人選064 笠間書院 2019/3）
 - 谷川健一『うたと日本人』（講談社現代新書1513 2000/7）
- （『閑吟集』～「真名序（二）」より）

「人は感嘆の声を出してもまだ十分に気持ちがおさまらないときは、これを歌うことによって表現し、歌ってもまだ足らなければ、ただ夢中になって手を振り足を踏みとどろかすものである。そもそも世の中がよく治まっている時に、安堵して音楽を楽しむことができるのは、政治が人々の心ととく調和しているからである。乱れた世の音楽が、恨みと怒りの雰囲気をもっているのは、政治が人々の心から離反しているからである。ゆえに政治や人々の善悪を正し、天地や鬼神までも感動せしむるものは、やはり詩より他にはない。詩とはその字からわかるように、志が言葉でもって表現されてゆく心の動きである。」

（『閑吟集』～「真名序（三）」より）

「詩は変化して歌謡となり、おおいに人々に歌われる。」

（『閑吟集』～「真名序（五）」より）

「小歌が生まれたのは、人間界に限ったことではない。吹く風の音、雨の降る音は、天地がもたらす小歌である。涼々と流れる水の音、散りゆく落ち葉の音など、自然の万物が歌う小歌である。そればかりではない。龍が吟ずる声、虎が嘯く超え、鶴や鳳の鳴き声、春の鶯、秋のきりぎりすの鳴き声がある。これら禽獣・昆虫の歌すべてが自然界の小歌なのである。だからましてや、人情というものをもっている人間界において、小歌が生まれたのは当然のことである。」

（『閑吟集』～「仮名序」より）

「ここに一人の世捨て人がいる。富士山を遠望できるこの地に草の庵を結び、かれこれ十余年の歳月を過ごした。軒端に松吹く風の音を聞き、それに和して琴を掻き鳴らし、また一節切（ひとよぎり）の尺八を携えて四季折々に合う曲を吹きながら、小歌の一節を心の慰みとして、はやくも過ぎていってしまった年月を振り返ると、都や田舎での、春は花見の宴、秋は月見の宴に連なり、ともに歌った老人や若人がいたけれども、いまではそうした人々も半ば故人になってしまったその昔が恋しくて、「柳の糸の乱れ心」と歌う小歌をまずはじめに置いて、あるいは早歌、あるいは僧侶が廊下で吟ずる漢詩句、また田楽節、猿楽の近江節・大和節に至るまでの数々を、記念の歌謡集ともなればと考えて、思い出すがままに閑居の座右に記しておくのである。これらを歌いながら毎日を過ごしてゆくと、生活の上でも邪悪な心がおこるといこともないので、ここに詩経・三百十一編に倣って数を同じくして、閑吟集と題を付けた。以上のような趣旨を少しく草紙の端に書いたのである。余命にまかせ、折も折、かすかな秋の蛩と語らいながら、月明かりのもとで、以上のように書き記しておくのである。」

（『閑吟集』より）

「1・花の錦の下紐は　解けてなかなかよしや　柳の糸の乱れ心　いつ忘れうぞ　寝乱れ髪の面影」
「1 2・それを誰が問へばなう　よしなの問はず語りや」
「2 5・散らであれかし桜花　散れかし口と花心」
「3 6・さて何とせうぞ　一目見し面影が　身を離れぬ」
「4 9・世間はちろりに過る　ちろりちろり」
「5 3・夢幻や　南無三宝」
「5 5・何せうぞ　くすんで　一期は夢よ　ただ狂へ」
「8 1・思ひの種かや　人の情」

（『閑吟集』～真鍋昌弘「解説『閑吟集』の世界」より）

「『閑吟集』は永正十五年（一五一八）八月に成立した中世小歌選集である。仮名序に言うとおり、中国の『詩経』に倣って、所収歌数を三一一と限定したところから、編者の耳目にふれた小歌であっても、おそらく組み込まれないまま消え去ったものも少なからずあったであろうと想像される。したがって、永正十五年以前の、小歌系歌謡を網羅して残そうとした集成ではなく、結果としては編者の文芸的趣向によって纏められた小歌の選集であると見ておくのがよからう。」

「具体的な編者像について、それを明確にすることは困難である。」

「室町時代は小歌の時代であった。小歌の流行を伝える資料は少ない。

（小野恭靖『室町小歌／戦国人の青春のメロディー』～小野恭靖「『隆達節――戦国人の青春のメロディー』」より）

「和泉国の高三隆達（たかさぶ・りゅうたつ）が節付けして歌った隆達節は、戦国時代から江戸時代初期までの一世を風靡した流行歌謡であった。戦国の世を生きた人々の人生とともにあった大切な心のメロディーだったとすることができる。隆達節は歌詞を室町小歌から継承している例が多いが、その淵源をさかのぼれば、永正十五年（一五一八）の『閑吟集』にたどり着く。隆達節にはその『閑吟集』所収歌とまったく同じ歌詞の歌や、一部分が異なるだけのほぼ同一歌詞の歌が多数確認できる。隆達節は実に一世紀近くも前の集成となる。つまり、室町小歌の歌詞は一世紀にもわたって人々の心を捉え続けたと言えるであろう。また、隆達節とほの同時代の成立と考えられる室町小歌集に『宗安小歌集』『美楊君歌集』があり、隆達節はこれらの歌集に収録された小歌とも歌詞の上で密接な関連を持っている。」

「室町小歌の歌詞が扱うテーマは恋愛が圧倒的多数を占めている。隆達節の歌詞も同様の傾向を持っている。今日明らかになっている隆達節の歌詞は全部で五二〇首余りを数えるが、そのうち恋歌は実に七割以上を占めている。しかし、この傾向は流行歌謡としては当然のことであろう。流行歌謡に恋歌が多いのはいつの時代にあっても同じで、現代においても何ら変わりがない。」

「隆達節の歌詞に見られる恋愛以外のテーマで、特徴的なものは無常観と人生観、さらには人間観である。」

「隆達節の歌詞のうちの一部には安土桃山時代から江戸時代初期の近世的新感覚による語がみられる・「異なもの」「わざくれ」「あたた」などがそれに当たる。また、心の中のつぶやきをそのまま歌詞にしたような独白調の歌や、相手に向かって訴えかける科白調の歌も散見する。これらは『閑吟集』以来の室町好哉の歌詞の特徴を継承したものである。」

「隆達節の最大の特徴はそれまでの作曲者不詳の小歌と異なり、隆達という節回しの達人が確立した個性的で特別な歌謡であったことが挙げられる。つまり、隆達節は歌詞については前時代からのものを踏襲しつつ、曲節上は後代の歌謡を切り開く先進性を持っていたと考えられるのである。もっとも隆達節の一部には歌詞の上からも際立った独創性と高い抒情性が認められる歌もある。実に、隆達節は日本歌謡史上に屹立する存在と言ってよいのである。」

（小野恭靖『室町小歌／戦国人の青春のメロディー』より）

「07　色々の草の名は多けれど　何ぞ忘れ草はの」
「10 思ひ出すとは忘るるか、思ひ出さずや、忘れねば」
「12 つれなかれかし、なかなか、つれなかれかし」
「13 あれ何ともなの、うき世やの」
「16 あたうき世にあればこそ、人に恨みも、人の恨みも」
「18 逢ひみての後の別れを思へばの、辛き心も情かの」
「19 雨の降る夜の独り寝は、いづれ雨とも涙とも」
「20 いかにせん、いかにせんとぞ言はれける、もの思ふ時の独り言には」
「25 生まるるも育ちも知らぬ人の子を、いとほざいのは何の因果ぞの」
「30 君が代は千代に八千代に、さざれ石の巖となりて苔のむすまで」
「40 ただ遊べ、帰らぬ道は誰も同じ、柳は緑、花は紅」

（谷川健一『うたと日本人』～「序」より）

「柳田は歌は唱和するものであり、口によって詠み、耳で味わうのが本来であると考えていた。したがって、振りがな（ルビ）を見なければ分からない俳句や歌を嫌悪した。」

「柳田国男は和歌を国民の「おもやひ（共有財産）」と見なしたが、長谷川如是閑の「国民的教養」という言葉もそれと重なり合っている。」

「柳田が芭蕉の恋の句にただならぬ共感を示したのは、芭蕉がものあわれを上流社会の独占物にしなかったことが大きいと思う。私はこの小著において「うたと日本人」の関係を、庶民の世界から離れることなく考察してみたいと考えている。いきおい、平安期以降の閉鎖的な宮廷社会の歌人たちの世界の外側に流れる歌（謡）の伝統を重視することにした。俳諧や俳句もまた最も大きく、最も深い意味では歌であり。歌の変種であるという立場をとった。日本人の心の深奥からほとばしる叫びが韻律の形をとった点では、和歌、連歌、俳諧のいずれも変わりはなく、またその血脈をたどれば一つの源泉にたどりつく歴史を有しているからである。」

NHK〈ラジオ深夜便〉に
『絶望名言』というコーナーがある

名言の選定は文学紹介者の頭木弘樹
司会はアナウンサーの川野一宇

なぜ「希望名言」ではなく「絶望名言」なのか

頭木弘樹は大学生の時に難病を発症
十三年間に及ぶ療養生活を送り
その経験から当時救いとなった言葉を
「絶望名言」と名付け
『絶望名人カフカの人生論』として刊行している

「名言」の多くは
ひとを励ますようなものだと思われがちだが
必ずしもそうした名言が魂に響くとは限らない

「みんなのミシマガジン」に
仲野徹「こんな座右の銘は好かん！」という連載があるが
名言も座右の銘もそれがフィットするときと
むしろ逆に働いてしまうことがある

言葉はその言葉の表面的な意味どおりに
働いてくれるとはかぎらず
むしろその表面の裏の影の部分が
働いてしまうことも多いのだ

絶望しているときに
「明るい気持ちでいれば、幸せなことしか起きない」
と言われても
悲しいときに明るい歌が響かないのと同じで
決して救いにはならない

「絶望名言」の効果は同種療法（ホメオパシー）と同じで
「絶望」には「絶望」をあてることで
その働きを「絶望」とは逆方向に作用させることができる

「辛い時には、絶望的な言葉のほうが心にしみて、
逆に救いになる時があるんじゃないか」ということで
そんな言葉のことを「絶望名言」と呼び
文豪の言葉から選んでラジオで紹介したものを
書籍化したのが本書である

■頭木弘樹・NHK〈ラジオ深夜便〉制作班・根田知世己・川野一宇
『NHKラジオ深夜便 絶望名言』（飛鳥新社 2018/12）

とりあげられている「文豪」は
カフカ・ドストエフスキー・ゲーテ
太宰治・芥川龍之介・シェークスピア
中島敦・ベートーベン・向田邦子
川端康成・ゴッホ・宮沢賢治の12人

引用では各回の最初に紹介されている名言を
ピックアップしてご紹介しているが
なかなかの「絶望」の名言である

絶望といっても
それは人の数だけの絶望の仕方があって
同じ処方箋というわけにはいかないだろうが

多くのひとの心をふるわせて
癒やしてくれる悲しい曲があるように
「絶望名言」にもそれなりに
「絶望」への救いとして効果的に働いてくれそうだ

ひとの感情はとても複雑で
絶望感のある感情を変容させるのはむずかしい
ネガティブなときはとくにそうだ
その場所は迷路のように出口がない

最近よく話題になる
ネガティブ・ケイパビリティという
答えのない事態に耐える能力があるが
おそらく「絶望名言」は
「絶望」への「共感」という負の力を
引き出してくれるのだろう
負には負を掛けることで正へと向かうように



■頭木弘樹・NHK〈ラジオ深夜便〉制作班・根田知世己・川野一宇『NHKラジオ深夜便 絶望名言』（飛鳥新社 2018/12）

（「第1回放送 絶望名言 カフカ」より）

「ぼくは人生に必要な能力を、なにひとつ備えておらず、ただ人間的な弱みしか持っていない。（八つ折判ノート）無能、あらゆる点で、しかも完璧に、（日記）」

「川野／病気、事故、災害、あるいは失恋、挫折。受け入れがたい現実に直面した時に、人は絶望します。古今東西の文学作品の中から、絶望に寄り添う言葉をご紹介します、生きるヒントを探す、シリーズ『絶望名言』。川野一宇です。解説、そして名言の剪定は、文学紹介者の頭木弘樹さんです。どうぞよろしく願いいたします。」

「川野／頭木さんは、大学生の時に難病を発症し、十三年間に及ぶ療養生活を送りました。その経験から、悩み、苦しんだ時期に救いとなった言葉を「絶望名言」と名付けて、名言集『絶望名人カフカの人生論』を出版されました。先日放送された「ラジオ深夜便」の『ないとエッセー 絶望したらカフカを読もう』でも、その名言をご紹介します。あらためてうかがいますが、この「絶望名言」とは、どういうものなんでしょう？

頭木／「名言」というと、普通は人を励まして、前に進ませてくれるようなものが名言だと思うんです。そういう名言ももちろん必要ですし、なくてはならぬものだと思うえす。たとえば「あきらめずにいれば夢はかなう」とか、「明るい気持ちでいれば、幸せなことしか起きない」とか。素晴らしい言葉ですよね。ただ時には、そういうすばらしい言葉は、ちょっとまぶしすぎることもあります。たとえば、どう頑張っても夢がかなわなかった時に、「あきらめずにいれば夢はかなう」という言葉はやっぱりちょっと辛いですし、辛いことが起きた時に、「明るい気持ちでいれば、幸せなことしか起きない」と言われても、それはもうちょっと自分には遠い言葉ですよね。たとえば、失恋した時には、やっぱり失恋ソングのほうが気持ちにびつたり来ると思うんです。悲しい時には、悲しい曲を聞きたくなるということはありますよね。それと同じで、辛い時には、絶望的な言葉のほうが心にしみて、逆に救いになる時があるんじゃないかなと思うんです。そういう言葉のことを「絶望名言」というふうに呼ばせていただきます。

川野／なるほど。「絶望」と「名言」というのが、最初のうちはちょっと、「え？ピタツとつながらないかな？」というふうに思わないでもないんですけれども。でもネガティブな言葉が、かえって絶望に効くということなんですかね。

頭木／そうですね。薬みたいに効くわけではないですけれども、そういうネガティブな言葉というのは、普通、かえって暗い気持ちになると思われやすいんですが、必ずしもそうではなくて、辛い時には逆にそういう言葉のほうが、自分と一緒にいれてくれて、気持ちをよくわかつてくれて、それが救いになることも多いと思うんです。

川野／（…）番組の冒頭でご紹介したカフカの言葉は、頭木さんに一番好きな絶望名言として選んでいただきました。

（…）

頭木／ぼくは大学三年の二十歳の時いん、突然難病になってしまいまして、その時点では、医師から「もう一生就職も進学もできず、親にずつと面倒を見てもらうしかない」というふうに言われたんですね。ベッドに寝ているだけの存在になってしまって、もうまさに、人間的な弱みしか持っていない状態になって、完璧に無能な状態になってしまったんです。そういう時に読んだ、この言葉というのは、やっぱりすごく感動したんです。」

（「第2回放送 絶望名言 ドストエフスキー」より）

「まったく人間というやつはなんという厄介な苦悩を背負い込んでいかなければならないもんなんだろう！（創作ノート）人生には悩みごとや苦しみごとは山ほどあるけれど、その報いというものはなはだすくない。（作家の日記）絶え間のない悲しみ、ただもう悲しみの連続。（書簡集）」

（「第3回放送 絶望名言 ゲーテ」より）

「絶望することができない者は、生きるに値しない。（詩 格言風に）快適な暮らしの中で想像力を失った人達は、無限の苦悩というものを認めようとはしない。でも、ある、あるんだ！どんな慰めも恥ずべきものでしかなく、絶望が義務であるような場合が。（親和力）」

（「第4回放送 絶望名言 太宰治」より）

「駄目な男というものは、幸福を受取るに当たってさえ、下手くそを極めるものである。（貧の意地）弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福に傷つけられる事もあるんです。（人間失格）」

（「第5回放送絶望明言 芥川龍之介」より）

「どうせ生きているからには、苦しいのは、あたり前だと思え。（仙人）」

（「第6回放送 絶望名言 シェークスピア」より）

「あとで一週間嘆くことになるとわかっていて、誰が一分間の快楽を求めるだろうか？これから先の人生の喜びのすべてと引き換えに、今ほしい物を手に入れる人がいるだろうか？甘い葡萄一粒のために、葡萄の木を切り倒してしまう人がいるだろうか？（ルークリース）」

（「第7回放送 絶望名言 中島敦」より）

「己は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって、切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。己の珠にあらざることを俱（おそ）れるが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず、ますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になつた。この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。（山月記『中島敦全集』筑摩書房）

（「第8回放送 絶望名言 ベートーヴェン」より）

「私は何度も神を呪つた。神は自らが創り出したものを、偶然のなすがままにして、かえりみないのだ。そのために、最も美しい花でさえ、滅びてしまうことがある。（友人の牧師カール・アメンダへの手紙 一八〇一年七月1日）」

（「第9回放送 絶望名言 向田邦子」より）

「じいちゃんは悲しかったのだ。生き残った人間は、生きなくてはならない。生きるためには、食べなくてはならない。そのことが浅ましく口惜しかったのだ。（『冬の運動会』大和書房）」

（「第10回放送絶望明言 川端康成」より）

「言葉が痛切な実感となるのは、痛切な体験のなかでだ。（『虹いくたび』新潮文庫）

（「第11回放送 絶望名言 ゴッホ」より）

「春なのだ、しかし何と沢山な、沢山な人々が悲しげに、歩いている事か。（「テオへの手紙」『ファン・ゴッホの手紙』二見史郎・編訳 園府寺司・訳 みすず書房）

（「第12回放送 絶望名言 宮沢賢治」より）

「わたしのやうなものは、これから沢山できます。私よりもつともつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑つたりして行くのですから。（「グスコープドリの伝記」『宮沢賢治全集8』ちくま書房）

（「あとがき」より）

「一人の体験、一人の苦しみは、一人だけのものでしょうか？文豪たちの絶望名言がそうであるように、一人の苦しみを突きつめると普遍性を持つものです。この番組はそのプロセスの実践です。それは文豪とコラボして、自分の絶望にあわせてカスタマイズした新たな絶望名言をつくつていく試みでもあります。その一方で、すべての絶望が言葉にできるわけではなく。「言葉で表現できない絶望」もあることも伝えていきます。言葉を超える絶望が確かにある。その事実に謙虚でありたいと思っています。

もちろん言葉にしたところで目の前の現実が変わるわけでもなく、即座に解決策が見つかるわけでもありません。でも言葉にすると、ほんの少しですが絶望と距離が生じます。そしてその間にかすかい風がそよぐ、ちよつとやわらぐ、それが「絶望名言」だと思っています。依然として絶望の中にあっても、この番組を聴いて、あと一回くらい息を吸ってもいいかなと思っていただけたら幸いです。」

◎頭木弘樹(かしらぎ・ひろき)

文学紹介者。筑波大学卒業。編訳書に『絶望名人カフカの人生論』（飛鳥新社/新潮文庫）、『絶望名人カフカ×希望名人ゲーテ 文豪の名言対決』（飛鳥新社/草思社文庫）、著書に『カフカはなぜ自殺しなかつたのか?』（春秋社）、『絶望読書』（飛鳥新社/河出文庫）。選者を務めたアンソロジーに『絶望図書館 立ち直れそうもない時、心に寄り添ってくれる12の物語』（ちくま文庫）がある。

嘘をつく
というとき
それはふつう意図的な嘘のことだが

事実だと思って言ったことが
嘘となっていることもあり
逆に嘘をついたつもりが
それが事実だったということもある

嘘になる基準は
それが正しいか間違っているか
ということだとしても

正しいとされていることは
往々にして変わったりもするため
うそとまことを
絶対化してとらえることはむずかしい

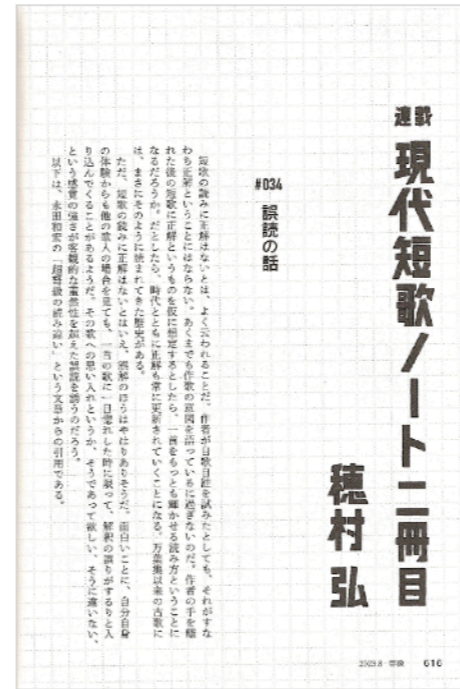
文学作品内の仮構的世界のように
うそとまことが視点によって
変転したりもする世界とは異なるものの

事実は小説よりも奇なりで
可能なのは現時点でのじぶんの視点から
事実かそうでないかを判断するしかないことが多分にある

多くのばあいわたしたちにとって重要なのは
その嘘による影響であって
嘘によって著しくネガティブな影響が及ぶとき
その嘘および嘘をついた者に対して
どのような態度をとるかが鍵となる

意図的についた嘘は
それがバレなければいいという考えもあるだろうが
バレたときにそれにたいして
嘘をついた本人がどのような態度をとるか
あるいはじぶんのなかの嘘をどう扱うか

また意図的ではないとしても
結果的に間違っていたとき
その間違いに対して
本人がどのような態度をとるかということは
人間観察としても興味深いところがある



- 石井ゆかり「星占いの思考④うそかまことか」
- 穂村弘「現代短歌ノート二冊目 #034 誤読の話」（「群像 2023年 08 月号」講談社）

嘘や間違いにたいして
開き直ったり
それがなかったかのような態度をとるか
そうではなく
嘘を認め謝罪しその責任をとるか
間違いを認めて謙虚に訂正するか
そこで魂は岐路に立たされることになる

穂村弘の紹介している短歌の「誤読」の話は興味深い
村木道彦の短歌の読み違いに対して
本田和宏はその読み違いを認めたくえで
あえてその読み違いを変えないでいたという

間違いを隠すことなくそれを見据えたうえで
間違いそのものがなぜ起こったのかを明らかにし
さらに理解を深めていく態度は示唆的である

政治の世界ではそうしたことはほとんど行われぬし
研究者のあいだでもあえて行うひとはまれだろうが
そうする意志を持ちえたとき
魂は大きな飛躍を遂げるのではないか

さて石井ゆかりの連載「星占いの思考」だが
この7月は
「魚座の土星と乙女座の火星が180度を組む」という

また乙女座—魚座は対極にあり
ポラリティ（極性）を形成しているが
乙女座は具体と現実つまり事実の星座であるとともに
治療の星座でもあり
魚座は夢と現実つまり（原義的な）嘘の星座であるとともに
救済の星座でもある

「真実と現実、時に重なり合わない」が
その対極のなかで「治療」と「救済」が
どのように起こるのだろうか

うそとまことのさまざまな現れのなかで
どのようなことが起こり得るのか
注意深く見ておきたいと思っている

- 石井ゆかり「星占いの思考④うそかまことか」
- 穂村弘「現代短歌ノート二冊目 #034 誤読の話」（「群像 2023年 08 月号」 講談社）

（石井ゆかり「星占いの思考④うそかまことか」より）

「（佐々木孝浩「虚像としての編集————「大島本源氏物語」をめぐるって」／納富信留・明星聖子編『フェイク・スペクトラム 文学における〈嘘〉の諸相』勉誠出版）
”さらに嘘うべきは、誤りが訂正された後も、真実と向き合おうとした研究者は僅かで、殆どが無反応であったばかりではなく、誤った認識の延命を図る者まで現れたことである。認識を改めるだけでなく自分の業績を自ら否定しなければならぬ辛い事は想像に難くない。しかし真実から目を背けて正しい研究を行うことは不可能である。源氏物語研究の現況を見ていると、文学研究も科学であると主張する気にはとてもなれないのである。„

来年の大河ドラマで扱われるという「源氏物語」は世界最古の小説とも言われる。誰知らぬ者とてない歴史的名作である。この作品の現状最も信頼されるテキストが「大島本」であり、小学館『新編 日本古典文学全集』収録のものや岩波文庫版もこれに依拠しているという。しかし、国文学者池田亀鑑が示したその信頼性の前提となるべき事実が、実は誤認だけである（！）というのが、引用元の主張である。「はじめに」に記されたこの一文の、語気のはげしさに驚かされた。独語考え込んだのは、本のタイトルにある「嘘」のことである。一般に「嘘」の特徴として「（1）事実でないことを言う。（2）発話者自身が事実ではないと思っていることをいう。（3）聞き手を騙す意図がある」（西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』中公新書）があげられる。本書によれば、3条件のうち「これは嘘かどうか」を判断する上で一番軽視されるのは（1）だという。「嘘」を辞書で引けば、「事実でないことを言う」が第一の定義として出てくる。人に「嘘とは何か？」と聞いても、そう返される。しかし私たちが現実「これは嘘だ」と認識する上では、「その話が事実かどうか」はけっこうどうでもいらしのだ。たとえば「自分は胃がんだと信じている人が、周りを心配させないように胃潰瘍だと嘘をつく。でも、その人は本当に胃潰瘍だった」（同書）という例だが、この人の語ったことは「嘘」なのだ。冒頭の引用元では、池田亀鑑がなぜ源氏物語の「大島本」を権威づけるに至ったか、その動機について「今更の訂正ができない状況に追い込まれているのではないだろうか」との想像が示されている。気づいていたのであれば、「嘘」になる。しかし、人間は自分で自分を騙すことができる生物である。」

「この7月、魚座の土星と乙女座の火星が180度を組む。火星は闘いの星であり、土星は制限、宿命、規律の星、厳格な学究の星でもある。土星と火星の組み合わせは、厳格さや裁定、断罪といったテーマを指し示す。乙女座——魚座は対岸の星座で、ポラリティ（極性）という意味の繋がりをもっている。乙女座は治療、魚座は救済の星座であり、またある意味において、魚座は夢と現実、乙女座は具体と現実の星座で、つまり魚座は（原義的な）嘘、乙女座は事実の星座と言えなくもない。ただ、真実と現実は、時に重なり合わない。まど・みちおは「うそつきはまあ正直者だ」（「もう すんだとすれば」）とうたった。両者は、靴下の裏表なのだ。人間はだれでもミスをする。そのミスが他者を傷つける場合もあればそうでない場合もあるが、ほかならぬミスした当人は、間違いなく深く傷つくのだ。この容赦ない傷の痛みに、人間はどのように立ち向かうのだろうか。土星は固く冷たい石や骨、火星は刃物や鉄を象徴する。この時期の「治療・救済」はある意味、外科的に実現するものなのかもしれない。」

（穂村弘「現代短歌ノート二冊目 #034 誤読の話」より）

「短歌の読みに正解はないとは、よく云われることだ。作者が自歌自註を試みたとしても、それがすなわち正解ということにはならない。あくまでも作歌の意図を語っているに過ぎないのだ。作者の手を離れた後の短歌に正解というものを仮に想定するとしたら、一首をもっとも輝かせる読み方ということになるだろうか。だとしたら、時代とともに正解も常に更新されていくことになる。万葉集以来の古歌には、まさにそのように読まれてきた歴史がある。

ただ、短歌の読みに正解はないとはいえ、誤読のほうはやはりありそうだ。面白いことに、自分自身の体験からも他の歌人の場合を見ても、一首の歌に一目惚れした時に限って、解釈の誤りがすると入り込んでくることがあるようだ。その歌への思い入れというか、そうであって欲しい、そうに違いない、という感覚の強さが客観的な蓋然性を超えた誤読を誘うのだろう。

以下は、本田和宏の「超弩級の読み違い」という文章からの引用である。

するだろう　ぼくをすてたるものがたりマシュマロくちにほおぼりながら
————村木道彦『天啓』

私はこの一連をパンフレット誌「ジュルナール律」第三号、「緋の椅子」十首で読んでいる。もう五十年近く前になるのだろうか。その時、作者村木がどこかの時点で「ぼく」を捨て、それをいま、誰かにその顛末を話してあげようかと言っている歌ととったのである。十首全体から感じられるアンニュイな雰囲気が、自分をとっくの昔に捨ててしまった青年が別にどうでもいいやという風に友達に話をしている、そんな場面を想像させたのである。それ以来、ずっとそう思ってきた。ところが吉川さん曰く、これは恋人が作者を捨てたのではないのでしょうか。えーっと、まさに大げさでなく、声をあげてしまったのだった。まさにその通り、それ以外ないじゃないか。作者を捨てた恋人は、そのうちきっと誰かに作者を捨てた顛末を平気で（マシュマロを頬張りながら）、話すのだろう。そうなのだと思う。なんでまたよりによってヘンにむずかしい解釈をしてしまったのだろう。村木道彦が恋人に振られるなんていう場面が、ちょっと思い浮かばなかったのかもしれない。これは確かに吉川解が正解なのだろうと思う。『新版 作歌のヒント』はいま三冊刷りだが、それでは次の増刷りのときに、ここを訂正するか。どうすべきか。結局、直さないことにしようと思う。こんな風な限りなく〈正解〉の近い解釈があるがと、注解を加えてもいいが、私の解釈も残しておきたい気がするのだ。（「超弩級の読み違い」「塔」二〇一五年九月号）」

「人間がいなくなった後の自然」もまた環境問題である

ほんとうの意味での「手つかずの自然」は地球上にはほとんど残っていないが人間が見捨て放棄した土地は残っている

その土地はいったいその後どうなっていくのだろうか

著者は二年間をかけて戦争の緩衝地帯かつての産業の衰退地放射能汚染地域災害跡地経済崩壊に見舞われた地域などを旅する

そしてそれら荒廃した土地の自然が自発的に「再野生化」することで新しい環境として遷移し地球上のほかのどのエリアとも異なった豊かな場所となっていることを見出していくがその範囲は膨大なものとなりさらに拡大しつつあるという

放棄された場所には驚くべき生命力がありとくに生物多様性の観点からすれば人為的に保護され管理された場所よりも豊かであるばあいがありむしろ人為的な介入は害となることさえある

著者はそれをこんな比喻で表現している

「荒れた土地で馬を走らせるときには手綱を伸ばして、馬に自由を与えるのと似ている」

こうした観点での自然環境の保護にはさまざまなむずかしい問題が含まれているだろうが「大規模で計画的な自然保護プロジェクトだけでなく、あなたの家の近くにある放棄され損壊した駐車場も有効である」という



ニュージャージー州バターソンを歩く都市探検家ウィーラー・アンタパネス



キプロスの廃墟となった家屋



ニューヨーク州アーサー・キルにある船の墓場



スコットランド、ウエスト・ロージアンにある廃棄物の山

■カル・フリン（木高恵子訳）
『人間がいなくなった後の自然』（草思社 2023/5）



重要なのは小さな場所からでも生物多様性をできるだけ豊かなものにするために過剰な人為的介入を避けるということなのだと思う

現在はその逆に災害防止やクリーンな環境の推進等によりむしろ生物多様性を激しくスポイルしてしまう傾向にある

現代は特に先進国では出生率の低下と都市部への人口流出から過疎地の空き家も増え続けさまざまな地域が放棄されようとしている

「人間がいなくなった後の自然」を生物多様性に満ちた場所としていくためになにができるかを考えるのは喫緊の課題でもあるだろう

■カル・フリン（木高恵子訳）『人間がいなくなった後の自然』（草思社 2023/5）

（「はじめに スコットランド、フォース諸島」より）

「本書で、私たちは地球上で最も無気味な場所、最も荒涼とした場所へ旅をする。レーザーワイヤーで囲まれ、四〇年間放置された旅客機が、滑走路で錆びついている無人地帯、ヒ素で汚染され、どんな木も育たない森の中の空き地。くすぶる原子炉の廃墟の周りに急造された立ち入り禁止区域、砂浜が砂ではなく、かつてそこの海で泳いでいた魚たちの骨でできている、後退し縮んでいく海のさびれた海岸。

これらの異質な場所をつなぐ共通点は、打ち捨てられた廃墟であるということだ。戦争のせいなのか、あるいは災害、病気、経済の衰退のせいなのか、それぞれの場所は何年間もあるいは何十年間も放置されたままである。時が経つにつれて、自然の力が自由に働くようになり、絶えず変化する環境を理解する上での貴重な手掛かりとなっている。

もし本書が自然をテーマにしている本であるとしても、手つかずの自然の魅力を熱狂的に語るものではない。本書はある意味での必要性に迫られて書かれた。世界には、真に「手つかずの自然」が残っていると主張できる場所はほとんどない。最近の研究によれば、南極大陸の氷床や深海の堆積物からもマイクロプラスチックや有害な人工化学物質が発見されている。アマゾン川の流域の空撮で、森林におおわれた土壘が発見された。それは、はるか昔に滅びた文明の最後の遺跡である。人為的な気候変動は、地球上のあらゆる生態系、あらゆる景観を変容させるおそれがある。そして耐久性のある人工物は、消えることのない私たちの署名を地質記録に刻んだ。

（…）

廃墟が増えている理由の一つは、人口動態の変化である。先進国では出生率が低下し、農村部の人口が都市部へ流出している。世界の国の約半分で、出生率が人口置換水準（人口が増加も減少もしない均衡した状態）を下回るようになってきた。人口が、二〇四九年までに一億二五〇〇万人から一億人以下に減少すると予測されている日本では、土地（建物）の八件に一件はすでに廃墟となっており、二〇三三年には全住宅の三分の一近くが廃墟になると予測されている（日本人はこれを「空き家」と呼んでいる）。

もう一つの理由としては、農業形態の変化である。集約農業は……環境上多くの難点にもかかわらず……少ない土地で多くの生産ができるため、効率的である。膨大な量の「限局的」農地は、特にヨーロッパ、アジア、北米では野生の状態に戻すことが許されている。（…）

私たちは広範で自発的な再野生化の真っ只中にいるのだ。なぜなら、放棄するということは、非常に純粋な意味において、再野生化することであり、人間が退くと、自然は、かつては自分たちのものだったものを取り戻すからである。それは、人が見ていない間に壮大なスケールで行われてきたし、現在も行われている。これは胸躍る将来の展望だと私は思う。最近の研究成果を発表した著者たちは次のように書いている。「世界中で回復しつつある生態系は、膨大で範囲も拡大しつつあり、六番目の大量絶滅を緩和するのに役立つ前例のない機会を提供している」

「次の章からは、世界の各地から一二の地区の物語をお届けする。各地区は、それぞれが放棄に至る異なった経緯と自然の再生を体現している。これらの地区はそれぞれがまったく異なる気候、文化、歴史を持っており、独自の哀愁と希望を感じさせる。これらの地区が語るのは、すべての場所は、どんなに荒廃していようとも、それなりに回復していくもので、そしてまた、人為的な影響がいかに長く尾を引くかということでもある。それらの場所が使われなくなってから数ね、数十年、あるいは数世紀もの間、人為的な影響は影を落とすことがあり得る。」

「第一部では、人間の不在はいかに自然を回復させるかを象徴する四つの場所について考えたい。」

「広範に放棄された場所の住民で、とりわけ目立つのはデトロイトの街に住む人々である。彼らは自分たちの苦境を美化するようになった。社会的文脈のない、両面映えする写真をパワーヤリズム (voyeurism) として、あるいは「廃墟ポルノ」として発表しているのだ。第二部では、このような人間的な側面に焦点を当てる。」

「第三部では、私たちが死んでいなくなった後も長く消えずに残る私たちの遺産のある場所を訪れた。これらの場所は「私たちが去れば、自然は戻ってくる」というような単純な話ではないことを明確に語っている。私たちは地球のDNAに私たち自身を書き込んだ。地球に人類の歴史を刻み込んだのだ。すべての環境は、過去のバリンプセスト（重ね書き羊皮紙）を内包している。すべての森林は、それ自体の「生態学的記憶」を列記した葉や微生物で作られた回顧録である。もし望むなら、その読み解き方を学ぶことができる。私たちを取り巻く世界がどのようにして現在の状況に至ったかを読み解くのだ。」

「第四部では、打ち捨てられた二つの場所について研究したい。これらの場所は私の目には、そしておそらくあなたの目にも、時を超えて未来の姿を垣間見せているように映る。その未来では、気候変動や人類のその他の遺産によってまったく異質な世界が作り上げられているのだ。」

「私は二年間かけて、最悪のことが起きてしまった場所を旅した。戦争、原子炉のメルトダウン(炉心熔融)、自然災害、砂漠化、毒化、放射能汚染、経済崩壊に見舞われた風景である。世界の最悪の場所ばかりを次々に並べる本書は暗黒の書というべきかもしれない。しかし実のところ、本書は救済の書なのである。地球上で最も汚染された場所……石油流出で窒息し、爆弾で吹き飛ばされ、放射性降下物で汚染され、天然資源が枯渇した……このような場所がどのようにして、生態学的プロセスを通じて再生できるのだろうか。最も人為的攪乱が多い土地に発生する人里植物はどのようにして足がかりを見つけ、コンクリートやがれき、砂丘にさえも定着するのだろうか。コケが黄金色の草になり、ポピーやルピナスの鮮やかな色の花になり、低木になり、樹木になるとき、生態遷移の色彩はどのように変化するのか。ある場所が見違えるほど変わってしまい、すべての望みが絶たれたように見えるとき、どのようにして別の種類の生命の可能性を育むのだろうか。」

（「第一部:人間のいない間に」～「第一章 荒地:スコットランド、ウエスト・ロージアンファイブ・シスターズ」より）

「荒地のような見た目の悪い場所が私たちに教えてくれることは、自然環境に対する新しい、より洗練された見方である。絵のように美しい景色かどうかでも、手入れが行き届いているかどうかでもなく、生態学的な力強さに注目することである。そうすることで、世界はまったく違って見えてくる。一見すると「醜い」あるいは「価値のない」場所でも、実は生態学的に重要な場所であることがわかるようになる。その醜さ、無価値さが打ち捨てられたままになった理由かもしれないが、その醜さや無価値こそが、再開発や過度な「管理」、すなわち破壊からこれらの場所を救ったのだ。」

（「第一部:人間のいない間に」～「第二章 無人地帯:キプロスの緩衝地帯」より）

「キプロスで見られるような膠着状態や、地雷原のような戦時中の残存物がある場合、嚴重な保護区と大して違わない状態になる。そこは野生動物の保護や天然資源の搾取を停止するための立ち入り禁止区域となるのだ。このような成果はもちろん、極めて不幸な状況の中での福祉作用としての小さな幸せに過ぎない。しかし、このことは私たちに貴重な教訓を与えてくれた。

（「第一部:人間のいない間に」～「第三章 旧農地:エストニア、ハリュ」より）

「耕作地放棄地の変身物語は、生態学の核心となる概念の典型例である。「遷移」―――裸地がやがていつかは、森に姿を変える過程―――は、生態学の本分野では中心的な存在となっている。一般生物学で、進化が学問の中心的存在であるのと同じである。」

（「第一部:人間のいない間に」～「第四章 核の冬:ウクライナ、チョルノーベリ」より）

「チョルノーベリは放射能に汚染された荒地か、それとも安全な楽園か？ 答えは両方だ。原発事故直後は、電離放射線が急増した。しかし、放出された放射性元素の多くは非常に不安定だった。時には数秒で自己崩壊した。中には数週間かかったものもあった。核分裂の生成物のうち、健康への影響という点で最もおそれられているのは、体内に容易に吸収されるヨウ素一三一である。（…）しかしヨウ素一三一の半減期はわずか八日である。つまり、放射能は最初の一か月で元のレベルの一六分の一にまで減衰し、同じ割合で減り続ける。一九九〇年代半ばには、この地域の総放射線量は、原発事故直後の一〇〇分の一以下になった。現在では、この地域のほとんどで、放射線は航空機内宇宙線、あるいは医療診断のスキャンを受ける際に経験するのと同じレベルにまで低下している。現在、最も懸念されているのは、セシウム一三七とストロンチウム九〇という放射性核種である。」

「野生動物がいっせいにこの地に戻ってきたことに議論の余地はないようだ。」

「突然変異は、がんもそうだが、自然に起こる。問題は、それがどのくらいの頻度で起こるかだ。」

（「第二部:残る者たち」～「第五章 荒廃都市:アメリカ合衆国、ミシガン州デトロイト」より）

「都市という状況の中で廃墟の問題を考えるのは有益だと思う。正しく照準を合わせるために、何をもって廃墟とするのかを考える必要がある。たとえその周りに人々がいたとしても、あるいはそこに人が住んでいたとしても、廃墟である場合がある。デトロイト市は、行政上の理由から、独自の定義を設けなければならなかった。廃墟として分類されるには、空き家であることと同時に、「外見上の荒廃の兆候」があると表現されることが必要である。」

（「第二部:残る者たち」～「第六章 無秩序の時代:アメリカ合衆国、ニュージャージー州、パターソン」より）

「都市環境において、放棄された空間に入ることは、地図から飛び出すことに最も近い。公園や庭園で暗黙のうちに求められる秩序や人の偏在がなく、匿名性があり、緑豊かな空間がある。都市の廃墟は、暗い森に入り込んだり、険しい山頂に登ったりするのと同じような効果を心にもたらすかもしれない。そして私たちは同じような理由でその野性的な要素を求めるのかもしれない。崩れかけた工場、黒々とそびえ立つ煙突、産業界の巨人たちの骨格の残骸の中で、私は胸の奥に火が灯り、魂が揺さぶられるのを感じた。崇高なものの影が頭上を通り過ぎていく。」

（「第三部:長い影」～「第七章 不自然な淘汰:アメリカ合衆国、スタテンアイランド、アーサー・キル」より）

「人類の産業は世界を変えてきたし、今も変え続けている。もしも、明日、全人類が地球上から姿を消したとしたら、工場は沈黙し、発電機は震えながら停止し、貨物船は漂流し、衝突し、海底に沈み、土砂を舞い上げるだろう。それでも、私たちは、地球上の生息するほとんどすべての種の遺伝子構成に作用し続ける進化の力を発動させたのだ。彼らは予測できない方法で、そして間違いなくコントロールできない方法で、変身し、変態し、変化し、適応していく。彼らはできることなら生き延びたいと思っているのだ。」

（「第四部:エンドゲーム」～「第一二章 大洪水と砂漠:アメリカ合衆国、カリフォルニア州、ソルトン湖」より）

「廃墟には驚くべき生命力がある。素人目には放棄されて朽ち果てたように見える場所にも意外な活力がある。また、生物多様性の面では、入念に手入れされた保護区を凌駕するものもある。介入は、その前に行われた出血と瀉血のように、益よりも害をもたらすことがある。私たちは自制心を身につけなければならない。そして、地球が制約なく自由に行動できるようにする最善の時期を見極めなければならない。荒れた土地で馬を走らせるときには手綱を伸ばして、馬に自由を与えるのと似ている。

偉大な生物学者E・O・ウィルソンは、将来の災害に対する防波堤として、地球の表面の半分を自然に明け渡すことを提案している。そうすれば、そこは生物多様性の貯蔵庫になるだろう。これは、島の生物地理学の理論から導き出されたものである。この理論では、面積が大きければ大きいほど、その土地に生息する生物種の種類は多くなる。彼はまた、「島」を隠喩的な意味で捉えている。彼の画期的な発見は、現代の再野生化運動によって大きな刺激となった。現代では「景観規模」で目標を設定している。

しかし、本書に登場する廃墟の島々は、次のことを思い出させてくれる。野生を取り戻すためには、大規模で計画的な自然保護プロジェクトだけでなく、あなたの家の近くにある放棄され損壊した駐車場も有効である。その駐車場は、世界中に広がる群島にある小さな島だと考えて欲しい。種が失われた土地に再びコロニーを作るための足がかりである。」

「地球上で起きたすべての大規模な絶滅現象は、進化的な創造性の爆発によって引き継がれてきた。これまで取るに足らなかった種が、隕石や気候変動や超巨大火山によって絶滅した種の役割を担うようになり、急速な多様化が進む。世界の種の半分が絶滅しても、その代わりに新しい生物が育つだろう。しかし、それには一〇〇万年以上かかるかもしれない。私たちは、個人としては、それを見ることはできない。おそらく、種としても、見られないかもしれない。」

●目次

はじめに：スコットランド、フォース諸島

第一部:人間のいない間に

第一章 荒地:スコットランド、ウエスト・ロージアンファイブ・シスターズ

第二章 無人地帯:キプロスの緩衝地帯

第三章 旧農地:エストニア、ハリュ

第四章 核の冬:ウクライナ、チョルノーベリ

第二部:残る者たち

第五章 荒廃都市:アメリカ合衆国、ミシガン州デトロイト

第六章 無秩序の時代:アメリカ合衆国、ニュージャージー州、パターソン

第三部:長い影

第七章 不自然な淘汰:アメリカ合衆国、スタテンアイランド、アーサー・キル

第八章 禁断の森:フランス、ヴェルダン、ゾーン・ルージュ

第九章 外来種(エイリアン)の侵略:タンザニア、アマニ

第一〇章 ローズコテージへの旅:スコットランド、スウォナ島

第四部:エンドゲーム

第十一章 啓示:モンセラトの首都 プリマス

第一二章 大洪水と砂漠:アメリカ合衆国、カリフォルニア州、ソルトン湖

◎カル・フリン(Cal Flyn)

作家・ジャーナリスト。サンデー・タイムズ紙とデイリー・テレグラフ紙の記者であるほか、ザ・ウィーク誌の寄稿編集者でもある。オックスフォードのレディ・マーガレット・ホールで実験心理学の修士号を取得。著書にオーストラリアの植民地問題を扱った「Thicker Than Water」がある。

◎木高 恵子(きだか・けいこ)

淡路島生まれ、淡路島在住のフリーの翻訳家。短大卒業後、子ども英語講師として小学館ホームパルその他で勤務。その後、エステサロンや不動産会社などさまざまな職種を経て翻訳家を目指し、働きながら翻訳学校、インタースクール大阪校に通学し、英日翻訳コースを修了。訳書に『ピーパー: 世界を救う可愛いすぎる生物』(草思社)がある。

本書『死と後世』では
「私の死」の後においても
「後世」があるということが
「私」にとっても重要である
ということが論じられている

その際の「私の死」というのは
生物学的な死＝死後の生は存在しない
ということが前提とされており
「後世」というのは
そうした「私の死」の後
私とは直接は関係していない世界
及びその世界で生きている人々を意味している

シェフラーの基本的な観点は
人間の生は
その「生」を現在可能にしている「世界」と
そこに生きる人々の存在の存続を信頼し確信することに
ふつう想像されるよりも強く依存している
ということであり
しかもそこでは「私の死」ということが不可欠である

シェフラーは
じぶんの死から30日後地球に巨大小惑星が衝突する
人間が不妊化し人々が次第に死に絶えていく
という2つの人類の消滅のシナリオが
わたしたちの思考や感情にどのような変化をもたらすか
という思考実験を行う

個人主義及び利己主義の観点からは
「後世」は
じぶんとは関係がないとされそうなのだが
そうではなく
じぶんの死への恐れとは別に
人類の終焉や
これから生まれてくる人間がいないということは
ひとを不安にさせるという

さらにいえば
限られた時間性のなかで生きられた生ゆえにこそ
つまりは死すべく生まれてきているからこそ
「後世」がその支えになる

シェフラーの言葉でいえば
私は「私が死に、他の人々が生きること」を
必要としている

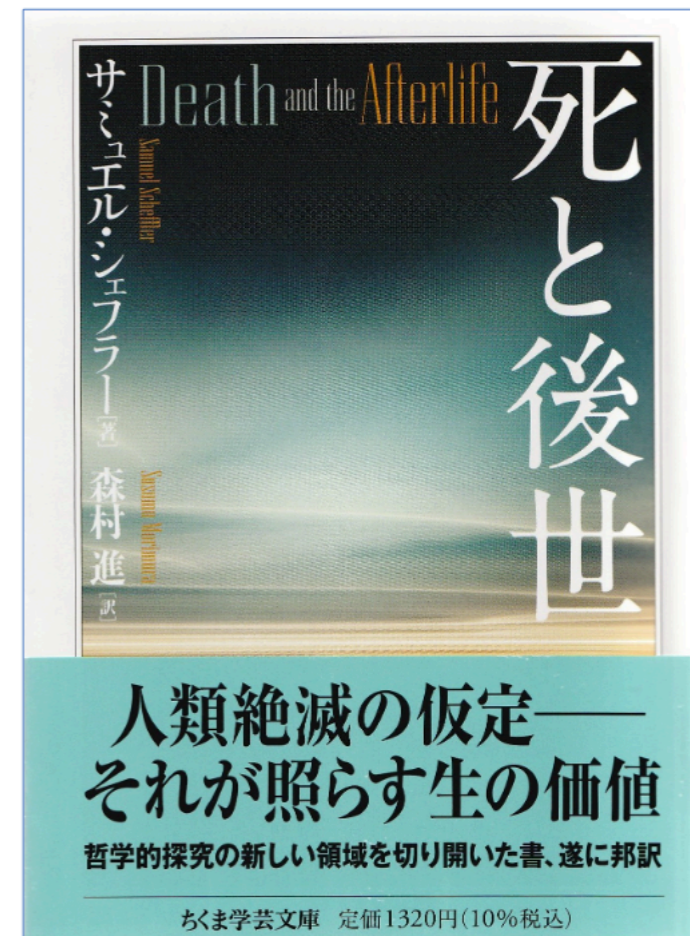
わたしたち人間は
個人主義的利己的に生きているとしても
深いところでは「人類」という集合的な生をも
生きているともいえるかもしれない

表面意識ではどちらかが顕在化することが多いだろうが
わたしたちは個の魂と集合的な魂のふたつの顔を
ともにもちながら生きている
本書はそのことを意識化する契機にもなる

「後世」のことではなく
世界のほろびる日を生きるということだが
本書を読みながら石原吉郎の
こんな詩を思い出した

世界がほろびる日に
かぜをひくな
ビールスに気をつける
ベランダに
ふとんを干しておけ
ガスの元栓を忘れるな
電気釜は
八時に仕掛けておけ

「後世」がなくても「生」の現在はある
そして「生」はどこかで「私」を超えている



■サミュエル・シェフラー（森村進訳）『死と後世』
（ちくま学芸文庫 筑摩書房 2023/6）

■サミュエル・シェフラー（森村進訳）『死と後世』（ちくま学芸文庫　筑摩書房 2023/6）

（「序論（ニコ・コロドニ）」より）

「シェフラーの題名の「after life 後世」とは、多くの宗教的・神秘的伝統が指定してきた個人的な「life after death 死後の生」ではなく、（…）われわれの死後の人々の生存という、「集合的後世」のことです。シェフラーはこう問います。そのような集合的後世があるだろうというわれわれの想定は、われわれの生の中でいかなる役割を果たしているだろうか？　」

「シェフラーの講義はわれわれが一連の思考実験を行って、それらに対するわれわれの反応と折り合いをつけるように誘います。「ドゥームズデイ・シナリオ」においては、あなたの死の三十日後に誰もが死んでしまいます。P・D・ジェイズムの小説『人類の子供達』（二〇〇六年にアルフォンソ・キュアロンによって同じ題名で映画化された【日本公開時の題名は『トゥモロー・ワールド』】がシェフラーに示唆した「不妊のシナリオ」においては、子どもが生まれなくなります。シェフラーもそう考えているように、これらのシナリオが人を不安にさせるということを見て取るのは難しくありません。しかしそれはなぜでしょうか？　ドゥームズデイ・シナリオにおいて、あならが若死にするわけではありません。また不妊のシナリオにおいては、誰もがそうでない場合と同じだけ長生きするのである————それほど十分ではないかもしれませんが、ここで人を不安にするのは、人類の終焉それ自体であり【われわれにとって】見知らぬ人々が生まれてこないということ です。」

「後世に関する推測は「不死の推測 immortality conjecture」とでも呼べるものと対にされるかもしれませんが。その推測は〈もしわれわれが、自分たちも自分たちの知っている誰も不死でないということを知ったら、われわれの生は同じように荒涼たるものになるだろう〉というものです。しかしここでは思考実験は必要ではありません。われわれは現実がこの実験を行っていて、その結果ははっきりと否定的です。われわれもわれわれが知っている誰も不死でないということを知っていても、われわれは多かれ少なかれ自分の目的追求に自信を持ち、それに投資しています。このことは驚くべき対照を生み出します。あるケースでは集合的後世————われわれが知らない、それどころかまだ生まれてもいない人々の生存————は、われわれ自身あるいは今生きている他の人々の継続よりわれわれにとって重要だ、ということになるからです。シェフラーの表現では「われわれが知っておらず愛してもいない人々が存在するようになることは、われわれ自身の生存とわれわれが実際に知っていて愛する人々の生存よりも、われわれにとって重要である」。

「もし後世に関する推測が正しいとしたら、それは人間の個人主義と利己主義に関する通常の想定を、微妙だが広範囲にわたる仕方で複雑化させる、とシェフラーは言います。それは〈われわれが評価しているものの多くは、たとえ明瞭に社会的ではなくても、集団に関する暗黙の前提条件に依存している〉ということを明らかにすることで、われわれの個人主義の限界を示唆します。それはまた、〈われわれは他の人々に起きることについて感情が動かされる————たとえその人々がどれだけわれわれから遠く離れているとしても〉ということを明らかにすることで、われわれの利己主義の限界も示唆します。（…）シェフラーの論点は〈後世に関する推測は、われわれは他の人々に起きることに、われわれが信じているかもしれないよりも感情的に依存しているということを明らかにする〉ということです。（…）われわれは自分自身の生が価値を持ちうるために、他の人々が生きること必要としているのです。」

「ある意味では、われわれは生きるためには死め必要があります。われわれの生が意味を持つためには、それどころかそもそも生であるためには、生は終わりを持たなければなりません。しかしそれにもかかわらず、われわれが死を恐れるのは不合理ではないのです。

（…）

それは部分的には、われわれが生涯というものを、多かれ少なかれ一定の長さを持つ一定数の段階————幼年、青年、老年————を通じた進行としてとらえているからです。また部分的には、多くの価値は病気とか危害とか危険といった不利益からの保護あるいは解放の諸形態であるそれらを含んでいるが、それらの不利益自体は死が見込まれる、ということに依存しているからです。そしてまた部分的には、またおそらく最も重要なこととして、比較し優位をつける判断を伴う評価活動は、希少性、特に時間的希少性という背景がなければ意味をもたないからです。」

「シェフラーが引き出す諸結論の中で最も驚かされるものは、「後世」に関する諸発見————他の人々の生存に対するわれわれの態度に関するもの————が「恐怖と死と信頼」に関する諸発見————われわれ自身の生存に対するわれわれの態度に関するもの————に対比されたとき最終的に生ずるものです。他の人々は私の死後も生きるだろう、人類は生き続けるだろう、という気体は私が自分の行動の多くを評価するために不可欠だが、私は生き続けないだろう、私の生は続かないだろう、という認識もまた同じように私が自分の行動の多くを評価するために不可欠である、というのです。シェフラーの表現によると、私が必要としているのは「私が死に、他の人々が生きること」です。最も抽象的な言い方をすれば、価値ある生に関するわれわれのとらえ方は一見すると両立できない要求を行っています。それは終結と持続の両方を必要としています。それは時間的限界を持つ一方で、継続的企てにどうにかして参与する必要があります。この逆説的な結びつきと価値自体をわれわれにとって可能にするもの、それはわれわれが可死的であると同時に社会的でもあるという事実です。私自身の死は私の生涯を意味有る弧（アーク）に曲げますが、その弧はそれが引き継ぐ集合的な歴史を背景として描かれるのです。」

（シェフラー「第1講　後世（第1部）」より）

「正直を言うと、「後世 after life 【「死後の生」という意味もあり】」というこの題名は少々ひっかけである。私は今日の多くの人々と同じように————しかし他の人々とは違うが————通常理解されるような死後の生の存在を信じていない。つまり私は個人が生物学的な死の後も意識を持つ存在として生き続けるとは信じていない。その反対に、生物学的な死が個人の生の最終的で不可逆な終わりだと信じている。だから私がこの講義の中で行わないことの一つは、通常理解されるような死後の生の存在を擁護して論ずることだ。しかし同時に、私は他の人々が私自身の死後も行き続けるだろうということを当然視している。私は地球上の人類の生がいつでもいくつかの別々のルートをたどって突然破局的な終末に至るかもしれないということを確かに知っている。だがそれでも私は、自分の死後も長い間人類が生き続けるということを通常当然視している。そしてこのやや非標準的な意味で、私は後世があるだろうということを当然視しているのである————つまり、私が死んだ後も他の人々は生き続けているだろうということを。われわれの大部分がこのことを当然視していると私は信じているし、この講義の目的の一つは、われわれの生活の中でこの想定が果たす役割を探求することにある。

　私が主張したいのは、私の非標準的な意味における「後世」の存在がわれわれにとって大変重要だということである。それはそれ自体としてわれわれにとって重要だし、〈後世の存在は、われわれが気にかけている多くの他のものがわれわれにとって重要であることをやめないための必要条件である〉という理由からも重要だ。あるいは、それが重要だということを私は示したい。もし私のこの主張が正しいとしたら、それは自分自身の死に対するわれわれの態度が持ついくつかの驚くべき特徴を明らかにする。それに加えて私が論じたいのは、〈われわれにとっての後世の重要性は、もっと一般的に、あるものが重要であるとか、われわれにとって大切であるとか、われわれがそれを評価するといったことの中に何が一般的に含まれているかの解明に役立つ〉ということだ。最後に、後世の役割は、自分自身についてのわれわれの思考の中で時間というものがある、深遠だとはいえ捉えがたい影響に光を投げかけ、われわれの生の時間的な次元と折り合いをつけるためにわれわれが用いる様々な戦略を探求する便利な出発点になる。」

「あなたに一つ粗野で病的な思考実験をしてもらうようお願いすることから始めよう。あなた自身は通常の長さの寿命を持つことになるが、あなたの死の三十日後、地球は巨大小惑星との衝突によって完全に消滅する、ということあなたが知っている想定する。この知識はあなたの残された生涯の中であなたの態度にどのような影響を与えるだろうか？」

（シェフラー「第2講　後世（第2部）」より）

「私がこの第2講義で取り上げたい最初のトピックは、重要なことWhat mattersが私の言う「後世」に厳密にいかなる仕方で依存しているかである。われわれにそのような後世があるという確信がなかったら————自分自身の死んだ後も他の人々が行き続けるだろうという確信がなかったら————われわれにとって重要である物事の多くが重要でなくなるか重要性が小さくなるだろう、ということはずでに見た。このことが元来のドゥームズデイ・シナリオから明らかだったが、不妊のシナリオが、〈われわれにとっての後世の重要性は、自分が愛する人々の生存への配慮だけから来るのではない〉ということを明らかにした。しかし重要なことが後世のどのように依存しているかについては、三つの異なるテーゼを区別することができる。第一のテーゼは、私がこれまで擁護してきたものだが、〈われわれにとって重要なことは、後世の存在へのわれわれの確信に暗黙のうちに依存している〉というものである。これは態度的依存テーゼと呼ぶことができよう。（…）

　しかしながらこの態度的依存自体の含意は、〈これらの物事がわれわれにとって重要でなくなるのは、部分的には、われわれは後世を確信しなければそれらが無条件にsimpliciter重要性あるいは価値がより小さいと考えるだろうからである〉ということだ。そしてこれはわれわれが第二の依存テーゼを受け入れているということを示唆する。そのテーゼは〈無条件に重要であるということは、後世の現実の存在に依存しているのであって、それについての確信だけに依存しているのではない〉というものである。（…）

　さらに、われわれがあるものを評価するということが、それは無条件に価値があるというわれわれの信念に部分的に存しているとしたら、そして〈あるものが無条件に価値があるということは、後世の現実の存在に依存している〉ということを暗黙のうちに受け入れているとしたら、そのときわれわれはまた別のテーゼを受け入れているという結論が出てくると思われる。そのテーゼは〈われわれがあるものを評価すること、あるいはそれがわれわれにとって重要であるということは、重要な点において、後世の現実の存在にも依存するのであって、われわれがその存在を信じているということだけに依存するのではない〉というものである。」

（シェフラー「第3講　恐怖と死と信頼」より）

「もし私が論じてきたことが正しいとしたら、われわれの価値へのわれわれの確信は死と人類の生存の両方に依存するということが出てくる。この両者のうち、死は避けられないもので、それにもかかわらずわれわれの多くはそれを恐れるが、人類の生存は必然的なものではないが、われわれの大部分はそれに対する脅威を不十分にしか恐れていない。」

「たとえ死がわれわれの確信を脅かさないとしても、われわれが死を恐れることは不合理ではない。しかしもしわれわれが、われわれの確信が依存している人類の生存への一層深刻なる脅威を十分に恐れず、それを克服しようとしなかったら、それは不合理かもしれない。これはそれ自体として重要な結論であり、また死と確信との関係に関する重要なことをわれわれに教える。この二つの態度が常に衝突すると考えるのは自然なことだ。しかし人類の生存の場合におけるように、われわれの確信の源泉自体が脅威にさらされているとき、恐怖への傾向はそのような脅威に対応するようにわれわれを動機づけることによって、確信を掘り崩すのではなく支えるだろう。死の恐怖にあっては事情が異なる。その場合、すでに述べたように、われわれはわれわれの確信が依存している当のものを恐れるのであって、片方の態度が別の態度を支えるというのは言いすぎだ。だがそれにもかかわらず真であるのは、〈われわれの恐怖の強さは、死が終わらせるあらゆる物事の価値へのわれわれの確信の深さの証拠である〉ということである。」

<div> <div></div> <div>【目次】</div> <div>日本語版への序文（サミュエル・シェフラー）</div> <div>謝辞</div> <div>本書の寄稿者</div> </div>
序論（ニコ・コロドニ）
死と後世
第1講　後世（第1部）
第2講　後世（第2部）
第3講　恐怖と死と信頼
コメント
ドゥームズデイの意義（スーザン・ウルフ）
後世はどのように重要なのか（ハリー・G・フランクファート）
評価されるものを保全するのか、評価することを保全するのか？（シーナ・ヴァレンタイン・シフリン）
私が死に、他の人々が生きること（ニコ・コロドニ）
コメントへのリプライ
死と価値と後世 ―― 回答（サミュエル・シェフラー）
訳者あとがき
人名索引

最古の実用写真術である
ダゲレオタイプ（銀板写真）とともに
新井卓は
福島の渚へ
遠野の田園へ
核実験場の砂漠へと
旅に出る

そして
「対象に出会ったときの感覚を、
時間と空間を超え見るものに生々しく伝えることのできる
＜小さなモニュメント＞として」表現する

世界初の写真技術であるダゲレオタイプは
一八三九年に誕生し
それまで肖像画によってしか表現できなかったものが
またたくまに欧州と北ヨーロッパに広がっていく

ダゲレオタイプは
ただ一枚の銀板として複製不可能な写真だが
その後複製技術可能な写真術が開発される

写真とはphoto（光）+graphia（画）であり
「光によって描かれた像」という意味であり
日本でもかつては「光画」と呼ばれたが
やがて「真実を写す」という「写真」へと置き換えられる

それは「真実」と信じられているものを媒介する
メディアとして位置づけられたからなのだろう

そこには複製のできない真実という意味もあったのだろうが
いまや複製可能であるどころか
CG合成さえできるようになり
「アウラ」はほとんど失われてしまっているように見える

新井卓のこだわりは
その複製のできない一枚限りの
真実を写す「写真」であろうとするところにあるのだろう

そしてそれを
たしかな記憶を保存するための
「モニュメント」としようとする

さて哲学者の永井玲衣は「群像」で連載されている
「世界の適切な保存⑩適切な保存」において
「保存は、不断の抵抗」のだと言っている

その不断の「抵抗の運動」は全体的に
「環境とふれあい、たくさんのもを受け取」ってゆくが
「保存」されたものも
それを「保存をしようとしたひとびと」も
年をとって変化していく

記憶を記したモニュメント
それが「写真」であることもあれば
書きのこした言葉であることもあるだろう

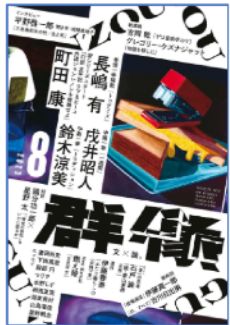
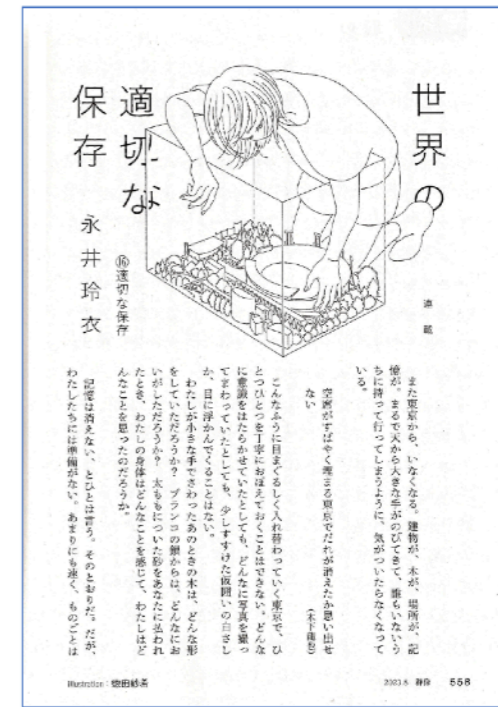
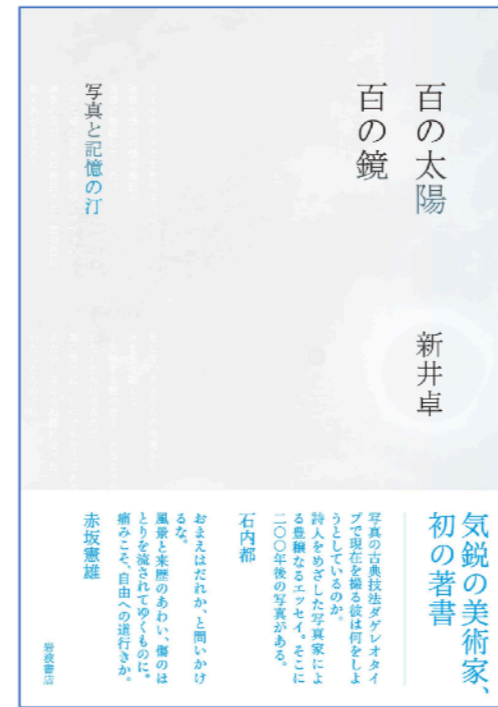
それらは変化を余儀なくされながら
「保存」しようとする者の「記憶」を伝えていこうとする

それらの多くは
やがて失われてしまうことになるだろうし
伝えることができたとしても
さまざまな変化にさらされてゆくが
ときになにがしかの
「真実」を写す「鏡」となり得ることもある

現代は「アウラ」のある「真実」が
見えなくなり続けている時代だといえるかもしれない
いまやひとの思考を反映しているはずの文章さえも
AIが複製可能なものとして作り上げていこうとする時代だ

そんななかで
ひとがひとであろうとするならば
「アウラ」を写す「鏡」を
みずからの内にたしかにもつための
「不断の抵抗」を怠ってはならないだろう

ひとと世界も「適切」に
その根拠としての「記憶」を
からだところから「保存」するためにも



- 新井卓『百の太陽/百の鏡 写真と記憶の汀』（岩波書店 2023/7）
- 永井玲衣「世界の適切な保存⑩適切な保存」（「群像 2023年 08 月号」講談社）

- 新井卓『百の太陽/百の鏡　写真と記憶の汀』（岩波書店 2023/7）
- 永井玲衣「世界の適切な保存⑩適切な保存」（「群像 2023年 08 月号」講談社）

（新井卓『百の太陽/百の鏡　写真と記憶の汀』～「鏡越しに出会うこと／銀板写真・モノと記憶・極小の記念物」より）

「写真―――長いあいだ、これほど混乱を生んできた言葉は、あまりない。十九世紀初頭、西洋で発明された写真術の本来の名称「フォトグラフィー」は、photo（光）とgraphia（画）というギリシア語から合成された、「光によって描かれた像」という意味だった。日本でもかつては「光画」と呼ばれた写真は、いつ、なぜ「真実を写す」という意味の話「写真」へと置き換えられたのか。

　　ここにち写真とは、添えられたキャプションによってイメージの意味内容―――一般に「真実」と信じられているもの―――を媒介するメディアムを意味する。複製可能なイメージは新聞や雑誌、テレビ、インターネットを通じて拡散され、出来事を告発し、証拠づけ、人々を動機づける手段となった。

　　一八三九年、フランスで世界初の実用的写真実、ダグレオタイプが公表された。産業革命後に生まれた有産市民層を中心に安価なポートレート作製技術が求められ、この時期に光学と化学の知見が出揃っていたことも、写真術誕生の条件だった。

　　公表からわずか一年、技術の改良によりダグレオタイプの露光時間が数秒に短縮されると、欧州及び北アメリカの主要都市にダグレオタイプ・スタジオが乱立し、人々が殺到した。ダグレオタイプの力を借りて、いまやだれもが肉体の死を超え自らの姿をとどまることができるようになった。それまで特権階級だけに許されていた肖像は、写真術の登場によって一部ながら「民主化」された。

（…）

　　ダグレオタイプとは、完全な鏡面に磨き上げた銀板の表面をヨウ素ガスでコーティングし、カメラに装填して露光したのち水銀蒸気で現像することにより、銀板に直接画像を記録する技法のことだ（カメラやレンズの名称ではない）。画像の明るい部分には不透明な銀水銀化合物がレリーフ状に分布し、暗い部分は鏡面のまま残る。銀盤は光を通さないのでプリントをつくることはできず、ただ一枚の銀板が複製不可能な写真として残る。最初期の技法でありながらその画像は驚くほど鮮明で、角度によってわずかに色調がうつろう宝石のような輝きを放つダグレオタイプには、いまでも色褪せない美しさがある。

（…）

　　ヴァルター・ベンヤミンはダグレオタイプを他の写真技法方明確に区別しながら、その特質を〈アウラ〉という概念で説明している。」

　　「その後複製可能な写真術が登場して以来、わずか百五十年のあいだに、写真のテクノロジーは飛躍的に進歩した。しかし、いつでも簡便に確実に撮影できる技術の「進歩」とともに、ダグレオタイプが持っていた、人々を気おくれさせるほどの映像の鮮明さは失われていくことになる。こうして「写真」がになっていた呪物としての価値は、大量複製時代の実用的価値の背景へ、急速に後退していったのである。」

　　「あらゆる文脈や解釈。教義を保留して、モニュメントの表面に留まりつづけること。そうしてわたしたちは、わたしたちひとりひとりの内に生まれ出ずる、新しい言葉をたずさえ、からくも、他者の記憶から放たれるわずかな光を見いだすだろう。」

（永井玲衣「世界の適切な保存⑩適切な保存」より）

　　「「保存」とはつくづく動的なものだと思う。建物や街並みをまるごと3Dスキャンして、データ化することもできるようだ。あるいは、カメラで一瞬を切り取ることもできるし、詩のように言葉で世界を捕まえることもできる。だがそれで永遠に冷凍することができるとは限らない。むしろ、保存しようと試みつづけることが、消え去っていくことに抗うことなのだ。

　　保存は、不断の抵抗である。変容しつづける世界の中で、保存されたものもまた、変化をこうむるだろう。保存をしようとしたひとびと、そしてそれを受け取るひとによって、それは変容しつづけるはずだ。だが、その方がよっぽど健全であるかもしれない。

　　いま「保存をしようとしたひと」と書いた。保存が抵抗の運動であるならば、誰がそれを試みたのかということもまた、重要になってくる。

　　経験というものは、全体的なものだ。建物でも、場所でも、何でもその場に自分の身体が置かれるということが、決定的な事実である。身体は環境とふれあい、たくさんのものを受け取る。」

　　「「生きているということは、年をとるということ」

　　生きているとはどういうことか、という問いで、福島県の葛尾村の小学校で哲学対話をしたとき、ある子どもがつぶやいた。あなたはただけ言って、黙った。もう十分だというふうだった。

　　保存されたものも年をとる。わたしたちはそんな当然なことを、忘れてしまっている。保存したひとも年をとるし、されたものも年をとる。保存されたものは、生きているからだ。」

　　「何かを残そうとするとき、わたしたちはまず誰もが共有できる事実を書き留めるだろう。そこに何があり、何がおかれ、いつ建てられたかなど。そして、そこでの印象的なエピソードをかき集めるだろう。時に感動し、時に心揺さぶられ、それゆえ典型に達してしまったような「思い出」を材料にし、ひとつの粘土のようにして、こねあげてしまう。そうして「憩いの場所でした」と書いて、忘れてしまうかもしれない。「いい場所だったよね」と、互いにつぶやきあって、どこかへ去ってしまうかもしれない。」

　　「もし電車というものがいつかなくなってしまうのならば、わたしたちは何を保存するだろうか。（…）

　　あのときの電車の体験が何だったのか、もう思い出せない。日常に埋め込まれすぎていて、準備ができていなかった。そういえばいつの間にか変わっていて、そのことすら忘れていた。

（…）

　　完全に止まったはずの地下鉄がちよっと動いてみんなよろける（岡野大嗣）

　　百年後のひとたちが「地下鉄」を知るとしたら、図解や技術の説明を通して受け取ることがほとんどだろう。でも、地下鉄がホームに到着し、乗客が扉の前に何となく集いはじめたあたりで、がくん、と電車がほんの少しだけ動いたことを、百年後のひとは知ることができるだろうか。そして、ほんの半歩だけ、でも全てのひとが、よろりとかたむくことを、知ることができるだろうか。」

　　「体験は、記憶になる前に言葉になり、多くの人の前に差し出される。そうやってわたしたちは消える前の準備をする。完璧さや不変さを急いで求めなくてもいい。保存されたものは生きているのだから。年を重ねながら、誰かの中で育つだろう。わたしたちはもっと信頼してもいい。

　　そうだとは知らずに乗った地下鉄が外へ出てゆく瞬間がすぎ（岡野大嗣）」

◎新井卓（あらい・たかし）

1978年神奈川県生まれ。神奈川県を拠点に活動。

写真の原点を探るうち最初期の写真術・ダグレオタイプ（銀板写真）を知り、試行錯誤ののち同技法を習得。対象に出会ったときの感覚を、時間と空間を超え見るものに生々しく伝えることのできる<小さなモニュメント>として、自身のメディアとしてきた。近年は映画制作、執筆、共同研究ほか内外の多拠点で学際的活動を展開。

小川楽喜『標本作家』は
第10回ハヤカワSFコンテスト大賞受賞作

個人的な受容の傾向としてはあるが
とくに二十一世紀に入ってから
SFというジャンルは
かつての輝きを感じられなくなってきている

たとえばそれが
ネガティブなものであったとしても
かつては未来
あるいは未知の世界が
SFによってひらかれていく
そんな感覚を得ることもできたが

現代という時代背景もあるのだろうか
我をわすれてしまうほどに
想像力を刺激されるような作品に
出会えることは稀となった

本作も少し無理な設定と
扱われているテーマを展開させるには
かなり困難な素材であることもあり
SFとしてとらえると物足りないのだが

昨今話題の対話型生成AI
オープンAIの「チャットGPT」や
グーグルの「吟遊詩人」Bardのような
文章作成を可能にするツールや
音楽でいえば自動作曲を可能にするツールなど
過去に人間が作ったさまざまなデータベースを
解析することで可能になる世界ではなく

本作『標本作家』のように
あえてかつての「文豪」を甦らせることで
あらたな小説を執筆させるという
アナログすぎるほどの設定をむしろ面白く感じた

ストーリーは以下の通り

西暦80万2700年
人類滅亡後の地球
高等知的生命体「玲伎種（れいきしゅ）」は
人類文化の研究のため
歴史上の文豪たちを再生させて小説を執筆させていたが

ひとりの作家だけではなく複数の作家の作風と感情を
混ぜ合わせる〈異才混淆〉によって
導入されることで「共著」が強いられるようになり
作家の才能は枯渇させられるようになってしまっていた

作家と玲伎種の交渉役である〈巡稿者〉は
それに対して反逆し〈異才混淆〉をやめて
ひとりで書かせることを試みるように…

は80万年後の世界なのに
発想が作家による執筆というふう
にきわめてアナログなところがむしろ面白い
AIではなく身体をもった作家に書かせるという
とても人間くさいストーリー…

本書のタイトルは「標本作家」で
「作家」だけが問題となっているが
この発想による展開であれば
作家だけではなく標本作曲家や標本画家・標本哲学者
標本科学者・標本アスリートなども登場させると
身体をもった人間でしか可能ではない
「思考」や「感性」の「表現」のありようを
問い直すこともできそうだ

あらゆる過去のデータを集積させ
それにもとづいた編集によって可能になる「表現」と
それによっては可能とはならないだろう「表現」の可能性



■小川楽喜『標本作家』（早川書房 2023/1）

■小川楽喜『標本作家』（早川書房 2023/1）

（「第一章 終古の人籃」より）

「人類がこの地上に生まれ落ちてから滅びるまでのあいだに、いったい、どれだけの物語が作り出され、認知されることもなく消えていったのでしょうか。それを正確に数えることはできないけれど、私はその最期を看取る役を任せられました。

「—————……………」

切り乱された髪の毛が、揺れて。

左右で焦点の合っていない眼球が、裏返って。

否応もなく、私はそちらへと意識を奪われます。

目の前にいるそれは、もの云わぬ存在でありながら、私に使命を課したモノでした。

髪の毛も、眼球も、それ単体で評価すればガラクタ同然の代物なのに、組み合わせることで調和がとれ、退廃的な美を醸し出しています。外見上は、きらびやかなドレスに身を包んだ球体関節人形。しかし、それは生きているのです。人類のあとに誕生し、繁栄した、新たな知的種族。言語を用いずとも他者との意思疎通が可能な、超常の生命体。

「…………—」

私はそれと同席していました。ソファに座り、向かい合って、千を超える原稿用紙の束を、彼女に提出しています。彼女？　—————この生命体に性別があるかどうかはわかりません。けれども、その女性的な容貌に惑わされ、自然とそう認識するようになりました。

「コンスタンス」

彼女の名を呼ぶと、それはわずかに反応しました。原稿用紙に落としていた視線をこちらに向け、次の言葉を待っています。その挙動は非人間的で、無機質で、たしかに私たちとは別種の生き物なのだ実感させられます。私は彼女に問いかけました。

「どう？　……今回の、小説は」

祈るような思いで、それだけを口にしました。

コンスタンスからの答えは、直後、私の精神へと訴えかけてくるものでした。それは言語化される前の、思想の源泉、情緒の兆しといったもので、直感的に理解することができます。いま、私のなかに伝わってきたそれを、あえて言葉置き換えるのなら。次のような単語の羅列になるでしょう。

退屈。凡庸。落第。拙劣。幻滅。陳腐。不快。屑。論外。愚にもつかない—————……………」

半ば予想していた返答に、それでも私は落胆し、彼女から目をそむけました。ここにある原稿は私が書いたものではありません。はるか過去から現代にいたるまで、歴史に名を残した作家たちによる共著なのです。ある者は十九世紀に、ある者は二十八世紀に。それぞれの時代にそれぞれが名を馳せ、世界的に重要な小説を発表したあと、死に、いまふたび甦ってきました。そうして、標本として管理されるようになったのです。自由はありません。各時代の天才たちは人類を淘汰した新種族によって再生され、ちっぽけな館に押し込められて、そこで延々と執筆することを強いられています。

この事業が発足してから、およそ数万年の時が経過したといわれています。標本化した作家たちは保存処理————不死固定化処置と呼ばれる施術を受けており、管理者が廃業しないかぎり永遠に生きつづけます。すなわち、いつまでも死ぬことなく、老いることなく、小説を書きつづけなければならない身の上になったということです。

私もまた保存処置を受けました。といっても、私自身は作家ではなく、作家の書き上げたものをまとめる、巡稿者という立場にすぎません。また、その肩書きに見合うほどの立派な仕事ができているわけでもありません。ただもうかつての偉人たちの要望に対して、うまく応えられずにいるなか、奉仕すす日々を送っています。彼らから受けとった原稿は文学史において最高の作品であるはずです。これ以上、望むべくもない物語であるはずです。が、それをもってしても、いま目の前にいる彼女の心を動かすのが不可能なようでした。

「—————……………」

今回。コンスタンスが、以前にも増して不満げな様子でした。氷像のそれよりも冷たい瞳で私のことを見返しています。

彼女のような知性体は、玲伎種（れいきしゅ）と呼ばれています。全大陸にわたって支配権を確保し、高度な文明を築くほど栄えているのに対し、私たち人類はもうずいぶんと前に滅亡してしまいました。ごく少数の、保存処置を受けた者だけが玲伎種の庇護下におかれ、標本として暮らしているだけです。

現在は、八千二十七世紀。西暦にして八十万二千七百年。そろそろ世界は朽ち果てます。すでに滅びた人類にできることは何もありません。いまのところはコンスタンスの属する玲伎種がこの地球を治めています、それも永くはつづかないのかもしれない。」

■目次

○第一章 終古の人籃

○第二章 文人十傑

○第三章 痛苦の質量

○第四章 閉鎖世界の平穩

○第五章 異才混淆

○主要参考文献一覧

○謝辞

○第十回ハヤカワSFコンテスト選評

◎小川楽喜（おがわ・らくよし）

1978年生まれ。大阪府在住。元グループSNE所属。既刊に『百鬼夜翔 闇に濡れる獣——シェアード・ワールド・ノベルズ』など。

☆mediopos-3170 2023.7.23

「オッカムの剃刀」と「唯名論」で知られている
オッカムのウィリアムはフランシスコ会会士で
後期スコラ学を代表する神学者である
(一二八五—一三四七)

オッカムは「普遍は我々が物体の集まりを
指すのに使う単なる名前にすぎない」とした上で、
「少ない事柄でできることをたくさんの事柄で
おこなうのは無駄である。……したがって、
知るといふ行為以外には何一つ仮定すべきでない」と論じ

「オッカムの剃刀」の核心にある考え方は
「不必要に普遍を増やさない」で
「現実に対する説明やモデルに組み込む要素の数は
最小限に留めるべきである」
というものだったが

中世哲学における唯名論と実在論の対立も
「オッカムの剃刀」も
ほんらいはそれこそ「オッカムの剃刀」で
シンプルにできるようなものでもないようだが
ここではその議論の詳細とは少し離れ

本書で論じられるように
「オッカムの剃刀」を
複雑さや冗長さを容赦なく削ぎ落とし
よりシンプルな答えへと方向づける
思考の道具としてとらえることにする

本書で単純さへと方向づける
「オッカムの剃刀」が適用されるのは主に科学の歴史で
宗教の支配から解放する科学や
地動説・量子力学・DNAの発見
そして宇宙や生命の誕生といったものだが

本書の「終章」でも示唆されているように
「オッカムの剃刀は至るところに転がっている。
あらゆる時代にあらゆる場所で進歩を妨げてきた
勘違いや独断、偏狭や先入観、信条や誤った信念、
あるいはまったくのたわごとの藪を切り拓いて、
道を敷いてきた」といい

「今後もさらなる単純さが発見されていくはずで、
それを成し遂げるのは科学者である」のだというが

さらに付け加えるとしたら
その肝心の「科学」そのものの世界観にも
「オッカムの剃刀」を適用させる必要があるそうである

現代は「科学」そのものが
かつての中世のような宗教（神学）と
化してしまっているところがあり
さまざまな政治的経済的イデオロギー的偏向も
附着しすぎている傾向を否定できない

唯物論的な世界観という枠組みもあり
その枠組みそのものが
「科学」を限界づけているところがあるのではないか

さらなる「単純さ」をもとめ
(単純さのための単純さではもちろんなく)
根源的なところで「オッカムの剃刀」が必要である



■ジョンジョー・マクファデン（水谷淳訳）
『世界はシンプルなほど正しい／
「オッカムの剃刀」はいかに今日の科学をつくったか』
(光文社 2023/3)

■ジョンジョー・マクファデン（水谷淳訳）

『世界はシンプルなほど正しい／「オッカムの剃刀」はいかに今日の科学をつくったか』（光文社 2023/3）

（「はしがき」より）

「この宇宙は誕生時の単純さを`記憶、`していて、ビッグバンから一四〇億年経ったいまでもその本質は単純なままだ。その本質、つまりこの宇宙の単純な構成要素を、オッカムの剃刀と呼ばれる道具を使って解き明かそうとしてきた人々の営み、それが本書のテーマである。オッカムの剃刀という名前は、（…）フランシスコ修道士オッカムのウィリアムにちなんでいる。」

（「第3章 剃刀」より）

「神の全能に関する議論は、ウィリアムがやって来る一世紀前にはすでにオックスフォード大学のあちこちで交わされていた。ドゥンス・スコトゥス（一二六六―一三〇八）は、もしも神がきまぐれに規則を変えることができたとしたら、いかにして善悪の違いを判断したたいのかという疑問について論じていた。ウィリアムはそこからさらに大きく踏み出した。デカルトが西洋哲学を解体して「我思う、ゆえに我あり」という有名な金言にたどり着いたのを先取りするかのように、神の全能性を除く中世哲学のあらゆる要素を剃刀で削ぎ落としたのだ。このときウィリアムが直面していたのは、全知全能の神は不可知でもあるという問題だった。」

「ウィリアムは、普遍は我々が物体の集まりを指すのに使う単なる名前にすぎないと論じた上で、「少ない事柄でできることをたくさんの事柄でおこなうのは無駄である。……したがって、知るという行為以外には何一つ仮定すべきでない」と論じた。さらに、「多くの事柄を予測できるもの〔普遍〕はそもそも心の中にある」と指摘した上で、普遍はわれわれが物体を分類するのに使う名前でしかないと力説した。そのためウィリアムが推進したこの中世の哲学大系は`唯名論、と呼ばれている。」

「この「不必要に普遍を増やさない」というのが、オッカムの剃刀の根底にある核心的な考え方である。現実に対する説明やモデルに組み込む要素の数は最小限に留めるべきである。」

（「第17章 量子の単純さ」より）

「コペルニクスやケプラー、ボイルやニュートン、ダーウィンやウォレス、メンデルやアインシュタイン、ネーターやヴァイルなど偉大な科学者たちは単純さに信頼を置き、その信頼から仰天のひらめきや進歩、そしてそれまでよりも単純な宇宙という賜物を授かった。しかしオッカムの剃刀を使ったからといって必ず単純になるとは限らない。

ここまで繰り返し強調してきたとおり、オッカムの剃刀がつねに役立つ一方で、宇宙のモデルはいくらでも複雑にすることができる。「不必要なもの」という条件があるため、それに背かない限り必要な複雑さをどれだけ付け加えてもかまわない。それでも偉大な科学者たちが見つめてきた答えは、決まって、この世界をそれまでよりも単純にするものだった。天界と地上に同じ法則を当てはめる必然性などなかった。電気と磁気がまったく異なる力でもおかしくはなかったし、光がそのどちらとも無関係である可能性もあった。単純さはどこからか与えられるものではなく、発見される、あるいは暴き出されるものだった。オッカムの剃刀によってこの世界が単純であることが保証されているわけではないが、それでもほぼ必ずそうなってきた。それはいったいなぜなのか？」

（「第18章 剃刀を開く」より）

「本書で取り上げたそのほかの論争、たとえば創造説と選択説それぞれに基づく化石（`形象石、）の説明などにもオッカムのポケット剃刀を当てはめてみてほしい。ホメオパシーやクリスタル療法といった疑似科学的医療が有効であるとする説明と、いっさい効かないとする説明に、この剃刀を当ててみるのもいいだろう。地球温暖化とその原因をめぐる論争も、ポケット剃刀の切れ味を良くするための砥石としてなかなか興味深い対象だ。

最後に念を押しておくべきこととして、オッカムの剃刀自体は、この宇宙が単純か複雑かについては何ら主張していない。データを予測できるモデルの中でもっとも単純なものを選ぶよう求めているだけだ。このようなタイプの単純さの原理は、`弱いオッカムの剃刀、と呼べるだろう。しかし多くの科学者、とりわけ物理学者は、我々が存在している以上この宇宙は可能な限り単純であるとする。`強いオッカムの剃刀、とでも呼べる考え方を受け入れている。」

（「終章」より）

「オッカムの剃刀は至るところに転がっている。あらゆる時代にあらゆる場所で進歩を妨げてきた勘違いや独断、偏狭や先入観、信条や誤った信念、あるいはまったくのたわごとの藪を切り拓いて、道を敷いてきた。単純さが現代科学に組み込まれたのではなく、単純さそのものが現代科学、ひいては現代の世界なのだ。もちろん今後もさらなる単純さが発見されていくはずで、それを成し遂げるのは科学者である。とりわけ、いままで足枷となってきたあからさまな偏見や独断や不利な立場に縛られていない、性別や人種や性的指向もさまざまもっとうと幅広く立場の人々だ。オッカムの剃刀の主戦場である物理学にすら、いまだなすべきことが多く残されている。現在のところ宇宙の構造をもっとも良く記述する一般相対論と、現在のところ原子の構造をもっとも良く記述する量子力学とを統一する術はまだ誰も見つけられていない。二〇世紀を代表する物理学者の一人であるジョン・アーチボルド・ウィーラーは力を込めて次のように言う。「あらゆる物事の裏には間違いなく単純で美しい考え方が潜んでいて、一〇年か一〇〇年、あるいは一〇〇〇年かけてそれが理解できたときには、きっと誰もがこう言い合うだろう。それ以外の考え方なんてできるだろうかと」この世界は本当に単純なのだ。」

◎ジョンジョー・マクファデン（Johnjoe McFadden）

英国サリー大学の分子生物学教授。インペリアル・カレッジ・ロンドンで博士号を取得。結核や髄膜炎を引き起こす微生物の遺伝学を研究している。著書に『量子進化―脳と進化の謎を量子力学が解く！』、共著に『量子力学で生命の謎を解く』がある。

◎水谷淳（みずたに・じゅん）

翻訳家。訳書にジム・アル＝カリリー&ジョンジョー・マクファデン『量子力学で生命の謎を解く』、グレゴリー・J・グバー『ネコひねり問題』を超一流の科学者たちが全力で考えてみた』、グレゴリー・ザッカーマン『最も賢い億万長者』、デイビッド・クリスチャン『「未来」とは何か』（共訳）。著書に『科学用語図鑑』。

教えることが可能なのは
言語ゲーム的な場のなかで
知識を記憶しそれを蓄積し
模倣によって技術を習得すること
その延長線上にあることである

そのために過去の事例を用い
それをもとにある種の成果や評価を
行うことはできるだろうが
そこで生まれる「意味」は
あくまでも過去において
標準化されたものでしかない

新たなものを問い
創造に向かってそれを開いていくとき
過去の「意味」はむしろ足枷となる
踏まえておく必要があるとしても
それは問いを閉じることにほかならない

まして「芸術」の領域において
教えること
そして学ぶことは
日常的な言語ゲームからは外れたところにある

芸術的創造を行う際
過去に評価された作品の基準でのそれは
模倣の域を出られない

どんなに技術的にスキルが高くても
そこに新たな領域はひらかれない

美術を学ぶ人のハンドブックである
『なぜ美術は教えることができないのか』において
実際に美術を教えているジェームズ・エルキンスは
四つの「結論」を導き出している

- 1 「美術を教えるという考えは修復したがいまでに不合理」であり
「私たちは、教えてはいない」
- 2 「私たちは技術を教える以上の何かをしている」とはいえない
- 3 「美術の教え方においてプログラム上の変更」の提案は意味がない
- 4 「かにして美術が教えられるのか、
それを理解しようとしても意味をなさない。」

- ジェームズ・エルキンス（小野康男・田畑理恵訳）
『なぜ美術は教えることができないのか／美術を学ぶ人のためのハンドブック』
（三元社 2023/5/9）



過激なイメージもある「結論」だが
美術の授業では
あらたな表現へ向かっている以上
何をいかにして教え学んでいるのか
教師も学生もほとんど分かっていない
というのがじっさいの本音のところなのだろう

だからといって美術の授業そのものが無意味だなのではなく
そこで起こっていることを
常に問い直していくことが不可欠だということだ

知識や技術をその歴史を含めて学ぶことは重要だが
芸術は過去の模倣ではない
教えることができるのは過去とその意味であり
未だ生まれていないものを教えることはできない

ポエジーはポイエーシスという作ることからきているが
芸術的な創作において作ることは複製技術ではない

芸術だけではなく
教えることと学ぶことは
基本的に自己教育による開かれであって
過去のデータにもとづいた
精密な複製や編集は
過去の模倣の域を出るものではなく
未知の道はそこにはない

■ジェームズ・エルキンス（小野康男・田畑理恵訳）

『なぜ美術は教えることができないのか／美術を学ぶ人のためのハンドブック』（三元社 2023/5/9）

（「序論」より）

「本書のタイトルを「いかにして美術を教えることができるのか」としても変わりはなかったかもしれない。しかし、私は概して美術学校で起こることに関して悲観論的である。美術を教えることができるかと否かにかかわらず、いずれにせよ、いかに教えいかに学ぶか私たちはほとんど分かっていない。スタジオでの美術指導では数多くの興味深く価値あることが起こる。私はいまでもスタジオで指導を行っているし、指導の意義を信じている。しかし、私はスタジオでの美術指導には美術を教えることは含まれていないと思っている。」

「批評は美術指導の中でも最も奇妙な部分である。というのも、批評は他学科のほとんどすべてに見られる最終試験とは異なるからである。批評は試験よりも形式が自由であるし、何を語るのかを制御する規則はほとんどない。多くの場合、批評は美術を教えること全体を凝縮して示している。」

（「結論」より）

「意味は形成されねばならない。意味は自然に存在するものではなく、美術を教えることの中で見出すのはことさら困難である、本書のいくつかの箇所で、いくら努力しようとも、美術の授業で行われていることの理解をそれほど進めることはできないと思うと言ってきた。私はこの態度を懐疑論的であると同時に悲観論的と呼んだ。そして三つの暫定的な結論を下した。（・・・）

- 美術を教えるという考えは修復したがいまだに不合理である。いついかに教えるか分からないがゆえに、私たちは、教えてはいないのである。
- 美術を教える企ては混乱している。なぜなら、私たちは技術を教える以上の何かをしているかのようにふるまっているからである。
- 美術の教え方においてプログラム上の変更を提案することには意味がない。

これらの結論のうち第一のものは本書のタイトルの答えとなるものである。第二の結論は美術の指導が救いがたいまでに合理性を欠く理由を指し示している。第三の考え方は、実践がそこまで合理性を欠くのなら、実践で大きな見直しを企てても、ほとんど意味がないということである。それは子どもに患者の手術をさせるようなものだろう。（できないことはないかもしれないが、子どもの単純な発想はおそらく患者の複雑な人体構造に対応しないだろう。）

それでも楽観論を支持する根拠はあると私は言った。というのも、私たちは自分のしていることについて学びを深めようと常に努力することができるし、私たちの学びが何かの役に立つと常に期待することができるからである。たとえ美術の授業で起きることのほとんどが合理的ではないとしても、それでも授業について考えることには意味がある。しかし別の見方もある。美術を教えることから合理的な意味を引き出そうとし続けるのはいい考えかどうか問うことも可能なのである。」

「ほとんどの教化では明快さと分別が究極の目標である。それらを批判するのは分別のあることではない。やっかいな問題について「はっきりさせ」たり「明快にし」たりするとは、その問題を徹底的な理解し、把握し、完璧に知ることである。物理学の法則は明快なときに最善のものとなる（たとえその法則が不確実性や蓋然性に関わるものであっても）。自動車のメカニズムの法則は道理に合っているときに最善のものとなる。それによって理論的な機械工学が日常の修理の問題に適用されることになるのである。しかし同じことは美術の授業にも言えるだろうか。美術学科や美術学校で教えることは、私を知る限り最も興味深い活動である。なぜなら、それはおよそ意味をなす何ものからも最もかけ離れた活動だからである。もっとも精神病は除いての話だが。ある程度の明快さを求めて努力することはいい考えだとの仮定に基づいて、私は本書の全体を書き終えたものの、結局のところ、それがそれほどいい考えなのかどうか確信はない。理解されないことによって作動している何かを理解することがいい考えなのかどうか分からないのである。この主張を定式化することもできるだろう。それが私のリストの最後のものとなる。

- いかにして美術が教えられるのか、それを理解しようとしても意味をなさない。」

（「訳者あとがきと解説」より）

「本書は、James Elkins,Why Art Cannot Be Taught:A Handbook for Art Students,2001,University of Illinois Press の全訳である。」

「美術の教育機関として、本書が歴史的に取り上げているのは、主として、ルネサンスから十九世紀に至るまでのアカデミー、二十世紀のパウハウス、そしてポストモダンと呼ばれる二十世紀後半以降の美術学校や大学の状況である。」

「美術の授業は、初等教育から高等教育に至るまで、（一）教員が生徒全員に課題を与え、（二）生徒が単独ないしグループで課題に取り組み、その間、京師が机間を巡回しながら形式ばらない言葉で指導を行い、（三）そして作品に対して教師や生徒が記述的・評価的なコメントをつけ、（四）最後には、展示の工夫をする、という四つの段階の繰り返しで成り立っている。本書はこのプロセスの意味を考える試みだと言えよう。」

「エルキンスはさまざまな著作の中で、美術史の研究者に作品の制作を勧めている。歴史家や哲学者は制作をしない。その一方で、制作者は歴史や哲学を参照し続ける。その非対称性に不都合の種があるのではないかというわけである。たとえ制作をしない者であっても、消え去った前衛を捜し求めるのではなく、「平凡の美術」やその批評を通してスローダウンした概念の旅を続けること、あるいは概念の物質性に触れることはできるだろう。エルキンスはおそらく本書を希望の書として執筆したのである。」

「日本における美術の教育は、何を教えることができるのか、そもそも教えるとは何か、評価はいかにして可能か、そしてそれらをいかにして数値として可視化するかといったことを問い続けてきた。エルキンスのこの著作でも、大学院レベルを中心としているものの、同様のことが問われている。専門的な教化であるとともに全人的な教科でもあるという美術の特殊性についても、そして行政や経営からの要求に苦慮しているという現状においても、本書に親しみをもつ人は少なくないだろう。もちろん、エルキンスのこの著作が何か解決法を教えてくれるわけではない。美術を教え学ぶことを理解しようとする努力を意義あるものとするためには、批評を活発化し、言語化を諦めないことが大切だということを確認させてくれるだけである。」

◎ジェームズ・エルキンス(James Elkins)

1955年生まれ。コーネル大学卒業後、シカゴ大学大学院において制作と論文で美術学修士取得、その後美術史に専攻を転じ、美術史におけるヘーゲル主義の研究で文学修士取得、ルネサンス美術における遠近法の研究で学術博士取得。現在、シカゴ美術館附属美術大学教授。美術史・美術理論・美術批評を担当。美術史、ヴィジュアル・スタディーズを中心に著書多数。本書以降では、美学・美術史・ヴィジュアル・スタディーズについての理論的検討を中心としたセミナーを主催している。近著に、The End of Diversity in Art Historical Writing: North Atlantic Art History and its Alternatives, 2020, De Gruyter, Visual Worlds: Looking, Images, Visual Disciplines, 2020, Oxford University Pressなど。

◎小野康男

1953年生まれ。神戸大学大学院博士課程文化学研究科単位取得満期退学。美学・芸術学。佐賀大学および横浜国立大学の教員養成系学部において美術理論・美術史を担当。現在、横浜国立大学名誉教授。共訳書にジャン=フランソワ・リオータル『文の抗争』、リュック・フェリー『ホモ・エステティクス』、ジョルジュ・ディディ=ユベルマン『時間の前で』（以上、法政大学出版社）など。

◎田畑理恵

1963年生まれ。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業後、東京学芸大学大学院教育学研究科および東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士(教育学)。書道を米島清鶴と金子卓義、抽象画をSteven Cushnerに師事。現在は都留文科大学、川村学園女子大学、山梨県立大学で非常勤講師。近年の個展は、Espace Sorbonne 4(パリ市、2021年)、国立新美術館(東京、NAU21世紀美術連立展内での個展、2022年)。

「ナラティブ」とは
「物語」「語り」を意味するが

私たちは心のなかで無意識的に
ナラティブを語り続けている

大治朋子『人を動かすナラティブ』での
インタビューにあるように
養老孟司によれば

「ナラティブっていうのは、我々の脳が持っている
ほとんど唯一の形式じゃないか」という

映像のコマとコマ送りのように
実際はコマでしかない出来事は
それだけでは理解できないから
ナラティブのように
物語化することで理解しようとするのである

わたしたちはナラティブに囲まれて生きているが
それがどんな力をもっているか
私たちがどのように操っているか
そのメカニズムに意識的であることは少ない

ナラティブのそうした力について
こうして調査を行い提言を行ってもいる著者でさえ
たとえば本書では「陰謀論」を
(それもまさに「ナラティブ」にほかならないのだが)
メディア一般で使われるそれとして疑いもなく理解し
その言葉そのものもっている
「情報兵器」としての側面には目が向いていないようだ
それほどに「ナラティブ」はひとを知らず操っている

以前mediopos2934 (2022.11.29) で
ジョナサン・ゴットシャル
『ストーリーが世界を滅ぼす
——物語があなたの脳を操作する』を
とりあげたことがあるが

ナラティブは「情報兵器」として
ひとを洗脳することにも使われるほどだ

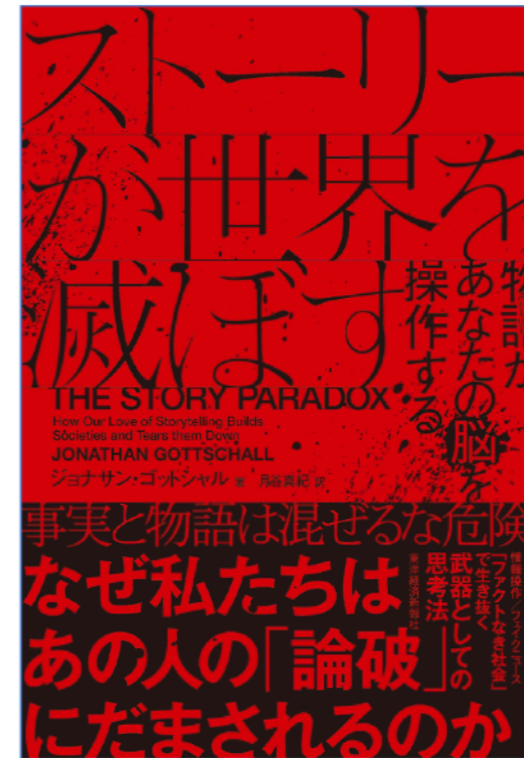
とはいえナラティブは両義的であり
ネガティブな側面だけのものではない

ひとはナラティブによってその世界観を生き
ひとつひとつをつなぐのもまたナラティブだからだ

重要なのは人の心をつかみ人を動かすナラティブに
「3人称の客観性と、1、2人称の情動性を兼ね備えた
「2・5人称の視点」」で対することだと大治氏はいう
そうしてはじめて「ナラティブ」で
ひとつひとつをつなぐこともできる

そして「ナラティブをつむぐというのはまさに
星々に物語を見い出すようなものではないか」という

河合隼雄の示唆している
「コンステレーション」(星座)のように
「一つひとつの星々は個人の記憶や経験」で
私たちはそれらを結び「星座」を描いている



- 大治朋子『人を動かすナラティブ／なぜ、あの「語り」に惑わされるのか』
(毎日新聞出版 2023/6)
- ジョナサン・ゴットシャル(月谷真紀訳)
『ストーリーが世界を滅ぼす——物語があなたの脳を操作する』
(東洋経済新報社 2022/7)

「星々をつなぐのがナラティブ」で
「個人の心の中にはその小ナラティブが創る
個性的な星座があり、世界観がある」

与えられたナラティブに「惑わされ」ず
その危険性に対して自覚的になるとともに
そうした影響下にあることに意識的でありながら
じぶんのそれや他者のそれに向きあい
「世界で唯一のナラティブをつむいで」いけますように

- 大治朋子『人を動かすナラティブ／なぜ、あの「語り」に惑わされるのか』（毎日新聞出版　2023/6)
- ジョナサン・ゴットシャル（月谷真紀訳）『ストーリーが世界を滅ぼす―物語があなたの脳を操作する』（東洋経済新報社　2022/7)

（大治朋子『人を動かすナラティブ』～「はじめに」より）

「ナラティブという英語の表現がある。日本語では「物語」とか「語り」と訳されることが多い。本書であえれナラティブという英語表現を使うのは、「物語」「語り」「ストーリー」といった日本語がそれぞれ持つ意味やニュアンスを広く網羅する表現だからだ。」

「善くも悪くもナラティブは人間の感情をかき立て、個人を、そして社会を突き動かす。人間を孤独にも憎しみにも、連帯にも慈しみにも駆り立てる。

「英ロンドンを拠点に軍事心理戦を展開したデータ分析企業のケンブリッジ・アナリティカ元研究部長は私のインタビューに、ナラティブと、その影響力を最大化、最適化するアルゴリズムを組み合わせた「情報兵器」による世界最大規模の人心操作の実態を語った。それは現代社会に蠢く「見えざる手」ともいうべきものだった。見えざる手は、見えないから恐ろしい。見えないから、支配されやすくもない。SNSを駆使して物語を操るさまざまな手があるのなら、それがいかなるメカニズムを持ち、どのような働きからするのか、できるだけ「見える化」する、可能な限り顕在化させることが、一方的に支配されなための手がかりになるはずだ。そう考えて、私はこの調査を続けた。」

（大治朋子『人を動かすナラティブ』～「第1章　SNSで暴れるナラティブ」より）

「人間にとってナラティブとはいったい何でしょうか」

　養老（孟司）さんの答えは、極めて明快で端的だった。

「ナラティブっていうのは、我々の脳が持っているほとんど唯一の形式じゃないかと思うんですね（…）
「歴史学者はよく知っていると思いますけど、歴史はドキュメントかナラティブかといえば、まあドキュメントなんでしょう。事実の記載ですよね。事実を言葉に変える。ところがその時に一番困っちゃうのは、記述と次述の間で時間が経過しちゃうんですね。だからそういう記述だけを受け取っても理解できないんです（…）」

「映画がそう。コマ送りで、実際には全部止まっているのに、コマ送りにすることで動いているように見せるんですね。ナラティブというのはそういう働きに近いんじゃないですか。過去に起こった非常に長い時間の出来事をどうやって凝縮して伝えるか。物語形式以外の形式を人間は持っていないんです。ちょうど言葉っていう形式がひとつしかないように、必然的に物語になるわけです」

（大治朋子『人を動かすナラティブ』～「第6章　ナラティブをめぐる営み」より）

「私にとってナラティブとは何か。そんなことを考えながら、ある日、夜空を見上げた。ふと、ナラティブをつむぐというのはまさに星々に物語を見い出すようなものではないかと思いついた。星座という概念は約5 0 0 0年前、古代メソポタミアの人々がよく光って見えやすい星々を動物や神の姿などになぞらえたのが最古の記録として残る。以来、世界中の人々がそれぞれ独自に星々のきらめきを慣れ親しんだ神や生き物の姿に見立ててきた。私たちが心の中でつむぐナラティブも、どこかこれに似ている。一つひとつの星々は個人の記憶や経験だ。印象深い記憶は良くも悪くも強い光を放つ。良いことが重なれば、私たちはそれらを結んで「幸せの星座」を描く。「自分が頑張ったから」「あの人が助けしてくれたから」と好みのナラティブで記憶をつなぐ。悪い経験が重なれば、根拠もないままに、「あいつのせいだ」「自分は被害者だ」「と恨みつらみの「不幸の星座を創るかもしれない。星と星を結びつけるのは、私たちの脳内にある「連想屋」デフォルト・モード・ネットワークの仕事だ。何事もポジティブに捉える人が心の中にたたえる星座は暖色系で、ネガティブに考えやすい人の星座は寒色系かもしれない。その違いには遺伝子やその人だけが経験する固有の環境（非共有環境）が影響するだろう。」

「（河合隼雄）の最終講義によれば、私たちがある言語から連想する言葉の群れ、つまり心の中から出て来る「かたまり」はコンステレーション（星座）であり、その中心にあるのが「感情」だと考える。コンステレーションは「感情によって色づけられたひとつのかたまり」であり、それは「しこり」としてコンプレックスにもなりうる。この心の中の「かたまり」が、私たちが心の中で描く「星座」だと捉えるという。ユングはその後、心のさらに奥深くには「アーキタイプ」と呼ぶべき元型のようなものがあると考え、「元型がコンストレートしている」と表現するようになったそうだ。人の心の中にはそれぞれ非常に大事なものがあり、それが星座を創っている。だから人々が抱く星座の集合体を読むことがひとつの文化、時代の理解に役立つと考えた。私から見れば、星々をつなぐのがナラティブだ。個人の心の中にはその小ナラティブが創る個性的な星座があり、世界観がある。」

「ケンブリッジ・アナリティカの元研究部長、ワイリーさんの言葉に当てはめれば、政治を変えたければ文化的に共有される星座を変え、文化を変えたければ一人ひとりの個人が心に宿す星座を変える必要がある。かつては、個人の星座は洗脳でもしない限り変えられなかったが、今ではアルゴリズムが簡単に操作して並べ変えてしまう。私たちは星座が組みかえられたことにすら気づかない。そうやって個人の星座が変わり、文化や政治を覆う星座も組み替えられてしまう。」

「アルゴリズムに見守られた「ケージ」の中で心地よく過ごす時間が長くなり過ぎると、想定外の難局に遭遇した時に創意工夫で対応したり、対立するナラティブに柔軟に対応したりするための必要な想像力や柔軟な発想も育ちにくくなる。私たちはAⅠに仕事を奪われるかもしれないと恐れているが、実際には私たち自身が「AⅠ化」しようとしているのではないだろうか。大量の情報を浴び、ひたすらそれらを「効率的」にさばこうとする。だがその結果、（…）私たちは多くのものを失っているという。」

「SNSが問題というのではない。SNSはプラットフォームに過ぎない。人と人をつなぎ、世界を連帯させることにも使える。ナラティブだけが問題なわけでもない。人と人の心をつなぎ、リボンのように世界を結びつけるのもナラティブだ。問題は、「広場（アゴラ）」の縮小に伴い孤立・孤独が深化する現代社会で、心の脆弱性を抱える人々を「足場」に計画的かつ大規模に感情汚染、行動感染を引き起こして自己の利益につなげようとする指導者や政治勢力、企業が急増している状況だ。アルゴリズムを使って人間の脆弱性を自動検索し、ローハンギングフルーツをあぶり出し、彼らを「感染源」にクラスター感染を起こして大衆心理を操作しようとする。」

「いかなる危機、苦難が訪れようとも人々が孤立・孤独に陥ることなく、力を合わせ、自身やコミュニティのナラティブを再構築して生きていける社会――。そこに求められるのは3人称の客観性と、1、2人称の情動性を兼ね備えた「2・5人称の視点」であり。そこから心も体も、認知的スキルも社会情動スキルも存分に使いこなせる豊かな人間の姿が生まれ出てくる。」

（大治朋子『人を動かすナラティブ』～「おわりに」より）

「本書は取材相手が交った1、2人称のナラティブをできるだけ忠実に再現しつつ、可能な限り論理的科学的なデータも含めた。ノンフィクション作家の柳田邦男さんが語った「2・5人称の視点」を私なりに生かしたいと思ったからだ。これからも、人と人をつなぐ1、2人称のナラティブ・モードと、事象を客観的に見極める3人称の論理科学のモードを十分に兼ね備えた報道を心がけたい。チャットGPTなどAⅠやアルゴリズムへの依存が日常化する時代だからこそ、その心地良い依存関係から抜け出し、五感を総動員し、自分の心や他者のナラティブとしっかりと向き合い、葛藤しながら、世界で唯一のナラティブをつむいでいきたい。だからこそ人間として生まれた者だけが享受できる最高のぜいたくであり、幸福な時間だと感じる。」

（大治朋子『人を動かすナラティブ』～「おわりに」より）

「本書は取材相手が交った1、2人称のナラティブをできるだけ忠実に再現しつつ、可能な限り論理的科学的なデータも含めた。ノンフィクション作家の柳田邦男さんが語った「2・5人称の視点」を私なりに生かしたいと思ったからだ。これからも、人と人をつなぐ1、2人称のナラティブ・モードと、事象を客観的に見極める3人称の論理科学のモードを十分に兼ね備えた報道を心がけたい。チャットGPTなどAⅠやアルゴリズムへの依存が日常化する時代だからこそ、その心地良い依存関係から抜け出し、五感を総動員し、自分の心や他者のナラティブとしっかりと向き合い、葛藤しながら、世界で唯一のナラティブをつむいでいきたい。だからこそ人間として生まれた者だけが享受できる最高のぜいたくであり、幸福な時間だと感じる。」

（ジョナサン・ゴットシャル『ストーリーが世界を滅ぼす』～「序章　物語の語り手を絶対に信用するな。だが私たちは信用してしまう」より）

「たしかに、ナラティブは私たちが世界を理解するために使う主要な道具だ。しかしそれはまた、危険なたわごとをでっちあげる際の主たる道具でもある。たしかに、物語にはたいてい、向社会的な行動を促す要素がある。しかし悪と正義の対立という筋立て一辺倒であることによって、残酷な報復を求め徳徳家ぶって見せたい私たちの本能を満足させ、つけあがらせるのもまた物語だ。たしかに、共感と呼ぶストーリーテリングは偏見を克服する最高の道具になる。しかしそれはまた、偏見を作り上げ、記号化し、伝えていく方法にもなる。たしかに、人間社会の善なる部分を見出すのに役立つ物語の例は数えきれないほどある。しかし歴史を顧みれば、悪魔的な本性を召喚してしまったのも常に物語だった。たしかに、物語には種々雑多な人間たちを引き寄せて一つの集団にまとめ上げる、磁石のような働きがある。しかし物語は異なる集団同士を、ちょうど磁石の斥力のように反発させ合うのにも中心的な役割を果たす。このような理由から、私はストーリーテリングを人類に「必要不可欠な毒」だと考えている。必要不可欠な毒とは、人間が生きるために必須だが、死にもつながる物質をいう。例えば酸素だ。呼吸するすべての生き物と同じように、人間は生きるために酸素を必要とする。しかし酸素は非常に危険な化合物でもあり（ある科学者は「有害な環境毒」と言い切っている）、私たちの体に与えるダメージは一生の間に累積すると相当なものになる。」

「物語が全人類を狂気に駆り立てている、という私の言葉が意味するのは、次のようなことだ。私たちを狂わせ残酷にしているのはソーシャルメディアではなく、ソーシャルメディアが拡散する物語である。私たちを分断するのは政治ではなく、政治家たちが楔を打ち込むように語る物語だ。地球を破壊する過剰消費に私たちを駆り立てているのはマーケティングではなく、マーケティングが紡ぎ出す「これさえあれば幸せになれる」というファンタジーだ。私たちが互いを悪魔に仕立て上げるのは無知や悪意のせいではなく、善人が悪と戦う単純化された物語を倦むことなくしゃぶり続ける、生まれながらに誇大妄想的で勧善懲悪的なナラティブ心理のせいだ。」

「政治の分極化、環境破壊、野放しのデマゴーク、戦争、憎しみ―文明の巨悪をもたらす諸要因の裏には必ず、親玉である同じ要因が見つかる。それが心を狂わせる物語だ。本書は人間行動のすべてを説明する理論ではないが、少なくとも最悪の部分を説明する理論である。今、私たちがみずからに問うことのできる最も差し迫った問いは、さんざん言い古された「どうすれば物語によって世界を変えられるか」ではない。「どうすれば物語から世界を救えるか」だ。」

○大治朋子『人を動かすナラティブ』のおもな内容

第1章　SNSで暴れるナラティブ
●養老孟司さん「（ナラティブは）脳が持っているほとんど唯一の形式」
●安倍晋三元首相銃撃件と小田急・京王線襲撃事件
●インセルがはまる陰謀論ナラティブ
●「ローンオフェンダー（単独の攻撃者）」「無敵の人」「強い犯罪者」の時代
●岸田文雄首相襲撃未遂事件と現代型テロ
●最強の被害者ナラティブ

第2章　ナラティブが持つ無限の力
●AIで「潜在的テロリスト」をあぶり出す
●人間が生まれながらにして持つ「人生物語産生機能」
●思考のハイジャック―ペテン師からアルゴリズムへ
●WBC栗山英樹監督が語った「物語」

第3章　ナラティブ下克上時代
●伊藤詩織さんが破った沈黙
●五ノ井里奈さんが突き崩した組織防衛の物語
●元2世信者、小川さゆりさんの語り
●「選挙はストーリー」と語った安倍元首相の1人称政治

第4章　SNS＋ナラティブ＝世界最大規模の心理操作
●ケンブリッジ・アナリティカ事件の告発者に聞く
●狙われる「神経症的な傾向のある人」
●情報戦を制す先制と繰り返し
●トランプ現象という怒りのポピュリズム
●ナゾのイスラエル・情報工作企業
●「日本は特に危ない」
●米国防総省の「ナラティブ洗脳ツール」開発
●SNSを舞台とする「認知戦」へ
●イスラエルのSNS監視システム
●中国の「制脳権」をめぐる闘いとティックトック

第5章　脳神経科学から読み解くナラティブ
●幼少期の集中教育は何をもたらすのか
●向社会性が低いとカモにされやすい？
●孤独な脳は人間への感受性を鈍化させる
●陰謀論やフェイクニュースにだまされない「気づきの脳」

第6章　ナラティブをめぐる営み
●保阪正康さんがつむぐ元日本兵の語り
●柳田邦男さん「人は物語を生きている」
●ナラティブ・ジャーナリズムとは
●SNS時代の社会情動（非認知的）スキル

◎大治朋子(おおじ・ともこ)
毎日新聞編集委員。1965年生まれ。『サンデー毎日』記者時代に「最強芸能プロダクションの闇」「少女売春」などをテーマに調査報道。社会部では防衛庁（当時）による個人情報不正使用に関するスクープで2002、2003年の新聞協会賞を2年連続受賞。ワシントン特派員として米陸軍への従軍取材などで「対テロ戦争」の暗部をえぐり2010年度ボン・上田記念国際記者賞受賞。エルサレム特派員時代は暴力的過激主義の実態を調査報道した。英オックスフォード大学ロイタージャーナリズム研究所元客員研究員。イスラエル・ヘルツェリア学際研究所大学院（テロリズム・サイバーセキュリティ専攻）修了（Magna Cum Laude）。「国際テロ対策研究所（ICT）」研修生。テルアビブ大学大学院（危機・トラウマ学）修了（首席）。単著に『勝てないアメリカー「対テロ戦争」の日常』（岩波新書）、『アメリカ・メディア・ウォーズ―ジャーナリズムの現在地』（講談社現代新書）、『歪んだ正義「普通の人」がなぜ過激化するのか』（小社）など。

わたしたちは
資本主義という（悪）夢を生きている

資本主義はGDPの成長を基本とし
その代償として
生態系の破壊をもたらすことになる

それは生命ある世界との
「互惠」関係に根差すことなく
与えることよりも
支配と搾取を軸とする経済システムであるからだ

そのシステムにおいて
自然や身体は「外部化」され、
「ニーズ」や「欲求」が
人為的に創出されるようになる

したがってそのシステムにおいては
社会と生態系のコストは計算に入らず
与えられた「ニーズ」や「欲求」を
常に更新することが強いられそれが持続していく

GDPの成長と生態系破壊は深く関係し
多くの科学者の間でも
そのコンセンサスが形成されつつあるが

2017年にナンシー・ペロシが
「資本主義に代わる経済のビジョンを
示すことができるだろうか」という
大学生の質問に
「わたしたちは資本主義者であり、
これが現実」だと答えるしかなかったように

「成長は必要だという支配的な信念は
正当性に欠ける」ことが明かだとしても
世界の支配者層にとっては
「自分たちの取り分を増や」し
「資本蓄積のメカニズムを加速させ」ること以外に
「現実」はないようだ

本書『資本主義の次に来る世界』の著者
ジェイソン・ヒッケルは
その「現実」の延長線上にある「破滅」ではなく
「希望」をこそ強く語っている

「どうすれば、支配と採取を軸とする経済から生物界との
互惠に根差した経済へ移行できるか」

悪夢から醒めるためには
「成長」しなければ
生活も豊かさも破綻してしまう
という刷り込みを解除しなければならない

「夢から逃れるには、心に刻み込まれた轍、
文化に焼きつけられた前提、
政策を形づくるイデオロギーから逃れる必要がある」といい

それには「勇気と鍛練を必要と」し「終着点ははるか先」で
「今はまだ、その可能性はかすかなささやきにすぎないが、
ささやきはやがて風となり、
いずれは世界に旋風を巻き起こす」未来を見据えている

わたしたちはさまざまな「洗脳」によって
ほんらいの「豊かさ」や「幸福」をみずから捨てている

すぐに（悪）夢から醒めることは難しくとも
まずはじぶんが（悪）夢を見ているのだと気づき
じぶんがその夢のなかで
どんな世界をつくりだしているのかを確かめ
そのプログラム（洗脳）を解除する方向へと
一歩ずつ確かに歩んでいけますように



■ジェイソン・ヒッケル（野中香方子訳）
『資本主義の次に来る世界』（東洋経済新報社 2023/5）

■ジェイソン・ヒッケル（野中香方子訳）『資本主義の次に来る世界』（東洋経済新報社　2023/5）（「はじめに　人新世と資本主義」より）

「2017年末、科学者のチームが少々奇妙でかなり心配な発見を報告した。彼らはドイツ自然保護区に生息する昆虫の数を数十年にわたって計測してきた。虫は大量にいて、そのような調査は不要だと思えるので、こうした研究に時間を費やす科学者はごくわずかだ。そのため、この珍しい調査の結果に誰もが注目した。それは衝撃的だった。ドイツの自然保護区では、この25年間で飛ぶ昆虫の4分の3が消えたのだ。原因は、周辺の森林が農地に変えられ、農薬が大量に使用されたことだと彼らは結論づけた。

この研究結果は急速に広まり、世界中で話題になった。「わたしたちは広大な土地を生物の大半が棲むに適さない場所に変え、今や生態学的アルマゲドンに向かっていようだ」と科学者の一人は言った。「昆虫がいなくなったらすべて崩壊する」。昆虫は植物の受粉と繁殖に欠かせないだけでなく、有機廃棄物を分解して土に変えている。他の数千種の生物の食料にもなっている。取りに足らない存在のようできて、生命の網の重要な節（ノード）なのだ。人々の不安を裏づけるかのように、数ヶ月後、二つの研究が、フランスの農業領域における昆虫の減少が鳥の消滅をもたらしたことを報告した。わずか15年間で、鳥の平均個体数は3分の1に減り、いくつかの種―――マキバタヒバリやヤマウズラなど―――は80%も減少した。同じ年、中国のニュースは、昆虫の死が受粉の危機を招いたことを伝えた。労働者が作物の間を歩いて手作業で受粉させるという無気味な写真が流布した。」

「本書が語るのは破滅ではない。語りたいのは希望だ。どうすれば、支配と採取を軸とする経済から生物界との互惠に根差した経済へ移行できるかを語ろう。」

「生態系の崩壊を防ぐにはテクノロジーが欠かせない。ありとあらゆる効率の向上が必要だ。しかし科学者たちは、テクノロジーは問題を解決しないことをはっきり理解している。なぜなら成長志向の経済では、人間の影響を減らすのに役立つはずの効率向上が、成長目標を推進するために利用され、ますます多くの自然を原料採取と生産のサイクルに放り込むからだ。テクノロジーではなく、成長が問題なのだ。」

「2017年、テレビ中継されたニューヨークのタウンホール・ミーティングで、トレバー・ヒルという名の大学2年生が立ち上がり、世界有数の権力者で、当時、アメリカ下院議長だったナンシー・ペロシに率直な質問を投げかけた。この若者は、18歳から29歳までのアメリカ人の51%が資本主義を支持していないことを示すハーバード大学の研究を利用し、ペロシが属する民主党はこの急速な変化を受け入れ、資本主義に代わる経済のビジョンを示すことができるか、と尋ねたのだ。

ペロシは明らかに当惑していた。「ご質問に感謝します」と彼女は言った。「けれども残念ながら、わたしたちは資本主義者であり、これが現実なのです」

この映像は瞬く間に拡散した。それが人々に強いインパクトを与えたのは、資本主義を公然と疑問視するのはタブーだということを浮き彫りにしたからだ。トレバー・ヒルは筋金入りに左翼というわけではない。平均的なミレニアル世代で、聡明で、情報に通じ、世界に興味があり、より良い世界を創造したがっている。彼は真摯に質問したが、ペロシは受け止めることができず、言葉に詰まり、身構え、自分の立場を正しいとする理由を述べることさえできなかった。資本主義はあまりにも当たり前になっているので、支持者たちは、資本主義を正当化する方法さえ知らないのだ。ペロシの回答―――「これが現実」―――は、質問を封じることを意図していた。しかし逆効果だった。疲弊したイデオロギーの脆さが露呈したのだ。あたかも『オズの魔法使い』でカーテンが開き、真実が曝露されたときのように。」

「GDPの成長と生態系破壊の関連を示す証拠が増えるにつれて、世界中の科学者は自らのアプローチを変えてきた。2018年には、238名の科学者が、「GDP成長を放棄し、人間の幸福と生態系の安定に充填を置くこと」を欧州委員会に要求した。翌年、150か国以上の1万1000名を超える科学者が、「GDP成長と富の追求から、生態系の維持と幸福の向上にシフトすること」を各国政府に求める論文を発表した。ほんの数年前まで、こうしたことは主流派では起こり得なかったが、今では度録ような新しいコンセンサスが形成されつつある。」

「わたしはいつか故郷のエスワティニに戻って、再び虫の多さに驚くことを想像するのが好きだ。老いたわたしは、夕暮れのポーチに座って、子供の頃と同じように畏怖の念を抱きながら虫たちを見て、それらの音に耳を傾ける。この空想の中では、世界は大きく変わっている。高所得国は資源とエネルギーの消費量を持続可能なレベルに下げた。民主主義の実現に真剣に取り組み、所得と富をより公平に配分するようになり、貧困を終わらせた。豊かな国と貧しい国の差は縮まった。（…）一言で言えば、物事が治癒し始め、わたしたちも治癒し始めたのだ。しかも、誰も予想しなかったスピードで。わたしたちは、少なく取ることによって、はるかに多くを得たのである。

本書では、この夢について語ろう。その旅では500年に及ぶ歴史を辿ることになる。まずは現在の経済システムのルーツを探究し、このシステムが何を原動力として、どのように定着したのかを見ていこう。その後、生態系の崩壊を逆行させ、ポスト資本主義経済を構築するための堅牢で実践的なステップについて検討する。さらには大陸を横断し、わたしたちの想像の限界をはるかに超える方法で生物界と交流している文化やコミュニティを訪ねよう。

今はまだ、その可能性はかすかなささやきにすぎないが、ささやきはやがて風となり、いずれは世界に旋風を巻き起こすだろう。」

（「第1部　多いほうが貧しい」～「第2章　ジャガノート（圧倒的破壊力）の台頭」より）

「なぜ企業は成長を強いられているのか？アマゾンやフェイスブックなどの企業が拡大し続けるのは強欲だからだ、とよく言われる。マーク・ザッカーバーグのようなCEOは金と権力に夢中になっているとも言われる。だが、現実はそのほど単純ではない。実際は、これらの企業とそのCEOは、構造的な成長要求に支配されているのだ。」

（「第2部　少ないほうが豊か」～「第4章　良い人生に必要なものとは何か」より）

「世界の支配層は、世界で何が起きているかを熟知している。知らないと考えるのは、お人好しすぎるだろう。彼らは所得分布のデータを知っていて、そのデータに従って生きている。彼らの頭にあるのは、国内と世界の所得における自分たちの取り分を増やすことだけだ。彼らはより多くの成長を求めるのは、結局のところ、資本蓄積のメカニズムを加速させたいからだ、成長と人類進歩との関係についての彼らの主張は言い訳にすぎない。もちろん彼らは、成長がやがて貧しい人々の所得を向上させ、結果的に社会的対立が緩和されることを望んでいる。貧困層の所得が増えれば、支配層の蓄財は政治的に容認されやすいからだ。しかし生態系が危機に瀕している時代にあって、もはやこの戦略は通用しない。何かを変えなくてはならない。」

「成長は必要だという支配的な信念は正当性に欠けることが判明している。生態系の安定を犠牲にしてでも成長し続けることを主張する人々は、本当は必要でさえないもののために、文字通りすべてを危険にさらそうとしているのだ。」

「ここで、理解してすべき重要なポイントは、GDPは論理的必然性のない経済指標ではない、ということだ。GDPは間違っているわけではなく、修正すればずむ会計上の間違いでもなく、資本主義が順調に進んでいるかどうかを調べるために特別に考案されたものだ。GDPが社会と生態系のコストを計算に入れないのは、資本主義が社会と生態系のコストを計算に入れないからだ。したがって、政策担当者がGDPの測定をやめれば、資本は自動的に増収を追求しなくなり、経済はより持続可能なものになる、と考えるのは甘すぎる。幸福度に重点を置くことを唯一の解決策とみなす人は、この点を見逃しがちだ。社会を成長要求から解放したいのであれば、もっと賢くなるべきだ。」

（「第2部　少ないほうが豊か」～「第5章　ポスト資本主義への道」より）

「成長しなくても繁栄できることを理解したら、わたしたちの視野は一気に広がる。違う種類の経済を想像できるようになり、気候変動という緊急事態にどう対処すべきかを、より合理的に考えられるようになる。それはいくらかコペルニクス革命に似ている。」

「脱成長―――資源・エネルギーの消費を減らすこと―――は、多面的な危機に対する生態学的に首尾一貫した解決策なのだ。良いニュースは、脱成長は人間の幸福に悪影響を及ぼすことなく実現できることだ。むしろ、人々の生活を向上させながら実現できる。なぜ、それが可能なのだろう。資本主義は使用価値ではなく交換価値を中心とするシステムであることを思いだそう。商品生産の大半が目指すのは、人間の要求を満たすことではなく、利益を蓄積することだ。したがって、成長志向のシステムは往々にして、人間の要求をあえて満たそうとはせず、要求を持続させようとする。そのことを理解すると、積極的かつ意図的に浪費する大規模経済の存在が見えてくるが。それは是認できるどの目的にとっても有益でない。

「ステップ1―――計画的陳腐化を終わらせる」

「ステップ2―――広告を減らす」

「ステップ3―――所有権から使用权へ移行する」

「ステップ4―――食品廃棄を終わらせる」

「ステップ5―――生態系を破壊する産業を縮小する」

「成長志向のシステムの目的は、人間のニーズを満たすことではなく、満たさないようにすることなのだ。実に不合理で、生態系にとっては暴力的だ。

この仕組みを理解すれば、解決策はすぐ見えてくる。成長のために希少性が創出されるのであれば、人為的に創出された希少性を逆行させれば、成長を不要にできるはずだ。公共サービスを脱商品化し、コモンズを拡大し、労働時間を短縮し、不平等を減らすことによって、人々は豊かに暮らすために必要なものにアクセスできるようになる。しかも、そのために新たな成長は必要とされない。」

（「第2部　少ないほうが豊か」～「第6章　すべてはつながっている」より）

「結局のところ、資本主義は「与えるより多く取る」という包括的な原則を抛り所にしている。この論理は囲い込みと植民地化に始まり、以来500年間、作動し続けている。余剰を蓄積するには、自然と身体をモノと見なして「外部化」し、それらから一方的に価値を抽出する必要があるからだ。」

「（企業）は生命より富の蓄積を重視する、歪んだ人格の見方だ。わたしたちはこの論理を180度転換できる。エクソンモービルやフェイスブックに人格を与える代わりに、生きた存在に人格を与えるのだ。企業を「法人」と見なすのであれば、セコイア、川、川の流域に人格を与えてもいいはずだ。

ここ数年、ニュージーランドでは一連の驚くべき判決が下され、国際的な波紋を呼んでいる。2017年、ワンガヌイ川に法的人格を認める判決が下された。（…）現在、この川と、山から海までのこの川にまつわるすべての物理的要素と理念的要素は「不可分の生きた存在」として認められている。」

「生態系の危機は、人間を超えた世界との関係について、わたしたちを新しい考え方へ（というより古来の考え方へ）導いてるように見える。その考え方は、問題の核心へわたしたちを向かわせ、危機の大本になっている亀裂をどうすれば修復できるかを示唆し、より豊かな未来を想像する力を与えてくれる。それは資本主義の古い教義（ドグマ）から解放され、生命ある世界との互惠関係に根差す未来だ。生態系の危機は、求心的な政策対応を必要とする。高所得国はエネルギーと資源の過剰な消費を削減し、クリーンエネルギーへと急速に転換しなければならぬ。また、永続的な成長ではなく、人間の幸福と生態系の安定を重視するポスト資本主義経済へ移行しなければならない。しかし、それ以上に必要とされるのは、生物界との関係についての新しい考え方だ。」

「結局のところ、わたしたちが「経済」と呼ぶものは、人間どうしの、そして他の生物界との、物質的な関係である。その見解をどのようなものにしたいか、と自問しなければならない。支配と搾取の関係にしたいだろうか。それとも互惠と思いやりを満たすものにしたいだろうか？」

（「謝辞」より）

「脱成長という考えは、わたしたちを夢から目覚めさせる。詩人ルーミーはこう記している。「座って、じっとして、耳を傾けなさい。あなたは酔っていて、わたしたちは屋根の端っこにいるのだから」もっとも、脱成長が意味するのは、進んで惨めな生活をしたり、人間の可能性に厳しい限界を設けたりすることではない。むしろ正反対で、豊かに生き、自分たちの行動とその理由について、より高いレベルの意識に到達することなのだ。

しかし夢は強力だ。夢から逃れるには、心に刻み込まれた轍、文化に焼きつけられた前提、政策を形づくるイデオロギーから逃れる必要がある。それは生易しいことではなく、勇氣と鍛練を必要とする。わたしにとっては長い旅であり、執着点ははるか先だ。それでもわたしは一歩ずつ前進している。そうできるのは、わたしを轍から引き上げ、世界を眺める新しい方法を示してくれる仲間の支えがあるからだ。」

【目次情報】
はじめに　人新世と資本主義
第1部　多いほうが貧しい
第1章　資本主義――その血塗られた創造の物語
第2章　ジャガノート（圧倒的破壊力）の台頭
第3章　テクノロジーはわたしたちを救うか？
第2部　少ないほうが豊か
第4章　良い人生に必要なものとは何か
第5章　ポスト資本主義への道
第6章　すべてはつながっている
謝辞
原注

◎ジェイソン・ヒッケル
経済人類学者。英国王立芸術家協会のフェローで、フルブライト・ヘイズ・プログラムから研究資金を提供されている。エスワティニ(旧スワジランド)出身で、数年間、南アフリカで出稼ぎ労働者と共に暮らし、アパルトヘイト後の搾取と政治的抵抗について研究してきた。近著The Divide: A Brief Guide to Global Inequality and its Solutions(『分断:グローバルな不平等とその解決策』、未訳)を含む3冊の著書がある。『ガーディアン』紙、アルジャーラ、『フォーリン・ポリシー』誌に定期的に寄稿し、欧州グリーン・ニューディールの諮問委員を務め、「ランセット 賠償および再分配正義に関する委員会」のメンバーでもある。

◎野中 香方子(ノナカ キョウコ)
お茶の水女子大学文教育学部卒業。主な訳書にアイザックソン『コード・ブレーカー(上下)』（共訳、文藝春秋）、サイクス『ネアンデルタール』（筑摩書房）、ヴィンス『進化を超える進化』（文藝春秋）、ウィルミアトーランド『脳メンテナンズ大全』（日経BP）、プレグマン『Humankind 希望の歴史(上下)』（文藝春秋）、シボニー『賢い人がなぜ決断を誤るのか?』（日経BP）、ズボフ『監視資本主義』（東洋経済新報社）、イヤールリー『最強の集通力』（日経BP）、メディア『ブレイン・ルール 健康な脳が最強の資産である』（東洋経済新報社）ほか多数。

装幀家・菊地信義は二〇二二年三月
七八歳で亡くなっている

一万五千点余の本の装幀を手掛けたが
その装幀の多くは
ひとめで菊地信義によるものだとわかる

神奈川県近代文学館において
二〇一四年七月に
「装幀＝菊地信義とある『著者50人の本』展」
と題して行われた装幀展が開催された際の
「装幀の余白から」と題された講演が
『装幀余話』の最初に収録されているが

そこで語られているのは
装幀家ならではの視点からの
「本を読む」という行為についてである

講演の最初に「結論めいたこと」ということで
「本というのは人の心をつくる道具だ」
ということが語られているが

その「心」は
本から得た知識でつくられるものではなく
「むしろ、言葉を読んでも物事や他者を
知ることはできない」
「本を読めば読むほどある種空白になる」
そのことをふまえて本を読むことで
「静まった心」がもたらされるという

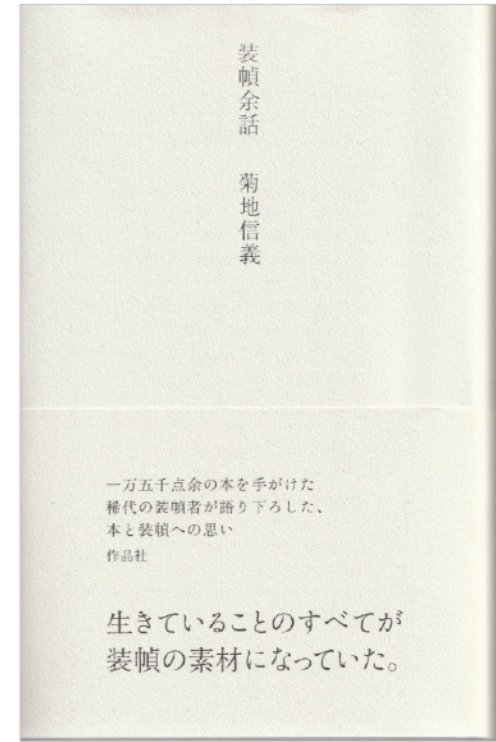
主に文学の言葉とそれが収められた本について
示唆されているのだが
その「もっとも根本的な仕事は、
「言葉にならない言葉がある」
ということを伝えることで、そのためにこそ言葉がある」

言葉には表と裏があって
表とはその通り言葉の表面的な意味だが
裏とは「なぜこの言葉がこのように使われているのか」
といった形で問い直すことではじめてわかる意味」であり

その表と裏がひとつになってはじめて
「言葉」が成立するのだという



■菊地信義『装幀余話』（作品社 2023/3）



本を読むといえは
ふつうはその本の内容について
云々されることが多いが

装幀家である菊地信義の視点は
本や言葉をその物質性
つまり視覚・触覚・嗅覚・聴覚・味覚といった
五感すべてにおいてとらえることでひらかれてくる
いわば生きていることそのものとしての
「心」をつくるというものだ

そうした「人の心をつくる道具」としての視点からすれば
タブレットのような端末を使った
電子書籍とその言葉というのは
「伝達性」の側面だけを利用した
「決められた意味を担った消費財」である

つまり言葉の「裏」は必要とされない
まさにチャットGPTの言葉には
「裏」などは存在しないように

そうした言葉しか使わないとしたら
人にも「裏」がなくなってしまうことにもなる

「裏」とは「言葉にならない言葉」であり
それこそが「言葉」が「言葉」である存在理由なのだが

「裏」がない言葉だけの人間
ディベートや論破やエヴィデンスやだけの
言葉の表だけに依る人間は
ある意味ですでに
生きた人間ではなくなっているのかもしれない

■菊地信義『装幀余話』（作品社 2023/3）

（「序 装幀の余白から」（於：神奈川県近代文学館、二〇一四年七月五日）より）

「最初に、結論めいたことを申し上げておきます。「本というのは人の心をつくる道具だ」ということです。といっても、本から読み取った知識で心ができるというわけではありません。むしろ、言葉を読んでも物事や他者を知ることはできない、それを知ること、了解することが大事であって、それを了解した上で本を読む。そうすると、そこに「静まった心」がもたらされる。その「静まった心」こそが一人ひとりの人生、現実をリアルに生きる心なんだと思います。つまり、本を読むということは、知識を身につけたり、心を涵養したりするのではなく、逆に、本を読めば読むほどある種空白になるというか。そのあたりのことを手を変え品を変えお話ししていくつもりです。

本を読むという行為において、なぜそういうふうに考えるに至ったのかというと、詩であれ小説であれ、芸術性の高い文学作品の言葉というのはモノ、物体だと思っているからです。言葉がモノだとすれば、モノの表と裏があるように、言葉にも表と裏がある。では、言葉の表とは何かといえば、額面どおりの意味と考えてください。それに対して言葉の裏というのは、「なぜこの言葉がこのように使われているのか」といった形で問い直すことではじめてわかる意味です。要するに、これが「読む」という行為です。そして、通り一遍の通常の意味の表と裏に隠されたものがひとつになってはじめて「言葉」は成立する、一人ひとりの言葉に意味が生まれる。そういうものだと思います。」

「余談ですが、最近知って驚いたことがあります。さきほど、言葉の表と裏の話をしました。本の一ページ目って、紙の表なのか裏なのか考えたことがありますか？　ふつうに考えれば、一枚の紙を折り畳んでいくわけですか、一ページ目が表で、二ページ目が裏ということになる。ところが、一ページ目は裏なんだそうです。どういうことかということ、現在の紙の製造技術においても、製紙のプロセスからして紙というのはどうしても裏表が出てしまう。滑らかにコーティングしたアート紙みたいなものでもやはり裏表が出る。裏のない紙というのはありません。紙にはかならず裏表がある。

たとえば、印刷をする場合には当然一折目、一台目から刷っていくわけですが、本の一ページ目にはだいたい書名や目次扉があって、二ページ、三ページ目に目次がある。文字が少ない部分ですね。そして、紙の裏表でいえば、裏の方がザラツとしていて刷りにくい。ですから、最初は裏面のほうでインクの量とか印圧とかをチェックしておく。裏にきちんと刷れば表も大丈夫だというので次に表面に印刷をする。もっと専門的なことをいえば、一折目というのは目次などで直しが出るケースが多いから、二折目から先に刷ることもあり、本のページ目が表か裏かというのは、どちらともいえないというのが正解なのですが、ただ、紙には裏表があることを知って、「このページは表かな裏かな」と考えながら本を読むことはとても重要なんです。

ここで、本の原形ということを考えてみたいと思います。一枚の紙があって、表が表紙で裏に文字が書かれているもの、これが本の原形だと思います。なぜそんなことを考えたかということ、先ほどいったように、紙には裏表がある。では、「裏のない紙」はほんとうにないのか。実は、「裏のない紙」という認識を表出するものこそ「詩」なのではないか、ぼくはそう思っています。もっといえば、「紙には裏と表がある」と認識するのが人文知、哲学で、「裏のない紙」を認識するのが詩であり、この二つを合わせたところに小説が生まれる。つまり、人文的な知が認識する裏表のある一枚の紙には詩の源泉が潜んでいて、それを引き出すことによって小説という、物語の形ができ上がる。」

「本というのは、視覚は無論のこと、触覚、嗅覚、聴覚といった感覚から成り立っているわけですね。五感でいえば、あと残っているのは味覚ですが、本を舐めるわけではないかた本に味なんかないだろうと思うでしょうが、実は本にも味がある。最初に、「本というのは人の心をつくる道具だ」といいましたが、自分の心をつくるような本であれば、読んだらすぐに捨ててしまうのではなく、五年、十年、二十年と自分の手元に置いておくことになる。時間の経過のなかで、蛍光灯の光で紙が焼けたり、煙草を吸っている人だったら煙草の煙が付くだろうし、自分が歳をとって手足に軋みが出てくるのと同じように、本にもやはり軋みが出て、朽ちていく。その本に夢中になっていた理由も思い出せないが、目が行くことに大切なものがあることを訴えてくるのは、まぎれもなく読むという行為の後味なんです。」

「ここまで、主に本や言葉の物質性についてお話してきましたが、その物質性をないがしろにし、危うくする元凶が近年にわかに擡頭してきた、いわゆる電子メディアだと思っています。電子メディアは、本の流通、本の製作、そして読書空間という三つのステージにおいて、紙の本を駆逐していています。メディアの電子化は、この三つのステージのいずれにおいても、言葉の数ある側面のうち、伝達性という側面のみを利用している。つまり、言葉というのは決められた意味を担った消費財にすぎず、人の心をつくる道具である言葉の裏みたいなものはすべて不要だとする、そういう動きです。そこでは、読者が本の消費者に貶められている。そんなところでは、言葉の裏や言葉の物質性に気づくことができないし、まして批評性や「私」というものが育つわけがない。ぼくはそう思います。

このメディアの電子化というのは、日本の戦後の消費時代の産物です。最初は、テレビという巨大な装置が紙の本を追いやり、その最終兵器としてタブレット端末が現れる。そこで何が起きているのか？　われわれの感覚、感性、感情が奪われ続けているわけです。その証拠に、近ごろ流行りの言葉に「元気や勇気をもった」というのがあります。あれほど嫌いな言葉はないですね。元気なんてもらうモノですか？　勇気なんてもらうものですか？　これはつまり、自分の感覚、感性、意識、身体性をすべて奪われてしまって、心は人の手に渡ってしまったことを臆面もなく知っていることと同義なんです。そうとしか思えません。

それに、ぼくはあの端末というのが、どうにも嫌でしょうがない。紙の裏表を感知する貴重な指がツルツルした面で心許なげに踊っている。ために「端末」を広辞苑で引いてみると、「物のはし。すえ」と書いてある。まさに「物の端、末」の上で、紙の本をめくる指が踊らされている。それが現状です。そして、広辞苑では「端末」の次に出てくる言葉が、なんと「断末魔」なんです。なんだか、できすぎですね。ついでだからその意味も調べてみると、「梵語 marman 支節・死穴と訳す。体の中にある特殊の急所で、他のものが触れれば激痛を起こして必ず死ぬ」とある。

そんなわけで、死に直結するような端末の上での指の踊りをやめて、もう一度紙の本をめくってみませんか、という結論になるわけですが（・・・）

「近代が作りあげた教育装置まで含めて本であって、逆にいえば、大学は巨大な本だともいえる。そうやって長い年月をかけて築き上げてきた知の体系をわずか七十年ほどの消費社会が駆逐してしまったわけです。ぼくも含め寝て、戦後七十年を生きてきたわれわれは、「消費者は王様だ」などと踊らされて、おだてられて、おまけに「あなたらしい個性をつくれ」とさんざん煽られた。ところがどっこい、個性なんてものは大量消費のなかに溶かし込まれてしまい、個性なき主体、感情なき主体が構成されてしまった。挙げ句、高度資本主義時代に移行した現在、これ以上大衆を踊らせてもモノはつくれないし、売れないというので、「もう消費者はいらない」という方向に転換が図られている。要するに、「消費時代」から国家主導の資本主義体制にシフトを変えて、矢継ぎ早にいるいるな制度が具体化されている。それが現実です。

ぼくの大好きな詩人の石原吉郎の言葉に、「民主主義の根本を支えるのは人間不信だ」というのがあります。この言葉に触発されたわけではないのですが。この世界には、自分の主義主張のための爆弾を抱えて死にたい人と、冬山で本を読みながら凍死するのが夢だという人、この二通りの人間しかいないのではないか、と。そして、文学の役割というのは、爆死したい人でも凍死したい人でも、その双方に「まあ、そっちもいいだろうけど、こっちもいいぜ」「そっちもあるけど、こっちもあるよ」といい続けることなのではないか。爆死でも凍死でもない、そのどちらかに固着せずに、両方の側面を見ていくことを伝え続けるのが文学の仕事だと思うんですね。そして、その文学を支える言葉のもっとも根本的な仕事は、「言葉にならない言葉がある」ということを伝えることで、そのためにこそ言葉がある。

これは今日ずうっとお話ししてきた「言葉の裏表」という問題にもなるし、言葉というものが「静まった心」をもたらしてくれるということにも結びついていくと思います。」

なぜ悲劇は繰り返されるのか

ナチスのホロコースト
クメール・ルージュの大量殺戮
関東大震災の朝鮮人虐殺
インドネシア政権による虐殺
ルワンダ・フツ族のツチ族虐殺

それらは残虐な極悪人の仕業で
そうした悪人たちがいなければ
起きなかったことなのだろうか

森達也は集団と同調圧力によって
普通の善良な市民が
同じように普通の人を簡単に殺すのだという

そのことを本書の副題
「一人すら殺せない人が、なぜ多くの人を殺せるのか」
あるいは本書なかで
「なぜ人は優しいままで人を大量に殺せるのか」
という問いで表現している

森達也のその問いの出発点は
オウム真理教の信者達のドキュメンタリーの取材だった
そして信者たちの「屈託のない彼らの笑顔と
穏やかな対応に出会って混乱」する
そして問い煩悶する
「なぜこれほどに純朴で穏やかな人たちが、
多くの人を殺そうとしたのか。殺したのか」と

地下鉄サリン事件の際
森達也以外にも多くのメディア関係者が
そうした信者たちに接し驚いていたはずだが
メディアはいっせいに
「凶暴凶悪だから人を殺したという単純な構図に
オウム事件を押し込めた。
確かにそれはわかりやすい。でも事実とは違う」という

事件とその責任については追及しなければならないが
そこで問い報道しなければならなかったのは
その矛盾とも思えるなかで見えてくる
私たちすべてにかかわってくるものだったはずである

「凶悪で残虐な人たちが善良な人たちを殺すのではない。
普通の人を普通の人を殺す」という
現実を見据えなければならない

しかしメディアやその報道を信じた人たちは
被害者あるいは被害者になりかねない多くの善人と
「凶悪で残虐な人たち」という図式でしか
それを理解し報道しようとはしなかった

■森達也『虐殺のスイッチ／
一人すら殺せない人が、なぜ多くの人を殺せるのか？』
(ちくま文庫 筑摩書房 2023/7)

本書で示唆されているように

「虐殺に加担する男や女たちは常に集団だ。
個人ではない。集団だからこそ主語が変わる。
一人称単数である「私」や「僕」が、
「我々」とか「我が党」とか
「我が国家」などに肥大する。」

「私」という「個人」ではなく
権威ある「組織」「集団」が主語となっているので
そこに「加害」の意識はない
それを行っているときはむしろ
「正義」からそれをおこなっている

こうしたことを自覚しないまましていると
同様なことは何度でも起こる

森達也も本書でこう述べているように
「断言しよう。ならば僕たちは、同じことを繰り返す。」

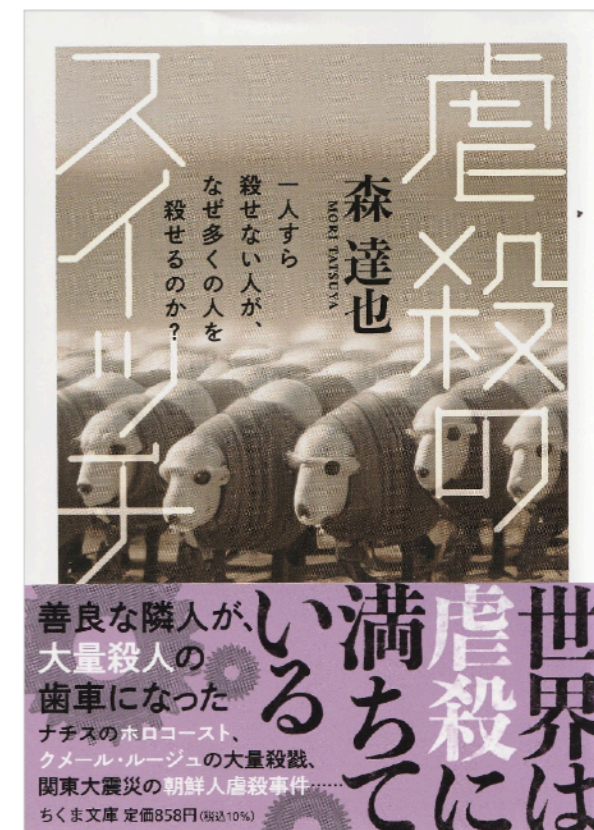
まさに「同じこと」は
現在進行形で起こっている

少し前までは「陰謀論」としか形容されず
メディアでもほとんど意図的に
報道規制が続いていたコロナワクチンの薬害だが
(いまだにデータの隠蔽や検閲も続いているが)

ようやく日本国内でも
日本医師会がそのデメリットを否応なく認め始め
メディアも少しずつ報道規制を解除しはじめている

ワクチン接種による死者や副作用による重症患者
そしてその影響としか想定され得ないだろう超過死亡者数も
想像を絶した数となっている
(それを「人口減少社会」という言葉にすり替えながら)

この影響は地下鉄サリン事件など
霞んでしまうほどのものであるにもかかわらず
いまだだれも加害責任を負おうとはしていないどころか
論点や責任主体のすり替えなどが起ころうとしている
そこでも責任主体は権威ある集団だからだ
しかも巨大な利権がそこには存在している



まさにそこでは
「なぜ人は優しいままで人を大量に殺せるのか」
なぜ「普通の人を普通の人を殺す」のか
という問いが叫ばれなければならないはずで

ワクチン接種に積極的に関わった
医療関係者を含む「善良な市民」や
接種を推進したひとたちは
それらの薬害の責任を
アイヒマンのように負う必要はないだろうか

アイヒマンはイスラエル警察の取り調べの際に
「私の罪は従順だったことだ」といったそうだが

ハンナ・アレントは
アイヒマンが罪を負うべき「唯一の理由」を
「多くの人の殺害に関与したから」でも
「残虐」さでもなく
組織に「従属して指示に従ったこと」だとしている
つまりアイヒマンの官僚としての「凡庸さ」

「僕たちは、同じことを繰り返す。」

ならばせめて
これから同じことを繰り返さないために
「従順」に従うのではなく
問いつづけなければならないのではないか

■森達也『虐殺のスイッチ／一人すら殺せない人が、なぜ多くの人を殺せるのか?』（ちくま文庫　筑摩書房 2023/7）

（「まえがき」より）

「地下鉄サリン事件が発生した一九九五年三月二〇日以降、日本社会はパニック状態になった。

（…）

この時期に僕はテレビディレクターだった。信者たちを被写体にするテレビドキュメンタリーを企ててオウム施設内に入ったとき、屈託のない彼らの笑顔と穏やかな応対に出会って混乱した。邪悪で凶暴などの要素は欠片もない。だから撮りながら考え続けた。なぜこれほどに純朴で穏やかな人たちが、多くの人を殺そうとしたのか。殺したのか。

もちろん僕以外にも記者やディレクターなど多くのメディア関係者が、このときはオウム信者に接していた。彼らも驚いたはずだ。でもその後も記事や番組など彼らのアウトプットは変わらない。凶暴で冷酷な集団であることは前提のままだ。なぜなら社会がその情報を求めているからだ、メディアはこれに抗わない。もしもこの時期にオウム信者一人ひとりとは善良で穏やかですなどとアナウンスしたり記事に書いたりしたら、そのテレビ局や新聞社はオウムを擁護するのかと罵声と批判の集中砲火を浴びていただろう。視聴率や部数は急激に下落するし、スポンサーは降りるかもしれない。会社としてメリットは何一つないのだ。

ならばなぜ僕はこの回路から離脱できたのか。

その理由のひとつは、オウム信者たちを被写体にしたドキュメンタリーを長期にわたって撮り続けたこと。結果としてはこの時期、僕以外にドキュメンタリーという発想をした人はいなかった。そしてもうひとつの理由は、撮影開始直後に番組製作会社から解雇されて一人になったことだ。

信者たちが居住するオウム施設内でカメラを手に一人うろついているのだから。一般市民とは言いがたい。でもメディアにも居場所はない。もちろんオウムに入信することもありえない。

後ろ盾がまったくない。仲間もない。徹底的に一人だった。施設内でカメラを回しながら、自問自答の時間が続く。その守護は常に一人称単数だ。テレビがナレーションなどでよく使う「我々」ではない。だから述語が変わる。変わった述語が自分にフィードバックする。視点が変わる。ならば世界は変わる。これまで見えなかった景色が見えてくる。」

「なぜ人は優しいままで人を大量に殺せるのか。

結果として社会とメディアは、この煩悶を選択しなかった。凶暴凶悪だから人を殺したという単純な構図にオウム事件を押し込めた。確かにそれはわかりやすい。でも事実とは違う。」

「何度でも書く。凶悪で残虐な人たちが善良な人たちを殺すのではない。普通の人が普通の人を殺すのだ。世界はそんな歴史に溢れている。ならば知らなくてはならない。その理由とメカニズムについて。スイッチの機序について。学んで記憶しなくてはならない。そんな事態を何度も起こさないために。」

（「5　人を殺してはいけない理由などない」より）

「日本人は組織と相性がよい。言い換えれば個が弱い。だから組織に馴染みやすい。周囲と協調することが得意だ。悪く言えば機械の部品になりやすい。だからこそ組織の命令に従うことに対し、個による摩擦が動かない。」

「人は社会的な生きものだ。組織に帰属しなければ生きていけない。だから組織そのものを否定するつもりはない。けれども組織にはリスクがある。後から考えればありえない方向に暴走する。理性や論理を失う。そして組織の失敗は個人の過ちとは規模が違う。多くの人が害される。

組織の過ちは世界中にある。過去にもあるし今もある。そして組織の一部になりやすい日本人は、組織の一部になることの危険性とリスクが身に染みていない。だからこそ多くの日本兵は壊れづらい。内省しない。自分の加害を記憶しない。組織に帰属しやすい自分への意識が薄い。組織の危うさを実感していない。しっかりと振り返って自分たちの過ちを見つめていない。都合の悪い歴史から目を逸らしている。

断言しよう。ならば僕たちは、同じことを繰り返す。」

（「8　集団と忖度　虐殺の核にあるもの」より）

「加害の記憶は薄くなる。思い出したくないかた。できることなら忘れたいかた。そして人は、忘れたい過去を実際に（すべてではないが）忘れることができる。あるいは記憶を微妙に変える。修正する。さらには、自分自身が変えたことや修正したことを忘れてしまう。

加害の記憶を忘却するメカニズムはもう一つある。加害の渦中で思考は止まる。なぜなら戦争や虐殺に加担するとき、人は個人ではない。集団や組織の一部だ。自分自身を主語にしない。主語は組織や集団だ。だから個人的な体験を記憶できない。記憶を蓄積できない。」

（「9　善良な人々が虐殺の歯車になるとき」より）

「アレントが（アイヒマンが絞首されねばならない）その唯一の理由」としたことは、「多くの人の殺害に関与したから」ではなく、ましてや（最近の日本の裁判官が判決理由で述べるような）「残虐このうえなく」とか「あまりに身勝手過ぎ」とか「更生の可能性もなく」でもなく、法と秩序を破壊して。世界に住むべき人を選択できると思いこんだナチスという政治体系に従属して指示に従ったことである。

アイヒマンの立場になれば誰でもアイヒマンになりえたことを認めながら、そのうえで絞首することを肯定すべきなのだと、アレントは主張した。裁かれるべきはアイヒマンの特異性ではなく、実務能力に長けた官僚としてのアイヒマンの凡庸さなのだ。

でもならば、この裁判が本当の意味を持つためには、アイヒマンと（おそらくはヒトラーも含めての）他のナチス幹部たちのほとんどが凡庸な存在であることを、多くの人が認識することが前提だ。

彼らは悪ではない。良き人でもある。しかし、行為は絶対的な悪だ。それを命じる組織に帰属したことが罪だ。ただし裁かれて処罰される彼らは、裁く側の私たちでもある。その認識を持ったうえで歯を食いしばりながら、有罪を宣告せねばならないのだ。

アレントの主張を、僕はこのように解釈する。とはいえ、『エルサレムのアイヒマン』刊行後のアレントは、収容所では多くのユダヤ人が殺戮に加担していたと記述したこともあって、同朋であるユダヤ人たちから「アイヒマンの免罪を主張している」「ナチズムを擁護している」などと激しく批判された。

ちなみに収容所で多くのユダヤ人がゾンダーコマンド（ドイツ語で特殊部隊を意味する）と呼ばれながら、殺戮に加担していたことは、今では事実であったことが明らかになっている。

（…）

イスラエル警察の取り調べの際に、アイヒマンは「私の罪は従順だったことだ」という言葉を残している。」

（「10　虐殺のスイッチを探る」より）

「人はなぜ優しくて善良なままで人を殺すのか。オウム施設で撮影をしてから僕はずっとこの命題を考えつづけている。」

「ナチスにしてもクメール・ルージュにしても、虐殺に加担する男や女たちは常に集団だ。個人ではない。集団だからこそ主語が変わる。一人称単数である「私」や「僕」が、「我々」とか「我が党」とか「我が国家」などに肥大する。だから述語が乱暴になる。威勢がよくなる。一人称単数に付随する躊躇や逡巡や悔恨が薄くなる。思考しなくなる。責任が回避される。こうして人は人を殺す。無自覚なままで。優しくて穏やかで善良なままで。」

「群れは全体が同じ動きをする。つまり同調圧力だ。もしも全体と違う動きをする個体がいれば、天敵から真っ先に狙われる。」

「……ここまで読みながら、あなたは気づくかもしれない。要するに、学校のいじめと虐殺は構造が同じなのだ。それが社会全体で起きる。異物と見なす理由は、動きの差異だけではない。皮膚や眼の色の違い。言葉のイントネーション。あるいは自分たちとは違う神を称えていること。理由は様々だ。というか何でもいい。

ただし、一つだけ条件がある。やられる側が少数であるか弱者であることだ。その少数派の集団を、多数派の集団が攻撃する。

こうして異物を排除した集団は。さらに同質性を集団内部に求めながら、足並みそろえて行軍する。なぜこの方向に進むのか、なぜこれほど足早になるのか、疑問はあっても誰も口にはしない。やがてその疑問も消滅する。疑問を口にしたり首をかしげたりするだけで、自分が異物と見なされる可能性があるからだ。」

（「転がる石のように　あとがきに代えて」より）

「僕は、この歳になるまで、組織と距離を置いて生きてきた。意識してそうしたわけじゃない。でも結果としてそうなった。」

「僕は、密集度が高い集団の真ん中にあることができない。なんとなく居心地が悪いのだ。だから気がつけばいつも、集団の端にいる。密集度は低い。だから真ん中よりは自由に動ける。きよるきよると視点を変えることもできる。そして気づく。世界は単色ではない。多面的で多重的で多層的だ。だから思わずつぶやく。もう少しだけ端に寄れば、もっともっと違う景色が見えるのに、もう少しだけ端に人が増えれば、世界はもう少し風通しが良くなるのに。」

（武田砂鉄「解説　考えないと考えなくなる」より）

「森達也はずっと煩悶している。少なくとも『世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい』を刊行した20年前から同じように煩悶している。煩悶、つまり、もだえ苦しんでいる。本書も同様である。」

「「自分のことは自分で決めましょう」「相手の気持ちを考えましょう」、これは小学生の時に先生から繰り返し言われた二つなので、自分はずっと覚えているのだが、なぜか、忘れてしまっている人が多い。考えないと考えなくなる。結果、大変なことになる。これまでも、大変なことを起こしてきた。森達也はその実相を伝えてくる。私たちはもっともっと考えて、もだえ苦しんだほうがいい。」